

道徳教育推進アクションプラン

「地域教材の開発」指導資料

～魅力ある道徳の授業づくりのために～



兵庫県道徳教育推進協議会
兵庫県教育委員会

は じ め に

今日のように変化が激しく、将来が不透明な社会にあっては、どのような状況におかれても主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力が求められています。そのためには、基盤となる道徳性や社会性など、豊かな人間性を育むことが重要です。

学校の教育活動全体を通して行う道徳教育が、このことに大きく関わることは言うまでもありません。と同時に、その「かなめ」としての道徳の時間が、子どもたちの心を育む上で極めて重要な役割を担っているとの認識を今一度新たにしなければなりません。

道徳の時間は子どもたちが「自分を見つめる時間」であるとも言われています。道徳の時間では、学級の仲間たちといっしょに、同じ場面の設定の中で価値に出会うことに意味があります。価値との出会いによって、一人一人の子どもが自分を見つめるだけでなく、友だちの考えと交流することによってさらにいろいろな見方や考え方に会うことができます。それらに共感し合ったり、反発し合ったりすることで、より深く自分を見つめることができるのです。道徳の時間は、意図的・計画的にこのような場が作られることに意味があります。

道徳教材は、このような道徳の時間に不可欠なものです。子どもたちが価値と出会う共通の状況を作り出す素材だからです。従って、道徳教材は、道徳の時間の深まりを決める重要な役割を持っていると言えます。

特に、郷土を対象にした教材は、自分が生まれ育った地域に生きた先人の働きと現在の自分自身との関係を認識させたり、地域の文化や伝統に対する関心を高めさせる上で重要であり、地域社会における自分の立場や在り方・これからの生き方を考えさせる機会ともなります。

本冊子は、県下各地のそれぞれの学校や地域でそれぞれの地域に関わる独自の教材の開発に取り組む際の参考資料として作成したものです。

地域に関わる様々な人々や古くから伝わる民話などをもとに、まず教材文を作り、何度も修正を加えた教材例を第3章に掲載しています。併せて、教材を開発するにあたっての過程や手順、工夫等も掲載しています。

本資料を活用し、目の前の子どもたちの心に響く身近な教材を是非各学校で作成していただきたいと考えています。また、作成した教材を使った授業の実践に各学校が積極的に取り組んでくださることを期待しています。身近な地域の道徳教材が作成され、蓄積されていくことは、学校にとって貴重な財産となります。そのことで兵庫の道徳教材が充実し、道徳の時間のさらなる活性化と道徳教育の発展に資することができるものと考えています。

最後に、本冊子の作成に当たり、ご尽力いただいた「地域教材の開発」指導資料作成委員並びに道徳教育推進協議会委員の皆さまに対し、心から感謝の意を表します。

平成18年3月

兵庫県教育長

吉 本 知 之

目 次

第Ⅰ章地域教材の作成にあたって	1
1 兵庫県における道徳教育の現状	2
2 なぜ地域教材の作成が大切なのか	4
3 地域教材作成のために	6
4 地域教材作成にあたっての留意点	8
第Ⅱ章教材作成の手順	13
1 〈中学生用教材〉 児童福祉の祖 大野唯四郎を例として	14
2 〈小学校低学年用教材〉 猿丸安時さんと奥池を例として	27
第Ⅲ章各地域の教材作成例	29
1 〈低学年用教材〉	
「トンカン トンカン」	30
「猿丸安時さんと奥池」	34
「みつくりじぞう」	38
2 〈中学年用教材〉	
「欽古堂亀祐～三田青磁をかんせいさせた人」	43
「西垣喜代次の願いをうけついで～山よ緑よふるさとよ」	47
「ふるさとの心、民話を伝える～柳田国男」	52
3 〈高学年用教材〉	
「松島興治郎～コウノトリとの約束」	56
「淡路島に酪農を～三原酪農の父 田中萬米」	62
「嘉納治五郎～柔道の父」	67
4 〈中学校用教材〉	
「『新生児に生きる』～三宅廉 パルモア病院物語」	72
「児童福祉の祖 大野唯四郎」	77
「釣針王国を北播磨に築く～小寺彦兵衛」	82
第Ⅳ章資料	89
1 「地域教材の開発」素材例	90
2 その他の参考資料	101
3 児童・生徒が調べるワークシート例	102

第Ⅰ章

地域教材の作成にあたって

- 1 兵庫県における道德教育の現状 ……………2
- 2 なぜ地域教材の作成が大切なのか ……………4
- 3 地域教材作成のために ……………6
- 4 地域教材作成にあたっての留意点 ……………8

1 兵庫県における道徳教育の現状

(1) 学校における道徳教育について

文部科学省「道徳教育推進状況調査」平成15年度（以下「道徳教育推進状況調査」という。）によると県下の学校全体の道徳の時間の平均授業時数は、小・中学校とも標準時数をほぼ満たしており、5年前の同調査から大きく改善が見られ、また、全国の平均も上回る結果となっている。

さらに、〈学校の教育活動全体を通じた道徳教育の全体計画の作成〉、〈道徳の時間の年間指導計画の作成〉については小・中学校ともにほとんどの学校で作成されている。

〈学校の教育活動全体を通じた道徳教育の全体計画の作成について〉

		小学校	中学校
作成している	兵庫県	93. 8%	94. 6%
	全 国	95. 6%	92. 7%

〈道徳の時間の年間指導計画の作成について〉

		小学校	中学校
作成している	兵庫県	99. 8%	100%
	全 国	98. 2%	97. 7%

(2) 道徳の時間についての教員の意識について

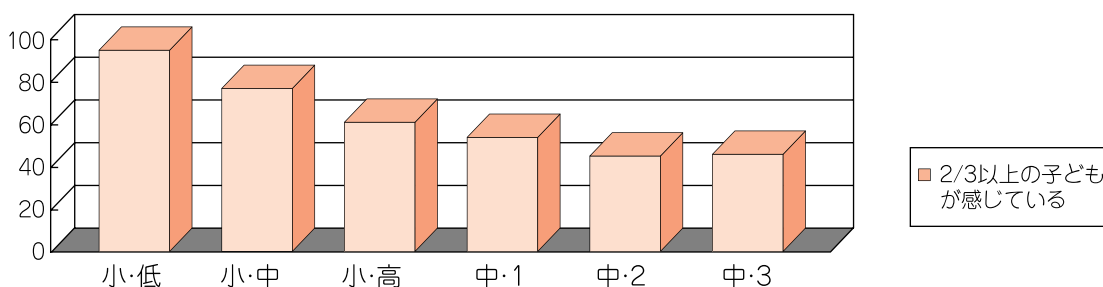
このように、道徳の時間の実施についての全体計画や年間指導計画の作成は進んできているものの、「道徳教育推進状況調査」における〈学級のどれ程の子どもが、道徳の時間を『楽しい』あるいは『ためになる』と感じているか〉についての調査に対する本県の教師の回答は以下のような結果となっている。

〈2/3以上の子どもが道徳の時間を「楽しい」「ためになる」と感じていると思っている教師〉

(兵庫県)

学年	低学年	中学年	高学年	中1	中2	中3
割合	89.4%	75.9%	60.9%	48.9%	42.3%	43.3%

子どもが「楽しい」「ためになる」と感じていると思っている教師(兵庫県)



学年が上がるにつれて児童生徒が『楽しい』あるいは『ためになる』と感じている教師の割合が低下し、子どもの年齢が上がるほど、道徳の時間に教師が手応えを感じられていない現状が見られる。

このことは、道徳教育の効果が比較的はっきり表れるものと、短期間では多くを期待できないものがあることや、児童生徒の道徳性の発達、取り巻く社会の影響を大きく受けるなどの道徳教育の特性とも関係しているものと考えられるが、どの学年にあっても子どもの心に響く道徳の時間にしていくためには、教師自身が道徳の時間の意義を理解し、やりがいのある時間として手応えを感じられるように常に様々な工夫を重ねていくことが必要である。

(3) 魅力ある道徳の時間とするために

道徳の時間では通常、子どもが資料に出会い、資料中の人物への共感などを通して道徳的価値の内面的な自覚を深めていく。従って、児童生徒の心に響く魅力的な資料を選択、開発し児童生徒に提示することが、道徳の時間の成功の重要な要素となる。

「道徳教育推進状況調査」では〈道徳の時間の指導を一層充実させるために各教師に求められていることは何か〉について、県下の小学校の約7割、中学校の約8割が「教材の分析、魅力ある教材の選定及び開発・活用の工夫」と回答している。

また、〈実際に学校として重点をおいて取り組んでいることは何か〉についても、県下の小学校約6割、中学校約7割が「教材の分析、魅力ある教材の選定及び開発・活用」と答えている。

しかし、実際に各学校で〈道徳の時間の指導で使用している教材〉については、文部科学省や教育委員会または民間の出版社が作成した読み物資料等を使用している学校が多く、自作の読み物資料の使用は小・中学校とも約4割となっており、各学校においてはなかなか自作資料の作成が困難な状況がうかがえる。

子どもたちが『楽しい』『ためになる』と感じているという実感をもって道徳の授業を進めていくための工夫として、各学校において子どもたちが興味を持って道徳的価値の自覚を深めることのできるような身近な地域教材を開発することが重要な方策の一つとなると考える。



特に学年が上がるに従って道徳の時間に使用する教材の役割が大きくなっていくことから、発達段階に応じて、多様な資料の開発や効果的な活用に努めることが大切となる。

また、そのことが総合的な学習の時間や特別活動、トライやる・ウィークなどでの体験活動で子どもたちが地域から学んだことと道徳の時間を関連させるための重要な材料ともなえると考えられる。

〈道徳の時間の指導を一層充実させるために各教師に求められていることは何か〉（兵庫県）

	小学校	中学校
教材の分析、魅力ある教材の選定及び開発・活用等の工夫	70.1%	75.9%
児童生徒の悩みや心の揺れ等を含め考えの的確な把握や理解	65.3%	61.9%
児童生徒が自らの成長を実感し、課題や目標を見いだせる支援	42.8%	34.5%
体験活動を生かす工夫	38.1%	35.6%
児童生徒の道徳性に関してその成長等を把握し指導に生かす工夫	21.0%	21.6%
指導過程の適切な構成方法の工夫	14.7%	14.0%
多様な指導技術の修得	14.3%	21.9%
道徳教育の目標や道徳の時間の役割等基本的なことの理解	14.7%	11.2%

〈実際に学校として重点をおいて取り組んでいることは何か〉（兵庫県）

	小学校	中学校
教材の分析、魅力ある教材の選定及び開発・活用等の工夫	61.1%	74.5%
児童生徒の悩みや心の揺れ等を含め考えの的確な把握や理解	62.8%	58.6%
体験活動を生かす工夫	48.0%	36.3%
児童生徒が自らの成長を実感し、課題や目標を見いだせる支援	33.5%	22.7%
他の教師等との協力的な指導や連携	21.3%	30.6%
指導過程の適切な構成方法の工夫	17.1%	15.5%
道徳教育の目標や道徳の時間の役割等基本的なことの理解	17.0%	16.9%
児童生徒の道徳性に関してその成長等を把握し指導に生かす工夫	14.7%	16.5%

〈道徳の時間の指導で使用している教材（平成15年度使用予定を含む）〉（兵庫県）

	小学校	中学校
「心のノート」	98.2%	87.1%
都道府県や市郡町教育委員会作成の読み物資料	94.0%	87.8%
民間の教材会社作成の読み物資料	74.0%	61.2%
文部科学省（旧文部省）作成の読み物資料	69.7%	55.0%
映像コンテンツ（テレビ放送、ビデオテープ、DVD、スライド、等）	66.5%	70.9%
書籍・雑誌（随筆、評論、小説、詩、伝記等）	52.4%	61.9%
新聞記事	47.3%	70.9%
自作（学校作成を含む）の読み物資料	35.3%	41.7%

2 なぜ地域教材の作成が大切なのか

道徳の時間の目標の達成を図り、児童・生徒に充実感をもたらすような生き生きとした指導を進めるためには、児童・生徒の心に響く資料を選択し、多様な資料の開発と効果的な活用に努めることが大切である。（小学校学習指導要領解説道徳編第4章第5節及び中学校学習指導要領解説道徳編第4章第5節）

（1）子どもたちを取り巻く生活スタイルの変貌と道徳教育の課題

今日の変動の激しい社会においては、児童生徒の自然な道徳性の発達を阻害している現象も多く指摘されている。

ア コンピュータや携帯電話等の情報メディアの急速な発展と低年齢層への普及による価値観形成への影響

イ 物質的に豊かな社会の実現による物質的な価値や快楽の優先

ウ 私生活主義の広がり（身の回りの社会や地域、郷土、国といったものへの無関心）

エ 地域社会との関わりの希薄化（地域に根ざした共同体の弱体化）

オ 生活や地域に根ざした自己形成の困難化



とくに私生活主義の広がりにより、自分のことだけが保護者も子どもも大きな関心のもととなる傾向が現れ、人とのかかわりを豊かに発展させたり、道徳的な価値の自覚を深めたりすることが従来に比べ難しくなっている現状もある。

そのような状況の中で、子どもたちに道徳的価値を考えさせ、地域や人とのつながりの自覚を深めるきっかけとして、郷土の発展に尽くした人々や地域の民話などに題材を求めることには大きな意味がある。

また、このように社会の変化のスピードが加速化し、先行きが不透明な時代にあっては、子ども自身が少し先の自分のことや、自分が大きくなったときのことを考えるににくい状況も生じてきている。平成16年度に本県が実施した「総合的な基礎学力調査」における「将来の夢や希望がありますか」という問いに対して小学校5年生では21%、中学校2年生では34%の子どもが「考えているが決まっていない・考えたことはない」と答えている。子どもたちが自分自身の将来の在り方を考えるきっかけとするためにも身近な題材や内容を教材として子どもたちに提示することが重要である。

なお、日本・アメリカ・中国の高校生に対する「あなたの将来」についての調査では以下のような回答状況となっている。

〈あなたの将来は次のどれになりそうですか〉

	日 本	米 国	中 国
1 輝いている	23.8%	45.8%	33.8%
2 まあまあよい方だが最高ではない	30.6%	23.4%	45.8%
3 あまりよくない	10.0%	1.1%	4.7%
4 だめだろう	6.2%	0.4%	0.8%
5 わからない	28.6%	27.7%	14.6%
無回答	0.8%	1.6%	0.2%

（2005年3月財団法人日本青少年研究所「日・米・中3カ国の高校生への質問紙調査」）

（日本は全国で11校抽出、アメリカ及び中国は12校抽出）

（2）子どもたちは身近な人物を通して、郷土や地域に関心を持つ

子ども自身が主体的に様々な価値について自覚を深め、自分の考えを作り上げていくのは、身近にいる具体的な人物を通してであることが多い。その中でも、子どもにとって強い影響を与えるのは、まず最も近い存在である保護者である場合が多い。子どもは自分と身近な人との強いつながりをもとにしながら、自分から少しずつ遠いものを見ていく力を身につけていく。学齢期の子どもにあっては、多くの時間を教

員と共に過ごしており、保護者と同様に重要な役割を果たす大切な存在といえる。

さらに、子どもたちは郷土や地域の身近な人の具体的な生き方から、社会の中での自分自身の生き方を考え、道徳性を耕していくのである。同様に、身近な郷土の先人が自分たちと同じように小さいときに実際にどんなことを考えながらどういうことをしていたのかを知ることは子どもたちの日常生活との関連が強く、また観念的でなく現実とのリアルなつながりの中で価値をとらえることができるため、感動や共感を呼び起こし易く、子どもたちの心を揺さぶることが期待できる。

副読本等で取り上げられる題材にはフィクションも多いが、郷土の先人のエピソードはまぎれもない事実であり、子どもたちが自分を考える絶好の機会となるのである。



このように郷土の先人の伝記、逸話などの題材を取り上げることは、その生き方、考え方を学ぶことによって、子どもたちが道徳性を養い、併せて郷土に対する深い理解と愛着を持つ上でその意義は大きい。子どもたちは、郷土を愛し郷土に尽くした偉大な人物を通して郷土愛や社会に広く尽くそうとする心を育むことができるのである。さらにそのことが、将来の子どもたちの国際的なものの見方や考え方にもつながっていくものと考えられる。

3 地域教材作成のために

(1) 指導者が地域を知ること

生活科や総合的な学習の時間、また社会科の地域学習等で地域を学習する機会は以前より確実に増加している。そのために、教師が校区を予めよく知っておくことが必要となっている。

時間を見つけて、カメラやビデオ等を持って、地域を歩いてみると、道ばたの道標や石碑、用水路、歴史的な建物、遺跡、自然など、道徳の時間の資料としてもヒントとなりそうなものが至る所に存在することに気がつくはずである。

また、その際、自分の名刺のようなものを持って、地域の方に気軽に声をかけてみると、思いもよらなかった地域に伝わる人物や事物の話や史跡等の由来を教えてもらえたり、そこからさらに人間関係が広がり、地域とのつながりができたりもするものである。

日常から教材を探すことを意識すれば、だれもが知っている人だけでなく、地域にはこんなにも子どもたちに知らせなければならない価値のあるもの、地域の文化や人が存在していることに気づき、また、新たに掘り起こすことができる。

また、各地の資料館や図書館、総合教育センター、教育委員会等を活用することで学校では気がつかなかった素材が手に入ることも多い。

〈素材例〉

- 郷土で生まれ、郷土や社会の発展につくした人物の伝記やエピソード
- 郷土の文化、伝統、生活、福祉の向上のために働いた先人
- 郷土の文化、伝統、慣習など、郷土への愛着や誇りを育てるものや、郷土に伝わる伝承や民話



(2) 日常のちょっとした努力で

「新聞記事」「テレビ番組」「写真」等には、道徳の時間の題材となるものも多い。何気なく見過ごしていることが多いが、ちょっとした意識を持っていることで、そこから道徳に関して子どもたちに伝えることのできるメッセージを感じ取ることができることがある。

何かを感じた時のために、新聞記事や雑誌等のスクラップをしたり、テレビはいつでも録画できるように準備をしておいたり、また、書店などに行く時には、頭のどこかに道徳の視点を置いておくなどの意識を持っていたほしい。

併せて、教師の恣意的なものにならないようにするためには、常に道徳の内容項目を念頭においておくことが必要である。

子どもたちに伝えたいと感じた題材を見つけたら、資料を開発し、教材化し、道徳の授業を構想してみる。教師が子どもたちに伝えたいと感じたメッセージをもとにして資料を自作することにより、年間指導計画を考慮しながらも、目の前の子どもたちに必要な資料を最適なタイミングで授業に用いることができ、より生き生きとした道徳の時間が期待できる。そのようなちょっとした努力から、「子どもたちに伝えなければならない何か」を感じる教師自身の感性も磨かれていく。

(3) 道徳の授業力の向上を図る方法の一つは資料づくり

実際に資料を作成する過程で大切なポイントがたくさん出てくる。

また、作成する教師の理解や考え方も深まる。自分なりの道徳の授業への考え方も出てくる。

資料を自作する過程で、子どもたちの価値をめぐる状況を明らかにする必要がある、授業の実際も予想できることから、資料を自作することそのものにも大きな価値がある。

現実的にはすべての資料を自作することは困難であるが、資料を作成する過程で得ることのできる教師自身の内省と子どもの姿との対話は既成の資料を使用する際にも生かされるものである。

(4) 全国どこでも使える資料に

地域教材はその特定の地域で使用することで、プラスアルファの効果が期待できるものであるが、さらに優れた資料は全国どこでも使えるという特徴をもつ。

学校や地域の財産として、県下各地で地域の独自の特色ある教材が次々と開発され活用されることを期待したい。

4 地域教材作成にあたっての留意点

(1) 道徳の時間における資料の具備する要件

道徳の時間における資料は、児童・生徒が道徳的価値の内面的な自覚を深めていくための手がかりとして極めて大きな意味をもっている。また、児童・生徒が人間としての在り方や生き方などについて多様に感じ、考えを深め、学び合う共通の素材として重要な役割を持っている。

したがって、道徳の時間に用いられる資料の具備すべき要件として、まず次の点を満たすことが大切である。

〈必ず具備することが必要な要件〉

- ア 人間尊重の精神にかなう資料
- イ ねらいを達成するのにふさわしい資料
- ウ 児童・生徒の興味、発達に応じた資料
- エ 多様な価値観が引き出され深く考えさせられる資料
- オ 特定の価値観に偏しない中立的な資料

(小学校及び中学校学習指導要領解説第4章第5節)



また、教師自身の心に響いてこそ、よい資料であるといえる。児童・生徒が学習に意欲的に取り組み、学習への充実感をもち、道徳的価値の内面的な自覚を深めることができるようにするために、さらに次のような要件を具備していることが大切である。

〈具備することが望ましい要件〉

- ア 児童・生徒の感性に訴え、豊かな感動を与える資料
- イ 人間の弱さやもろさに向き合い、生きる喜びや勇気を与えられる資料
- ウ 生や死の問題、人間としてよりよく生きることを深く考えさせる資料
- エ 体験活動や日常生活等を振り返り道徳的価値の意義や大切さを考えさせる資料
- オ 多様で発展的な学習を可能にする資料

(小学校及び中学校学習指導要領解説第4章第5節)

さらに、一人一人の児童・生徒がその発達段階に応じ、自分の大切さとともに他の人の大切さを認めることができるような人権感覚を身につけていくことができる資料であることも必要な要件である。

(2) 地域教材（人物を中心として）作成上のポイント

ア ねらいを明確にすること

- ・ ねらいの設定にあたっては教師自身が道徳の内容項目をまずしっかりと理解し、それに照らして考えることが必要である。
- ・ 子どもたちの道徳的思考の広がりや考慮し、その人物の在り方、生き方、子どもの時の生活や考え、様々なエピソード等を考慮して、「郷土愛」「一人一人の生き方・在り方につながるもの」等、ねらいを明確にすることが必要である。

イ 発達段階や学年段階に対応していること

- ・ 子どもの発達段階や学年、学級の課題を考える。
- ・ だれもが読みやすく理解しやすい内容になるよう工夫すること。（語彙、抽象度、漢字、分かち書き、生活の範囲の広がり、文章の長さ等、1学年程度は難易度を下げるように配慮する。）
- ・ 専門性のあるものや特殊なことについては、注釈や解説を付すこと。
- ・ できるだけ具体的に、また展開はシンプルに記述すること。資料の展開は単純明快である必要がある。登場人物が多すぎたり、場面の展開が複雑になると学習が混乱する場合がある。
- ・ 子どもの行動の範囲や生活の場は年齢とともに広がっていく。思考や想像力の広がりも同様であり、タイミングに合わせ子どもの考えることのできる範囲で指導できるよう配慮することが大切である。
- ・ 特に文章の長さが子どもたちの実態にかなっていることが大切である。考えさせたい価値を明確にしたうえで、子どもの実態にかなった分量であるかどうかを検討する。
- ・ 効果的に挿絵や写真を配することも重要である。



ウ 事実に基づいていること

- ・ 取り上げる題材は基本的には事実であることが大前提である。（家族やその人物をよく知る人に確認することが必要）

事実と食い違くと郷土資料として作成する意味がない。ただし、子どもたちに考えさせたり、葛藤させたり、また話し合ったりする場面を設定するために、ある程度の柔軟性を持って作成することも必要である。
- ・ すでに伝記やその人物について述べた文章がある場合はそれを活用することもできる。また、それらの資料を利用しながら、子どもたちの実態に合わせて新たに書き下ろしを行うことにも授業を行う上で大きな意味がある。
- ・ 通常は既にある文章の活用、要約、抜き出しをする場合が多い。子どもたちの実態を考慮した準書き下ろし程度が教材としてよい場合が多い。

エ 具体的なエピソードについての情報をたくさん収集して、それを生かすこと

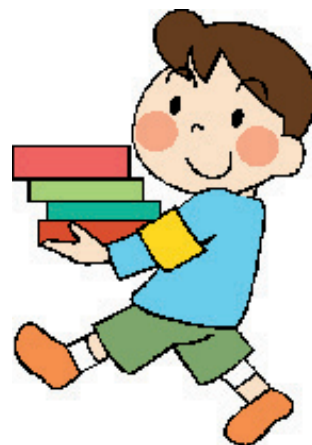
- ・ その人の子ども時代の友だち関係、親子関係、学校での様子、特定の人との出会い等、できるだけたくさんの情報を収集して取り入れる。
- ・ その際、地域にある「郷土資料館」「図書館」その他各種の資料館等で貴重な資料を収集できることが多い。また、地域の歴史に詳しい方等についての情報も得られる場合がある。できるだけ多くの情報網を駆使して、まずは多くの生の資料を収集することが重要である。
- ・ 人物の単なる紹介になっては意味がない。
- ・ 特に人物の経歴の年譜にならないよう配慮することが大切である。

オ 悩みや壁を克服できたことを中心に作成すること

- ・ 大きな功績をあげた人物であっても、人である限り、必ず悩みや壁にぶつかっている。それらを克服できたことが偉大なのだという観点が必要である。そのことでより身近にその人物を感じ、また、それを通して自分の在り方につなげることが可能になる。
- ・ 我慢して困難を克服することは、今の子どもたちが苦手とするところである。ぐっところえてやり抜くことで物事を成し遂げることができたという人物の生き方は、今の子どもたちに是非知らせたい大切なことである。
- ・ それらを子どもたちに実感としてとらえさせるためには、教材に登場する人物の生き方や考え方の変容に共感的に理解したり、あるいは反対に問題を発見して議論したりするなど、課題追求の手がかりを見つけ、多様な考えを得るための内容を含むことが条件となる。

カ 実際に授業で使用することを考慮しておくこと

- ・ 道徳の1時間授業の中で扱えることを原則とする。
- ・ 導入・展開（発問、話し合い、自己の振り返り、価値の自覚の深まり等）・終末（まとめ）といった授業展開を考えながら全体構成を考える。
- ・ 授業展開の方法を考えておく。
 - ☐ 補助教材やメディア（ビデオ、写真、紙芝居等）の作成や活用。
 - ☐ 話し合いを行う場面の設定。
 - ☐ 役割演技、劇化等の指導方法の工夫。等
- ・ 終末については、人物を扱った教材についてはクローズドエンドとなる場合が多いが、教材としてはオープンエンドとして、子どもたちの課題意識を持続させたり、道徳以外の生活場面等にも広げたりすることができるような工夫もできる。
- ・ 挿絵や写真は教材に不可欠であるが、その作成については、個人ではなかなか難しい面もあるため、学年や学校その他、様々な協力体制の構築も必要である。
- ・ 短い期間で完全な資料を作り上げることは難しい。学年で授業を重ね、教師間で協議しながら、版を重ねて改訂していくことが大切である。



- ・ また、実際に授業を行い、修正を図ることで学校及び地域にとって、貴重な財産となる。

キ 教材文の構成を工夫すること

- ・ 一般的には教材文に「起」「承」「転」「結」があることが多い。
- ・ 全体の中にいくつかの場面を設定し、場面ごとの「出来事や状況、背景、登場人物の言動」や「心の様子」を記述する。
- ・ 中心場面となる登場人物の考え方や生き方が変容するところ（道徳的に変化する場面）では、「心の様子」をあえて記述しないことで、子どもたちに登場人物の心の動きを考えさせるといった仕掛けが必要である。
- ・ 子どもたちに登場人物の心を考えさせる手がかりとして言動の前に副詞(句)を置くことで子どもたちの思考を深めることができる。

ク 著作権等に関する配慮をすること

- ・ 既刊資料を使用する場合に著作権はどこ（だれ）にあるのかを確認する。
- ・ 出典、出所について明確にし、教材に記載しておくことが必要となる。
(ただし、原形が残らないところまで手を加えた場合はその必要はない。)

著作権法第35条（学校その他の教育機関における複製等）

学校その他の教育機関において教育を担当する者及び授業を受ける者は、その授業の過程における使用に供することを目的とする場合には、必要と認められる限度において、公表された著作物を複製することができる。ただし当該著作物の種類及び用途並びにその複製の部数及び態様に照らし著作権者の利権を不当に害することとなる場合はこの限りでない。

〈通常著作物を引用する場合の手続例〉

- ① 著作物については発行者にまず連絡をとり、その後の手続について相談する。（版權がどこにあるのか等もこの段階で分かる。）
- ② 書面で引用する旨を依頼する。（発行者から様式を示される場合もある。）
- ③ 条件を附して引用を許可する旨の文書が発行者から送付される。
(条件例：出典を明記すること、できあがった作品を送付すること等)
- ④ 完成した作品を発行者に送付する。

※ その他、人物等の関係者等があれば取材する際に承認を得ることが好ましい。

ケ 教材化する上で一般的に留意が必要なこと

- ・ 原則として生存者を除く。
- ・ 人権にかかわる内容は慎重に扱う。
- ・ 政治的中立性を侵さない。
- ・ 特定の宗教・宗派に偏らない。
- ・ 個人の営利に関するものを避ける。
- ・ 用語を適切にする。



コ その他

- ・ 昔の言葉遣いや言い回しについては、これだけは必要という部分を除けば、大胆に現代の表現に変えた方が子どもには理解しやすい。ただし、孫と祖父の会話の違い等の内容の展開に関わる部分の表現は残す必要がある。
- ・ その地方の言葉（方言）については必要に応じて適宜使用するが、標準語を（ ）で示すなどの配慮も必要である。
- ・ 用字、用語は国語の学習指導要領及び教科書に拠ること。
- ・ 民話で地域によって内容が一部違って伝えられているような場合、「定かではありませんが」「～と伝えられています」等のことばを冒頭か末尾につけるなどの工夫が必要である。

第Ⅱ章

教材作成の手順

1 〈中学生用教材〉

児童福祉の祖 大野唯四郎を例として ……14

2 〈小学校低学年用教材〉

猿丸安時さんと奥池を例として ……27

地域教材作成の手順

教材作成にあたっては、まず、各種の文献や地域の資料館等を利用したり、直接関係者に取材を行ったりして、具体的なエピソードや人間関係、悩み苦しんだこと等、できるだけ多くの資料を収集することから始める場合が多い。



それらの情報から、子どもたちに考えさせるねらいを絞り、教材文を作成することになる。情報収集が充実したものであればあるほど、子どもたちに伝えたい価値も多様なものとなり、ややもすると文章が長くなりがちである。

焦点化された教材とするためには、作成した教材文を削っていく作業を繰り返すことが必要となる。

1 〈中学生用教材〉児童福祉の祖 大野唯四郎を例として ～初稿から最終原稿に至る検討のプロセス～

（中学校用の教材文についてその全体について検討を加えた例）

最近の少年犯罪の低年齢化、凶悪化を見聞きするにつけ、「命を大切にする心」を子どもたちに育みたいと常々考えていた。そんなとき、遠い話でなく、身近な地域に多くの障壁を乗り越えて児童福祉の先覚的な事業を行った大野唯四郎という人物がいたことを知り、何が大野をそこまで突き動かしたのかを生徒に考えさせることで命を大切にするとはどういうことかを考えさせたいと思いこの題材を教材化することとした。

【初稿作成にあたって】

取材を重ね、中学生用の地域教材を作成するにあたって、次のような点を考慮し、わかりやすく親しみやすい内容にすることを目指した。

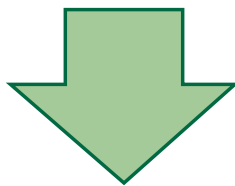
- ① 江戸末期の時代の状況がよく分かるよう説明を加えながら書くこと。
- ② 主人公が、ただお金を持っていたから民衆に施すことができたのだというとらえ方ではなく、人間愛にもとづいた決意と信念で社会事業を行ったのだというとらえ方ができるような構成・表現にすること。
- ③ 大野唯四郎の日記の中にある言葉をできるだけ忠実に再現して、主人公の葛藤や決断が読み取れるようにすること。
- ④ 時代が古いので、教材文全体が古い過去の話で終わってしまわないように書くこと。特に、主人公が身近に感じられるような少年時代を加えること。

さらに、以下のような点に考慮して初稿を執筆した。

- 当初、中学生用の読み物教材をということで、A4版4ページ程度の分量となるように考えた。
- 図や写真も挿入して、4ページ程度となるよう考えた。
- 中学生が親しみを持てるよう会話を多くし、主人公が現在の中学生と同じ年頃に何を感じ、何に志を立

てたのが分かるように、少年時代の出来事と成人してからの大きく二つの構成とした。

- 中学生の年齢の子どもたちに学問をすることの真の意味について自分なりに考えさせたいと思った。



【第2稿への修正について】

ア 文章の長さを検討すること

- ・ 全体量をもう少し短くしたほうが中学生にとっても抵抗なく読み進められる。
- ・ 最初のエピソードが長い。お坊さんの話をもっと短くする。

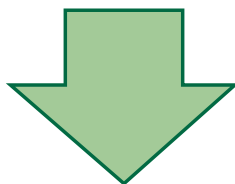
イ 表現を工夫すること

- ・ 親戚の人に言った言葉「私が幼少より習い覚えたことは、・・・その陰を慕って安らかに憩うに違いない。」を平易な言葉に直す。
- ・ 唯四郎はこう言いました。「この考えに誰も反対しませんでした。」「もう、何も言えなくなりました。」などと親戚の者の反応を書く。

ウ ねらいを明確にすること

- ・ 大野唯四郎が孤児救済に立った理由の一つとして、唯四郎の人間愛を培った少年期の学びを取り上げたかった。学ぶ目的を、時代を大局的に見据えて捉えようとする大野と、目の前の小さな命を大切にしようとする和尚。そして、大野の目を見開かせた植木環山の「学問の目的」を描くことで、後の大野の堅固な意志が培われたことを表したかった。
- ・ このエピソードは大野の日記に事実として記されているが、真之介と八太郎のやりとりは創作であることから削除する。
- ・ 主人公は、建前的な考え方しかしていなかった。学問のための学問ではなく、世の中のための学問が必要なことを先生が示してくれたことが、後に唯四郎が生涯をかけて社会事業に取り組むきっかけとなったことを強調する。

以上のような点を考慮して、第2稿の作成を行った。



以下に初稿から第2稿への修正の様子を併記する。

【初稿】

【初稿】（色文字は、第2稿で削除または整理・訂正した部分）

外国からの蒸気船が日本を訪れ、鎖国していた日本が揺らぎ始めた江戸時代の終わり頃のある日、柏原藩（現在の丹波市柏原町）の学半館塾という塾に通う15歳の少年がいました。背が高く、やせ身の体を駆って冬の本枯らしの中をさっそうと大股で歩くその少年は、土倉八太郎といました。学半館塾で儒学を学んでいた八太郎は、幼なじみで同じ学半館塾に通う真之介と一緒にぶらぶらと表通りを歩いていました。真之介とたわいもない話に夢中になっていた時、真冬だというのに寒々とした身なりをして、小さな赤ん坊を抱いて歩いている和尚の姿がふと目に止まりました。

「おい、真之介。またあの和尚、赤ん坊を抱いて歩いているぞ。どうして和尚が赤ん坊を抱いてこの寒い中を歩いているんだろうな。」

そうやって八太郎は足を止めました。

「さぁ、私にはわかりません。どこの和尚様やら、なぜ赤ん坊を抱いているのやらさっぱり知りません。」真之介が振り返って言いました。

「そうか…。何か訳でもあるのかも知れないが…。」

「そうだ、明日、塾で植木先生に聞いてみたらどうでしょう。あの温厚で実直な植木先生は人々からの信頼の厚いお方です。きっと世間のいろいろなことをご存知でしょうから。」

真之介が笑顔で言いました。

「そうだな、植木先生はほんとうによいお方だ。儒学に限らず様々な学問に精通しておられる。真之介が言うように、多くの人が植木先生を敬慕している。きっと町の者もいろんな相談事を植木先生に持ちかけているに違いない。明日聞いてみるとしよう。」

「そうですね。」

二人は気が晴れたようにまた歩き始めました。八太郎は両腕を青空に突き出して大きく伸びをしながら真之介に言いました。

「なぁ、真之介。私たちのような農民が学問を学ぶことができるなんて、ほんの少し前では考えられなかったことだけど、今は学ぼうとする志があれば学ぶことができる。」

ほんとうにいい時代になったものだ。私はもっともっと学問を身につけてこの日本国を背負って立つ人になりたいと思う。」

「大丈夫ですよ、八太郎さんなら。なにしろ、一を聞けば十を知る、昨日の講義は今日の持論で師に迫る、学半館の秀才中の秀才ですから。」

真之介が八太郎の背をたたいて笑いました。

「秀才ではない。私は学べるときに学んで、議論を交わし、世の人々のためになりたいと考えているだけだよ。」

今度は八太郎が真之介の背中をたたいて笑いました。

「今のところは、学問の成績もまあまあだし、もし私に学才があるのならそれをどんどん伸ばしたいのだ。」八太郎は続けていました。

翌日、学半館塾に着いた八太郎は、さっそく先生に昨日見た和尚のことを聞いてみました。

【第2稿】

外国からの蒸気船が日本を訪れ、鎖国していた日本が揺らぎ始めた江戸時代の終わり頃、柏原藩（現在の丹波市柏原町）の学半館塾という塾に通う15歳の少年がいました。

背が高く、やせ身であった少年の名は、土倉八太郎といいました。八太郎は学半館塾で儒学（孔子を祖とする政治・道徳の教え）を学んでいました。

ある冬の日のことです。塾を終えて家路を急いでいた八太郎の目に、木枯らしが吹きつける中、寒々とした身なりで小さな赤ん坊を抱いて歩く和尚の姿がとまりました。

「あの和尚…、また赤ん坊を抱いて歩いているぞ。どうして和尚が赤ん坊を抱いてこの寒い中を歩いているんだろう。」

八太郎は足を止めて和尚のようすをうかがいました。和尚は赤ん坊が風に当たらないように気を配りながら民家の軒先で家人に声をかけ、通されて入って行きました。

「これだけしばしば和尚の姿を見るということは、何か訳でもあるのだろうか…。そうだ、明日、塾で植木先生に聞いてみよう。」

環山先生は学半館塾の師で名を植木環山といいました。温厚実直な人柄で、儒学に限らないさまざまな学問に精通していたので、人々の信望と尊敬を集めている人でした。

「きっと村の人たちも、いろんなことを環山先生に相談しているに違いないだろうし……………」そう考えると、八太郎はまた歩き始めました。

この頃の日本は、学ぼうとする志さえあれば武士でなくても学問を修めることのできる時代になっていました。八太郎は上新庄村の豪農の出身で、学半館塾に通いながら、もっともっと学問を身につけて、この日本の国を背負って立つ立派な人になりたいという志を持っていました。



〈大野家の址に建てられた石碑〉

翌日、八太郎はさっそく昨日の和尚のことを先生に尋ねてみました。

【初稿】

【初稿】（赤文字は、第2稿で削除または整理・訂正した部分）

「…八太郎は、その和尚をどのように見取ったのじゃ。」

長い白髪を後ろで束ね、長いひげを伸ばした植木環山先生が八太郎に尋ねました。

「なんとも不思議な姿だと…。戒律の厳しい仏門にありながら子どもを持ち、妻の行方も知れぬまま、行き当たりばったりでもらい乳している姿のようにも見えましたが……。」

八太郎は昨日見た和尚の姿を思い浮かべながら答えました。

「ほう、そうか。では八太郎。お前はその和尚に何ができる。」

先生は再び八太郎に尋ねました。

「私にですか…。私には…、そうだ、私は直接その和尚には何もできませんが、もっと学問を深く学び、あのような不幸な人がこの世の中になくなるような政治を行うようにします。」

八太郎は笑顔で胸を張りました。植木先生は黙って聞いていましたが、八太郎が話し終えてしばらくして後、カッと目を大きく見開いて、静かにこう言いました。

「学問は、実行に移さねば役に立たんのだよ、八太郎。あの和尚は、寺の境内に捨てられていた子どもを拾って育てておるのだ。『どこの誰の子とも知れぬが、せっかくこの世に生まれた命。粗末にしては地藏菩薩に面を向けられん。』と言ってな。着るものさえなく、もらい乳をする以外方法のない和尚にこそ、人としての真実があるのだ。いくら学問を修めたといっても、目の前の子ども一人に手を差し伸べられんようでは、学問の価値がないであろう、八太郎。お前は庄屋に生まれたから知らぬかもしれんが、子どもを捨てる、食べ物盗む、はやり病で死ぬ、餓死する者の多さは尋常ではない。生きるためには食わねばならず、食うためには人倫を踏みにじらねばならぬという矛盾した世相だ。今できることをして、それでいてなおかつ学問を究めるのでなければ、学問は生きぬ。そうは思わぬか、八太郎。」

「はい…。」

八太郎の顔からは笑みが消え、八太郎は植木先生の顔を見上げることにできませんでした。

それから八年後の秋、八太郎は土倉家と深いつながりがあった市島町竹田村石原(現在の丹波市市島町石原)という所の太田三郎兵衛の養子となって盛大な祝言をあげ、名前を太田唯四郎と改名しました。太田家はこの地方の豪農として知られた家でした。しかし、明治維新を目前に控えて国は混乱しきっており、当時の民衆の生活ぶりはひどいものでした。

唯四郎が持ってきた土倉家の持参金も、太田家の借金に一部をあてなければならなかったほどで、人に頼まれてお金を貸しても返ってくることは少なく、貸し倒れが続きました。地方の庄屋もどんどん破産していきました。まして、貧しい農民の暮らしは目を覆いたくなる惨状でした。この頃すでにことあるごとに手記をつづっていた唯四郎の記述には、次のような内容があります。

『今年は穀物の値があがり、暮らしに難渋している人が村内に21人いるので、米9斗金五両一分をその人たちにひそかに渡した。』

（ひそかに）という言葉は、それから以後の救済に関する手記にも必ず書かれています。

【第2稿】

「…それで、八太郎はその和尚をどのように見取ったのじゃ。」

白髪を後ろで束ね、長いひげを伸ばした環山先生は八太郎に尋ねました。

「なんとも不思議な姿だと…。仏門の戒めを破って子どもを持ち、妻の行方も知れぬまま、行き当たりばったりでもらい乳している姿のようにも見えましたが…。」

八太郎は昨日見た和尚の姿を思い浮かべながら答えました。

「ほう、そうか。…では八太郎。お前はその和尚に何ができるのじゃ。」

先生は再び八太郎に尋ねました。

「私にですか…。私には…、直接その和尚にできることはありません。しかし、もっと深く学び、人の道をまっすぐに探求します。」

八太郎は笑顔で胸を張りました。先生はしばらく黙っていましたが、やがて目を大きく見開いて八太郎を見すえ、静かにこう言いました。

「学問は、実行に移さねば役に立たんのじゃよ、八太郎。あの和尚は、寺の境内に捨てられていた子どもを拾って育てておるのだ。『どこの誰の子とも知れぬが、せっかくこの世に生まれた命。粗末にしては地藏菩薩に面を向けられん。』と言ってな。」

いくら学問に優れていても、目の前の赤ん坊一人に手を差し伸べられんようでは、学問の価値がないであろう…。

今できることをし、なおかつ学問を究めるのでなければ、学問は生きぬ。そうは思わぬか、八太郎。」

「……………」

八太郎の顔からは笑みが消え、八太郎は環山先生の顔を見上げることすらできませんでした。

八年後の秋、八太郎は土倉家と深いつながりがあった竹田村石原（現在の丹波市市島町石原）の大野三郎兵衛の養子となって盛大な祝言をあげました。そして、名前を大野唯四郎と改めました。大野家はこの地方に500年続いた豪農として知られた家でした。

明治維新を目前に控えて国は混乱しきっていました。当時の民衆の生活ぶりはひどいものでした。食べることができない民衆は、子どもを捨てたり墮胎したりしました。辺りには病気の人や浮浪児があふれていました。

唯四郎が持ってきた土倉家の持参金も、大野家の借金に一部をあてなければならなかったほどで、人に頼まれてお金を貸しても返ってくることは少なく、貸し倒れが続きました。地方の庄屋もどんどん破産していきました。まして、貧しい農民の暮らしは目を覆いたくなる惨状でした。この頃すでにことあるごとに手記をつづっていた唯四郎の記述には、次のような内容があります。

『今年は穀物の値があがり、暮らしに難渋している人が村内に21人いるので、米9斗金五両一分をその人たちにひそかに渡した。』

（ひそかに）という言葉は、それから以後の救済に関する手記にも必ず書かれています。

【初稿】

【初稿】（赤字は、第2稿で削除または整理・訂正した部分）

これは受け取る側の人格を重く見る唯四郎の心のあらわれでした。また、慶応三年一月の手記には、『香良村不動山（現在の丹波市氷上町香良）へ参詣に行った。山に捨て子があるのを見たが、引き上げることもできずに帰った。このことについていろいろと考えを巡らすうちにあることを思い立った。』と書かれています。

それまではっきりとはわからなかった貧しい人々の生活が想像以上に悲惨なもので、子どもの命を粗末に扱うことが当たり前の暮らしぶりに唯四郎はがく然としました。

何とかしなければならぬ…。

この時、まぶたの奥に懐かしい人の顔が浮かび、耳にはその低いはっきりとした声が響くのを唯四郎は感じていました。

唯四郎は明治元年から、捨てられた子を拾っては自宅で養育し、また、生活に難渋している人を見ると救済の手を差し伸べました。特に捨てられた子どもの救済と養育に力を注ぎました。唯四郎は、一人で大阪や東京を訪れ、自分の考えを政治家や経済界の人々、文化人や仏教関係者に説いて回りました。次々と人を紹介してもらい、直接会って自分の考えを熱心に話しました。また、地方の有力者にも協力を依頼しました。しかし、理解は得られても、協力しようとする人はほとんど見つかりませんでした。それでも、協力を約束してくれた数人の財力と唯四郎の私財を投げ打った資金で、大阪に捨てられた子どもを養育する施設『愛育舎』（現在の堺市にある『愛育社』）を設立しました。この施設をつくるために、唯四郎は家財道具を売り払う大せり市を行いました。そして、この家財道具を売った金を、東京、大阪、京都、長崎、丹波（竹田村）の養育所に送りました。この自家を省みない唯四郎の行動に、親戚縁者の人々は腹を立てて唯四郎に詰め寄りました。

明治九年四月。唯四郎は家の中で腕組みをして、外から聞こえてくる怒鳴り声を聞いていました。

「大山師！それでも大野家の者か！」

その場にいた親戚の者の中には、

「唯四郎は捨て子を拾って養育し、男児は軍隊に売り飛ばし、女子は人買いに売って大もうけをするつもりだ。」と口汚くののしる者もいました。

「おおぼらふき！」「土倉の恥じゃ！」聞こえてくるものすごい大声を聞きながら唯四郎は考えました。

私が幼少より習い覚えたことは、人間は、ただ偶然に人間として生まれてきたものではないということだった。人間は人間として生きねばならない生き方がある。その生き方とは、万物に対する愛念を実行すること。それが道德であると私は教えられた。大政奉還はなったものの、いまだ国情定まらず、庶民の生活は餓死線上にある。都市にも農村にも難民が広がり、浮浪児は氾濫し、捨て子と堕胎はとどまることを知らない。病んでも医者にもかかれず、薬も飲めず、その日の粥をすすむにあえいでいる。この情勢を前にして、私一人が祖先からの財産の上にあぐらをかき、暖かい衣を着てぜいたくな食事に舌鼓を打って何が楽しいか。難儀するときは皆一様に難儀してこそ楽しみがある。

【第2稿】

これは受け取る側の人格を重く見る唯四郎の心のあらわれでした。また、慶応三年一月の手記には、『香良村不動山（現在の丹波市氷上町香良）へ参詣に行った。山に捨て子があるのを見たが、引き上げることもできずに帰った。このことについていろいろと考えを巡らすうちにあることを思い立った。』と書かれています。

それまではっきりとはわからなかった貧しい人々の生活が想像以上に悲惨なもので、子どもの命を粗末に扱うことが当たり前の暮らしぶりに唯四郎はがく然としました。

何とかしなければならない…。

この時、まぶたの奥に懐かしい人の顔が浮かび、耳にはその低いはっきりとした声が響くのを唯四郎は感じていました。

唯四郎は明治元年から、捨てられた孤児を自宅で養育し、また、生活に難渋している人を見ると救済の手を差し伸べました。特に、貧困から養育できなくなって捨てられた子どもの救済と養育に力を注ぎました。ばく大な費用がかかるこの事業を続けるために、唯四郎は私財を投じるとともに、一人で関西や関東の政治家や文化人、経済界の人々を訪ね、「子どもの命を守りたい」という自分の思いを説いて回りました。しかし、理解は得られても、協力を得られる人はほとんど見つかりませんでした。

明治8年、協力を約束してくれた数人が出し合った資金と唯四郎の私財を投じた資金で、孤児を養育する大阪の施設『愛育舎』（現在の堺市にある『愛育社』の前身）を設立しました。しかし、施設を維持する資金の工面がどうにもできなくなった明治9年4月、唯四郎はついに自宅の家財道具を売り払う大せり市を四日間行いました。この自家を省みない唯四郎の行動に、多くの親戚縁者が詰めかけ、唯四郎に対する憤りをものすごい剣幕でぶつけて詰め寄りました。

唯四郎は家の中で腕組みをして、外から聞こえてくる怒鳴り声を聞いていました。

「大山師！それでも大野家の者か！」「おおほらふき！」

その場にいた親戚の者の中には、

「唯四郎は捨て子を拾って養育し、男児は軍隊に売り飛ばし、女子は人買いに売って大もうけをするつもりだ。」と口汚くののしる者もありました。

聞こえてくるものすごい大声を聞きながら唯四郎は考えました。私が幼い頃から教えられたことは、人には人として生きねばならない生き方があるということだった。

その生き方とは、この世にあるすべてを愛し、そして守ること。

今も庶民の生活は餓死と隣り合わせだ。

どこを見ても浮浪児が氾濫し、捨て子と墮胎はとどまるところを知らない。

私一人が祖先からの財産の上にあぐらをかいて、ぜいたくな生活をしていて何が楽しいか。

【初稿】

【初稿】（赤文字は、第2稿で削除または整理・訂正した部分）

私は私の及ぶ限りを尽くして、この難民に救済の手を差し伸べたい。だれがなんと言おうとも、人間唯四郎のこの一念は微動もしない。昔から、徳を植え込む百年目と言うではないか。私が播きつけている徳の種は、何一つ目に見えるものではないが、おそらく百年たてば必ず見上げるような大木になっているはず。そして多くの人々が、その陰を慕って安らかに憩うにちがいない。

唯四郎は立ち上がりました。そして、親戚が集まっている庭の方へ歩みを進めていきました。唯四郎が姿を現すと、人々はみな静まりました。唯四郎は大きく目を見開いて低い声で話し始めました。

数年後、自宅の養育施設は『愛育堂』と名付けられて、捨てられた子どもや預けられた子どもを育てる施設として出発しました。この愛育堂は数年後閉鎖されましたが、現在の丹波市市島町は唯四郎の『愛育』の精神を尊び、愛育の里として今に語り継いでいます。



愛育堂址周辺の記念碑（自治振興会建）

【第2稿】

だれが何と言おうと私は救済する。

今、わたしが播いている種は、百年たてば必ず見上げるような大木になっているはず。そして多くの人々が、その陰に集まって心を安らげるにちがいない。その人々のためにも…。

唯四郎は立ち上がりました。そして、飢えで死に瀕し、シラミとクサで髪もない引き取ったばかりの子を抱きかかえ、大勢の前に姿を現しました。人々はみな静まりました。唯四郎は大きく息を吸うと、涙を浮かべて低い声で話し始めました。

「おぉッ、この子が、日本の次の世代の担い手なのか…。みなさん、…。」

唯四郎が延々と話し終えたあと、辺りは静まりかえったままでした。そして、もう誰一人として唯四郎に言葉を返そうとはしませんでした。

明治12年、自宅の養育施設は『愛育堂』と名付けられて、捨てられた子どもや預けられた子どもを育てる施設として出発しました。この愛育堂は数年後閉鎖されましたが、現在の丹波市市島町では唯四郎の『愛育』の精神を尊び、愛育の里として今に語り継いでいます。



〈旧市島町役場〉

【第2稿から最終稿への修正について】

ア 彼を変えた出来事を生徒に考えさせるために

- ・ 「山に捨て子があるのを見て、引き上げることもできず帰った。」後、自責の念にさいなまれる唯四郎に焦点をあて、唯四郎の人生の転機がここにあったことを考えさせるようにする。
- ・ 「唯四郎が部屋にこもり、明かりもつけずに何日も考え込むようになった。」という状況を加え、その間に苦悩する唯四郎の心の動きを考えさせるようにした。

イ 表現をさらに工夫すること

- ・ 「墮胎したりしました」は「死なせてしまうこともありました」という表現にする。
- ・ 唯四郎が恵まれない境遇にある子どもたちの救済に一生を捧げようと決心した場面を中心とするために、その後の唯四郎の努力については、「一生その志を変えることがなかった。」という程度に簡単に記述することとした。また、そのような教材の終末にすることによって、唯四郎のその後の行動について生徒にさらに興味関心を持たせることができると考えた。

ウ 写真・挿絵等の工夫について

- ・ 第2稿で使用していた市島町に残る写真は教材と一体感がなく、写真によって教材から意識が離れるように思えたため、写真は別途資料として活用することとした。
- ・ 写真を挿絵に変更する。今ある記念碑などを掲載するより、当時を想像しやすい挿絵を入れた方が教材としては読みやすくなる。（本校の美術科教師に依頼）

【最 終 稿】

【最終稿】

外国からの蒸気船が日本を訪れ、鎖国していた日本が揺らぎ始めた江戸時代の終わり頃、柏原藩（現在の丹波市柏原町）の学半館塾という塾に通う15歳の少年がいました。背が高く、やせ身であった少年の名は、土倉八太郎といいました。八太郎は学半館塾で儒学（孔子を祖とする政治・道徳の教え）を学んでいました。

ある冬の日のことです。塾を終えて家路を急いでいた八太郎の目に、木枯らしが吹きつける中、寒々とした身なりで小さな赤ん坊を抱いて歩く和尚の姿がとまりました。

「あの和尚…、また赤ん坊を抱いて歩いているぞ。どうして和尚が赤ん坊を抱いてこの寒い中を歩いているんだろう。」

八太郎は足を止めて和尚のようすをうかがいました。和尚は赤ん坊が風に当たらないように気を配りながら民家の軒先で家人に声をかけ、通されて入って行きました。

「これだけしばしば和尚の姿を見るということは、何か訳でもあるのだろうか…。そうだ、明日、塾で環山先生に聞いてみよう。」

環山先生は学半館塾の師で名を植木環山といいました。温厚実直な人柄で、儒学に限らず様々な学問に精通していたので、人々の信望と尊敬を集めている人でした。

そう考えると、八太郎はまた歩き始めました。

この頃の日本は、ようやく学ぼうとする志さえあれば武士でなくても学問を修めることのできる時代になっていました。八太郎は上新庄村の豪農の家に生まれ、学半館塾に通いながら、もっともっと学問を身につけて、

この日本の国を背負って立つ立派な人になりたいという志を持っていました。

翌日、八太郎はさっそく昨日の和尚のことを先生に尋ねてみました。

「…それで、八太郎はその和尚をどのように見取ったのじゃ。」

白髪を後ろで束ね、長いひげを伸ばした環山先生は八太郎に尋ねました。

「なんとも不思議な姿だと…。仏門の戒めを破って子どもを持ち、妻の行方も知れぬまま、行き当たりばったりでもらい乳している姿のようにも見えましたが…。」

八太郎は昨日見た和尚の姿を思い浮かべながら答えました。

「ほう、そうか。…では八太郎。お前はその和尚に何ができるのじゃ。」

先生は再び八太郎に尋ねました。

「私にですか…。私には…。直接その和尚にできることはありません。しかし、もっと深く学び、人の道をまっすぐに探求します。」

八太郎は笑顔で胸を張りました。先生はしばらく黙っていましたが、やがて目を大きく見開いて八太郎を見すえ、静かにこう言いました。

「学問は、実行に移さねば役に立たんのじゃよ、八太郎。あの和尚は、寺の境内に捨てられていた子どもを拾って育てておるのだ。『どこの誰の子とも知れぬが、せっかくこの世に生まれた命。粗末にしては地蔵菩薩に顔を向けられん。』と言ってな。いくら学問に優れていても、目の前の赤ん坊一人に手を差し伸べられんようでは、学問の価値がないであろう…。今できることをし、なおかつ学問を究めるのでなければ、学問は生きぬ。そうは思わぬか、八太郎。」

「……………」

八太郎の顔からは笑みが消え、八太郎は環山先生の顔を見上げることすらできませんでした。

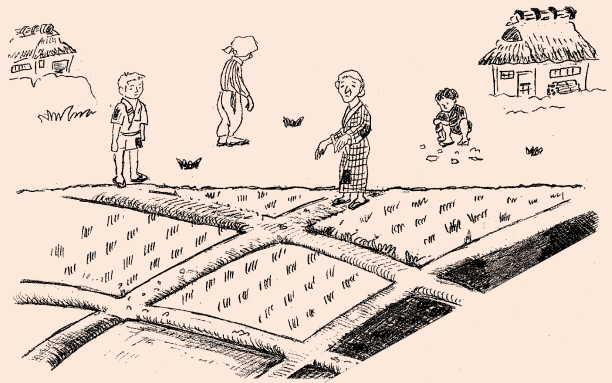
八年後の秋、八太郎は土倉家と深いつながりがあった竹田村石原（現在の丹波市市島町石原）の大野三郎兵衛の養子となって盛大な祝言をあげました。そして、名前を大野唯四郎と改めました。大野家はこの地方に500年続いた豪農として知られた家でした。

明治維新を目前に控えて国は混乱しきっていました。当時の民衆の生活ぶりはひどいものでした。食べることができない民衆は、子どもを捨てたり死なせたりしてしまうこともありました。辺りには病気の人や身寄りのない子どもがあふれていました。

唯四郎が持ってきた土倉家の持参金も、大野家の借金に一部をあてなければならなかったほどで、人に頼まれてお金を貸しても返ってくることは少なく、貸し倒れが続きました。地方の庄屋もどんどん破産していきました。まして、貧しい農民の暮らしは目を覆いたくなる惨状でした。この頃すでにことあるごとに手記をつづっていた唯四郎の記述には、次のような内容があります。

『今年は穀物の値があがり、暮らしに難渋している人が村内に21人いるので、米9斗金五両一分をその人たちにひそかに渡した。』

（ひそかに）という言葉は、それから以後の救済に関する手記にも必ず書かれています。これは受け取る側の人格を重く見る唯四郎の心のあらわれでした。



慶応三年一月の手記には次のような文章があります。

『香良村不動山（現在の丹波市氷上町香良）へ参詣に行った。山に捨て子があるのを見た。人の命がここまで粗末にされているのかとがく然としたが、引き上げることもできずに帰った。』

「何とかしなければならない……。」

唯四郎は部屋にこもり、明かりもつけずに何日も何日も考え込むようになりました。真っ暗な部屋の中で唯四郎は自分がこれまでしてきたことは何だったのか……と考え続けていたのです。

唯四郎は少年の頃、日本の国を背負って立つ人になりたいという思いを持ちながら学半館塾に通っていた頃のことを思い出していました。突然、「お前は何のために学問をやってきたのだ。」という低くきびしい声が唯四郎の頭の中に響いたような気がしました。

「これではいけない。」

唯四郎は立ち上がりました。



唯四郎は明治元年から、捨てられた孤児を自宅で養育し、また、生活に難渋している人を見ると救済の手を差し伸べました。特に、貧困から養育できなくなって捨てられた子どもの救済と養育に力を注ぎました。ばく大な費用がかかるこの事業を続けるために、唯四郎は私財を投じるとともに、一人で関西や関東の政治家や文化人、経済界の人々を訪ね、「子どもの命を守りたい」という自分の思いを説いて回りました。しかし、理解は得られても、協力を得られる人はほとんど見つかりませんでした。

明治8年、協力を約束してくれた数人が出し合った資金と唯四郎の私財を投じた資金で、孤児を養育する大阪の施設『愛育舎』（現在の堺市にある『愛育社』の前身）を設立しました。

その後、この事業を続ける唯四郎の前には多くの障壁が立ちふさがり続けましたが、唯四郎は東奔西走し、困難を乗り越え、死ぬまでその志を変えることはありませんでした。

明治12年、自宅の養育施設は『愛育堂』と名付けられて、捨てられた子どもや預けられた子どもを育てる施設として出発しました。この愛育堂は数年後閉鎖されましたが、現在の丹波市市島町では唯四郎の『愛育』の精神を尊び、愛育の里として今に語り継いでいます。

【最終稿を作成し終えて】

何度も修正し、試行錯誤を重ねて教材文を作成した。

この教材を使って実際に授業を行ったときの生徒たちの反応を見ると、試行錯誤しながら自作した資料が“思っていた以上に使えるんだ”ということを実感した。それはやはり、教材の中に描かれている人物が生徒にとっては自分たちの地域に実存した人であり、地域や社会のために貢献した誇れる人物と感じたからだろうと思った。郷土の偉人を取り上げた教材であるからこそ生徒の心の中に受け入れられやすく、授業のねらいも実現しやすい。このことが郷土資料を作成する最大の意義でもあると考えている。

2〈小学校低学年用教材〉猿丸安時さんと奥池を例として

(小学校低学年の教材文の冒頭部分を例とした検討例)

<教材文づくりについて>

低学年に合った教材文にするために、いくつかの参考資料と照らし合わせながら、事実の筋を変えない範囲で、取材文を削ったり、低学年の子どもが理解しやすい言葉に換えたりしていく。「猿丸安時さんと奥池」の前文の部分を例にあげ、どのように教材文をつくっていったかを、4つの段階で考察してみた。

段階1 (教材文の長さを考える)

低学年に合わせて取材文をできるだけ短くするとともに、発達段階に応じて、漢字をひらがなに直したり、難しい語句や言いまわしを理解しやすい言葉にかえる。

さるまるやすとき おくいけ
「猿丸安時さんと奥池」

「みずぶそく」→ひらがなに書き換える

あしやは、むかしから水不足でこまっていた。

山から海までの土地はしゃ面で、ふった雨はすぐに流れ、山の地中にしみこむまもなく海に流れ込んでしまう。

川やため池があってもあんまり役に立たなかった。

猿丸安時さんの時代もそうやった。そのころのあしやは、二千人ぐらいの人が住んでいたんやが、ほとんど、農家やった。→内容と関連の薄い3行を削除する。

▽「水がなくなり」を加え理解を助ける。

ちょっとでも雨がふらなったら、田んぼや畑の作物がかれ、しまいには、のみ水にさえこまるようになり

└ 平易な「雨がふらない日がつづく」と書きかえる。

└ 「のむ水」にする。

水あらしいや、水どろぼうがたえなかった。

└ 「水あらしいや、水どろぼう」が、理解しにくいと思われるので「水のとりあいやあらしい」に書きかえる。



段階2 (会話文を入れる)

会話文を入れることで、村人が水不足で困っていることを身近に理解させやすくする。

さるまるやすとき おくいけ
「猿丸安時さんと奥池」

└ 状況をとりえやすくするよう、会話文「ことしも、いねがみのらんかった。」「雨は。ふらんかのう。」を教材文の始めに加える。

あしやは、むかしから水ぶそくでこまっていた。

山から海までの土地はしゃ面で、ふった雨はすぐに流れ、山の地中にしみこむまもなく海に流れ込んでしまう。

雨がふらない日がつづく、田んぼや畑の水がなくなり、作物はかれ、しまいには、のむ水にさえこまるようなこともあり、水のとりあいやあらしいがおこりました。

段階3（写真を入れる）

写真を入れることで、奥池の作られた場所をイメージしやすくするとともに、写真をもとに、興味関心を引き出すようにする。

さるまるやすとき おくいけ 「猿丸安時さんと奥池」

「ことしも、いねがみのらんかった。」

「雨は、ふらんかのう。」

あしやは、むかしから水ぶそくで、こまっていた。

山から海までの土地はしゃ面で、ふった雨はすぐに流れ、山の地中にしみこむまもなく海に流れ込んでしまう。

— 六甲山という子どもになじみの深い山の名前にすると水不足の原因を想像しやすくする。

雨がふらない日がつづく、田んぼや畑の水がなくなり、作物はかれ、しまいには、のむ水にさえこまるようなこともあり、水のとりあいやあらそいがおこりました。



段階4（現在の子どもたちとの関わりを加えるとともに、水不足となる芦屋の地形を補足する）

- ・ 奥池が、今でも市民の憩いの場となっていることを子どもたちの経験からイメージさせる。
- ・ 芦屋がどうしても水不足になってしまう地形的な条件を地名を入れて具体的に理解させる。

このしゃしんの池は奥池おくいけといいます。ピクニックに行ったことがある人もいるでしょう。この池は、しぜんにできた池ではありません。今から140年ほど前にあしやの人たちがみんなで作った池なのです。

「ことしも、いねがみのらんかった。」

「雨は、ふらんかのう。」

あしやは、六甲山ろっこうさんと海の間であり、山にふった雨がすぐに海にながれてしまうので、むかしから水ぶそくで、こまっていた。

雨がふらない日がつづく、田んぼや畑はたけの水がなくなり、作物はかれ、しまいには、のむ水にさえこまるようになり、水のとりあいやあらそいがおこった。



第Ⅲ章

各地域の教材作成例

1 〈低学年用教材〉

「トンカン トンカン」(明石市)	30
「猿丸安時さんと奥池」(芦屋市)	34
「みつきりじぞう」(たつの市)	38

2 〈中学年用教材〉

「欽古堂亀祐～三田青磁をかんせいさせた人」(三田市)	43
「西垣喜代次の願いをうけついで～山よ緑よふるさとよ」(篠山市)	47
「ふるさとの心、民話を伝える～柳田国男」(福崎町)	52

3 〈高学年用教材〉

「松島輿治郎～コウノトリとの約束」(豊岡市)	56
「淡路島に酪農を～三原酪農の父 田中萬米」(南あわじ市)	62
「嘉納治五郎～柔道の父」(神戸市)	67

4 〈中学校用教材〉

「『新生児に生きる』～三宅廉 パルモア病院物語」(神戸市)	72
「児童福祉の祖 大野唯四郎」(丹波市)	77
「釣針王国を北播磨に築く～小寺彦兵衛」(加東市)	82

トンカン トンカン

タコのまち、^{あかし}明石^うで生まれたたまごやき。

ふつうのタコやきより大きくて、こんがりきつねいろ。ダシじるにつけてたべると、ふんわりとしてとてもおいしいんです。

^{あかし}明石には、300けんくらい、
たまごやきのみせがあります。
そのみせでつかっている、
^{どう}銅^{やすふく}なべ（アカナベ）は、
ほとんど安福さんがつくっています。



わたしは、^{こうく}校区たんけんで^{やすふく}安福さんにインタビューしました。

^{どう}「銅なべをつくるきかいは、どんなのですか？」

きかいは、一つもないよ。

〔たまごやきの形を作るかた〕

と〔木づち〕

〔カネを切るはさみ〕

〔しあげにつかうヤスリ〕

くらいやな。



「1日になんこのなべができるのですか？」

そうやなあ。あさ8じからよる8じまでやって、せいぜい2つくらいかなあ。

「このしごとでたいへんなことは、どんなことですか？」

しんぼうがいることやね。あわてたり、いらいらしとったら銅^{どう}がやぶれてしまうんや。木づちで指^{ゆび}をたたいてしまうこともあるし、銅^{どう}のいたで手^てを切^きってしまうこともあるよ。

リズムよくていねいに、トンカントンカンうっていくんやで。

「このしごとを何年^{なんねん}やっているんですか？」

20さいのときから、43年やってるよ。

「銅^{どう}なべつくりは、すきですか？」

そら、すきやで。

いつも、どうしたらおきゃくさんが「つかいやすいなあ。」といっ
てくれるか考えるんや。そういってもらえたらうれしいからなあ。

おっちゃん^{いっしょう}のしごとは、一生、べんきょうや。

そのとき、銅^{どう}なべをかいにおきゃくさんがきました。安福^{やすふく}さんはおきゃくさんに銅^{どう}なべのつかいかたをせつめいしてからこういいました。

「このとおりにつかったら、一生^{いっしょう}つかえるからな。わからんことがあったら、いつでもでんわしておいでよ。しゅうりもしたるからな。」

そういって、安福^{やすふく}さんは、また木づちで銅^{どう}のいたをうちはじめました。

トンカントンカン、トンカントンカンという音^{おと}が店^{みせ}にひびきました。

なんだか、たのしい音^{おん}がくをきいているような気がしました。

〈トンカン トンカン〉作成にあたって

1 発掘した素材について

明石に育つ子どもにとって、玉子焼き(明石焼き)は、家庭の味である。我が家の手作りで玉子焼きを食べるときもあれば、店に立ち寄って食べるときもある。たぶん一ヶ月に一回は、食べていると思われるほどなじみのある食べ物である。

そんな親しみのある玉子焼きを一人のおじさん、安福さんが支えている。安福さんは、何十回もテレビ出演をされており、自ら製作された銅なべを紹介し、玉子焼きを全国に広めている。板金加工の店の三代目で、銅なべは、父の代から作っている。安福さん自身も20歳から43年間この仕事を続け、『職人は、一生勉強』という姿勢を貫いている。銅なべを買いに来たお客さんには、使い方を丁寧に指導し、修理にも快く応じられる。心を込めて丁寧に作った銅なべを、お客さんにも喜んで大事に使ってもらいたいという気持ちにあふれている。

玉子焼きを焼いている光景は、地元の子どものならどの子も思い浮かべることができる。しかし、その銅なべ(子どもは、たこ焼き器だと思っているだろう)をどうやって作っているのか、知っている子は少ない。まして、家の大工道具として置いてあるような道具を使ってこつこつ手作業で作っているとは、想像もできないだろう。

低学年の子どもにとって普段の生活からかけ離れた素材は、実感に欠け、教材に寄り添うことが困難と思われる。しかし、いつも食べている玉子焼きだからこそ、それを作るための銅なべを心を込めて作っている人がいるということに驚き、安福さんの仕事に対する思いから、学ぶものが多いと思われる。また、普段の生活の中で、この学習について思い出す事も多いだろう。

教材作成にあたって、安福さんについての情報を得るため、まず、図書館に行った。播磨の職人について書かれた本を見つけ、その中から安福さんの記事を手に入れた。

しかし、民話などのお話とは違い、そのままの文章を使うことは出来ないので、とにかく実際にお会いして話をうかがおうと思い、安福さんに連絡をとった。取材は、安福さんのお店で、お話を聞かせていただくことが主であった。図書館で見つけた安福さんの記事をもとに、いくつか質問を考えていったが、とても時間がかかった。お店に2回取材にうかがい、どちらも2時間以上話を聞かせてもらった。とても話し好きな方で、いろんな事を話してくださった。玉子焼きについて、近頃の子どもについて、好きで集めている物について、テレビ出演した時の話、たこつぼについて、だし巻き卵や煮物料理について……。銅なべ作りの仕事に関する話は、4分の1くらいだろうか。

しかしその中で、本物の素晴らしさを十分感じる事ができた。話をうかがっているときに、銅なべを買いに来たお客さんがいた。奥さんがお客さんに銅なべの使い方をプリントをもとに説明される。「この通りに使ったら、一生使えるからな。絶対に洗ったらあかん。もし、わからんことがあったらいつでも電話しておいでよ。修理もしたるからな。」と、安福さんも横から声をかけておられた。

自分の作った銅なべを永く愛用してもらいたいという思いが伝わってきた。自分の仕事に対する自信と一つ一つの鍋に込めている心を感じた。

仕事に使っている道具の写真を撮らせてくださいとお願いした。「道具言うたって、こんなもんしかないで。」と言われたが、「それがいいんです。」と話し、撮らせていただいた。

2 教材化にあたっての工夫

明石の玉子焼きが安福さんの銅なべによって支えられていること、安福さんの銅なべ作りに対する思いなどが、取材を通してわかった。しかし、子どもたちにどう与えたらいいのか……と考え込んでしまった。

伝記も逸話もない内容を低学年の子どもにいかにかと与えるか。そこで、エピソードを自分で作ろうと考えた。安福さんの話から、地元の小学生が生活科や総合的な学習の時間で訪れることが多いと聞いたので、生活科の学習と関連させてお話をすることにした。校区探検でお店を訪れた子どもたちとの会話という設定で、質問と答えの中に安福さんの銅なべ作りに対する思いがあらわれるようにした。トンカントンカンという音は、安福さんの記事の中で書かれていたものである。こつこつとゆっくり焦らず銅を打つ姿が浮かんでくる音なので、取り入れることにした。仕事に使っている道具の撮影は、やはり企業秘密という部分もあるので、事前に撮影させていただく日を決めて撮らせていただいた。

低学年の子どもに限らず、近頃は、生活に便利なものや簡単につくるためのグッズがあふれているため、短時間で仕上げることを好む傾向が強い。

安福さんの仕事は、おじいさんの代から道具も作業内容も変わっていない。毎日同じ作業をこつこつ行っている。今までの長いあゆみの中では、つい急いだりいらいらしたりして銅板を破ってしまうことや、木づちで指をたたいたり銅板で手を切ったりすることもあったそうだ。しかし、自分の仕事に誇りを持ち、常に納得のいく銅なべを作ろうと粘り強く努力し、取り組んでおられる。だからこそ、「玉子焼きを作るなら安福さんの銅なべ」と、ほとんどの店で使われているのである。

子どもたちには、トンカントンカンという木づちで銅板をたたく音から、安福さんの毎日の仕事を思い浮かべさせ、根気のいる銅なべ作りの仕事を楽しんでおられる姿を想像させたい。そこから、あせらず急がずいらいらせず、少々手間がかかってもこつこつと取り組むことの素晴らしさを感じとらせるとともに、そんな明石焼きを大切にしている郷土の生活への親しみや愛着につなげていきたい。

3 資料の特質

安福さんが明石焼きの銅鍋を、使う人のことを考えて、心をこめて一つ一つ手作りで作っている様子を知ること、身近な地域のそのような人に親しみを持たせるとともに、明石という郷土のはぐくんできた文化や生活に親しみ、郷土への愛着を持たせたい。

《 コ ラ ム 》

明石の子どもたちの生活に浸透している「玉子焼き」を取り上げたことは、よかったと思う。それを支えている人のお店がこんなに近くにあると知って「へえ～。しらなかったわ。」「ぼく、その前を通ったことあるわ！」など大きな驚きがあり、意欲的に資料を読むことができた。

また、身近な人であるからこそ、子どもたちは、安福さんを「えらい人」というのではなく、「近所にいるがんばってるおじさん」のようにとらえ、自分たちもがんばったら安福さんのようになれる！と感じたようである。子どもたちはこれから玉子焼きを食べたり見たりするときに、安福さんのことを思い出すのではないかなと思う。

インタビューの答えを紙芝居のように絵に表して、役割演技に合わせて掲示した。

その上で、驚いたことを発表させたが、安福さんの仕事ぶりが目で見て取れるので、よかった。やはり低学年では、絵だけでなく写真や実物を効果的に使うことで、思考に深まりを出すことができる。



猿丸安時さんと奥池

このしゃしんの池は奥池おくいけといいます。ピクニックに行ったことがある人もいるでしょう。この池は、しぜんにできた池ではありません。今から140年ほど前に、あしやの人たちがみんなで作った池なのです。

「ことしも、いねがみのらんかった。」

「雨は、ふらんかのう。」

あしやろっこうさんは、六甲山と海の間ろっこうさんにあり、山にふった雨がすぐに海にながれてしまうので、むかしから水ぶそくで、こまっていた。

雨がふらない日がつづくはたけと、田んぼや畑の水がなくなり、作物はかれ、しまいには、のむ水にさえこまるようになり、水のとりあいやあらそいがおこった。



おく いけ
〈奥 池〉

あしや村のだいひょうさるまるやすときをしている猿丸安時さんは、（なんとかしなければ、これでは村がだめになる、）と心をいためていた。

安時やすときさんは、すぐちかくの伊丹いたみにある田や畑のための昆陽池こや いけという大きなため池のことをしっていた。この池は、大むかし、お坊ほうさんがみんなと力を合わせてつくったものだった。

「みんなで、大きなため池いけをつくろう。」

猿丸安時さるまるやすときさんは、村人むらびとによびかけた。

みんなが力をあわせ、大きなため池いけをつくれれば、水でこまることもなくなるとかんがえたからだ。

さいしょは、

「そうじゃ、そうじゃ。」

とさんせいしてくれていた人も、こうじのたいへんさと、それにかかるお金かねのことを聞くと、

「そんなこと、できるわけがない。」

と首くびをよこにふりだした。

でも、そんなことで決心けっしんをかえる安時やすときさんではなかった。

「大こうじやから、みんなですなのや。ため池いけができたなら、村ぜんたいがたすかる。やって

やれんことはない。なあ、みんな、わしについてきてくれ。」

安時やすときさんは、ねっしんに、みんなにいった。心をこめていった。

村人むらびとたちも、とうとう心うごを動かされた。

「よし、やろう。みんなでがんばってみよう。」

そういつて、こうじにとりかかった。

はるがきて、またつぎのはるがきても、こうじはつづいた。

みんなじぶんのしごとをもちながら、こうじをするので、大へんなくろうだった。

「なんで、こんなことつづけにやならんのじゃ。」

「こんなことでは、しごとができん。わしらのくらしを、どないしてくれるんじゃ。」

だんだん、だんだんいっしょにはたらく人はへっていった。

(みんなで力を合わせなければ、とてもやりとげられない。)

^{やすとき}
安時さんもだんだん元気をなくしていった。

そのあいだもあらしいごとはますますひどくなった。

^{やすとき}
さすがの安時さんも、どうしたものかとなやんだ。安時さんはおもった。(なにより、じぶんが、がんばらなくては。)

^{あめ}雨の日も、^{ゆき}雪の日も、^{やすとき}安時さんは、一人になっても休まずはたらいた。

^{やすとき}
そんな安時さんをみんなは知っていた。

とちゅうでこなくなった人も、また、こうじにもどってきた。

^{たに}
谷をけずり、そこにたくさんの石をいれた。

つんだ石の上に、土をあつくいれた。大きな木づちでたたいてかため、くずれないように、木のさくをいれた。

くるしいくるしいしごとだったが、とうとう池^{いけ}のまわりに800メートルのていぼうができた。
あがった。

みんなが力をあわせて、こうじをやりとおすことができたのだ。

^{むらびと}
村人は、こえをあげてよろこんだ。

こうしてできたのが奥池^{おくいけ}だ。

こうじがはじまって、20年たっていた。あしやは、水のことこまることはなくなった。

それから140年。奥池^{おくいけ}は、西^{にし}どなりにつくられた貯水池^{ちよすい}とともに、今^{いま}でもたいせつにされている。



^{ざるまる}猿丸さんが、ここに奥池^{おくいけ}をつくったということをつたえる石^{せき}ひ

〈猿丸安時さんと奥池〉作成にあたって

1 発掘した素材について

本素材は、江戸時代の芦屋の村々で起こった水争いを収めるために、貯水池を作った話である。天保十二年（1841年）から、20年かけて、山の上に貯水池が作られた。池を作り、田畑への水路を開いたことは、水不足を解決する具体例となり、その後の用水確保への励みにもなった。芦屋村の年寄、猿丸又左衛門安時の行動力と、それに続いた芦屋の村人の粘り強い努力があって完成したこの奥池は、現在も貯水池として水をたたえている。

本素材のように、どの町にも、先人たちが残した暮らしを支えてきたものがある。

中学年の「郷土の学習」につながるよう、それが町の発展につながってきたことを知るとともに、自分たちの住む町に興味、関心を持たせるきっかけになる学習にしていきたい。

「水あらい」については、どこの地域においても郷土の歴史の中に必ずといっていいほどある。あらいをなくすために、貯水池をつくるという将来を見据えた猿丸安時の発想と、20年かけて貯水池を作っていくねばり強い行動力のもとになった思いを考えさせたい。

自分たちが今住んでいる町の発展は、「あらいがなく、便利で住みやすい土地にしたい」という先人の思いとつながっている。今ある町は、先人の努力と知恵が積み重なってできていることを考えさせるのに、適当な素材のひとつと考える。

2 教材化にあたっての工夫

- ・ 低学年の教材として扱えるよう、引用文献を基本としながら、ねらいにそった内容になるように手を加えていく。その際、物語の内容を変えることにならないよう、参考文献とも照らし合わせながら教材を作成した。
- ・ 低学年での活用を考え、適度な文の長さにしたり、わかりやすい表現に変えたりする工夫を行った。
- ・ 昔の道具を実際に手に持たせて、実際の重さを感じさせたり、扱い方を体験させることを通じてどうして工事が20年もかかったのかという当時の工事の大変さとその間の人々の思いに気付かせたい。

3 資料の特質

西宮の北山公園や甲山から、芦屋の奥池、ロックガーデンやお多福山などにつながる一連の六甲山に連なるハイキングコースは、阪神間の人々にとっては身近な憩いの場所である。子どもたちの中にもハイキング等に行った経験のある者もあるだろうし、そのような経験のない子どもでも、毎日の生活の中でいつも背後にそびえている六甲山は親しみのある山である。

今ではそのような市民の憩いの場となっているところに、今から140年ほど前、自分たちの住んでいる芦屋をよりよい土地にするために池を作ろうとした人々の努力や苦労を知ること、さらに自分たちのくらす地域に親しみ、愛着を持たせたい。



《 コ ラ ム 》

地域教材を1時間の授業で行うことは、かなりシンプルなものにしていけないと、扱いきれない。何をねらいに持ってくるのかをしぼりながら、教材文を簡潔なものにしないといけないことを感じた。

地域教材を扱うことの良さは、自分たちの身近なものだからこそ抱ける興味・関心であり、地域のことをより良く学んでいこうとする態度にもつながっていく。

身近な地域の先人たちが、自分たちの生活を守るために、どのように考え、行動していったかということ学ぶことや、思いを馳せることで、子どもたちが自分自身の価値観や行動を振り返る機会となる。

【参考文献】

- ・ 三好美佐子編『あしやの民話』株木印刷、平成11年7月20日
- ・ 細川道草著『芦屋郷土誌』芦屋史談会、昭和38年11月3日
- ・ 芦屋市文化振興財団編『あしや子ども風土記歴史さんぽ』
芦屋文化振興財団、平成5年3月31日
- ・ 杜山悠著『芦屋歴史紀行』日本風土記の会、平成2年9月1日

みつくりじぞう

どんどんどん どんどんどん

ことしも^{たの}楽しいじぞうぼんがやってきました。たいこの音にあわせうたったり、おどったり……。村の人たちのわらいごえもきこえてきます。

そんなようすをながめながら、きさくじいさんはそっとみつくりじぞうさまに手をあわせました。



この村は、とちがひくいため、むかしから大雨がふると村ぜんたいが水につかってしまうことがたびたびありました。

今から80年ほどまえのこと、くろうしてそだてたいねがみのり、さあ、これからかりいれというときになって、なん日もなん日も大雨がふりつづきました。

「たいへんじゃ、^{どて}土手がきれるぞ！」

村の人たちはごうごうとあれくるう川べりにあつまり、ひっしで土のふくろをつみあげました。



しかし、つんでもつんでも川の水はどんどんふえて、いきおいをますばかりです。

「はよ、ひなんせな。どろ水にまきこまれるぞ！」

さかまく川の水は、どてをこえ、みるみる田はたにながれこんでいきました。

「あかん、ふくさんとこが、水につかった！」

「はよう、みんなをひなんさせるんじゃ！」

村の人たちの大ごえも、はげしい雨の中にかきけされていきました。

よがあげました。^{いえ}家も田んぼも水につかり、あたり一めん、どろの^{うみ}海です。

「せっかく、くろうしてそだてたいねがだいなしや。」

村の人たちは口びるをかみしめました。中には力なくじめんにしゃがみこみ、

「もう、こんな村にすみたくない。こりごりや。」

とつぶやく人もいます。

そのときです。川上^{かわかみ}からおどうのようなものがながれてくるではありませんか。中をのぞくとそれは、なんとおじぞうさまでした。ずうっとむこうの川上^{かわかみ}の村からながされてきたのでしょうか。はげしいながれの中で体^{からだ}は三つにわれていました。

そのおどうは、村人たちのまえをすうとながれていったかとおもうと、うずまいている水の力でむきをかえ、村人たちのほうにもどってきたのです。おどろいた村の人たちは川べりにあつまり、おどうの中のおじぞうさまをみつめました。

どろにまみれながらも、そのかおはやさしくほほえみ、まるでかがやいているように見えました。村の人たちは、そんなじぞうさまのようすを、なみだをうかべながらじっとみつめていました。

しばらくして、とくさんがつぶやきました。

「わしらとおんなじじゃ。」

やがて、村の人たちの目からは、なみだがあふれました。

だれかが口をひらきました。

「わしらもまけたらあかん。」

「じぞうさまみたいにくじけず、みんなで力をあわせるんや。」

みんなはじぞうさまをだきあげ、村の小高いひろばにおいて、口ぐちにこういいました。

「じぞうさま、見ててください。」



その日から、田んぼのじゃりをのけ、土^ど手をなおし、ながされたはしもなおしました。男の人も女の人も、おとなも子どもも、みんな心を一つにして、もくもくとはたらき、村をもとどおりに作り上げました。

きさくじいさんが生まれてからも、村はたびたび、こう水におそわれましたが、そのたびにおじいさんたちは、力をあわせ村をまもってきたのです。

きさくじいさんは、そっと目をあけ、じぞうさまのかたをやさしくなでました。

どんどんどんどんどん

元気よいたいこの音が、村の人たちをつつんでいます。

〈みつくりじぞう〉作成にあたって

1 発掘した素材について

神岡小学校では、地域の人びとの生きざまに学ぶ教材作りが伝統的になされていた。以下に述べる取材活動は、私が4年生を受け持ったときに行っていたことである。

まず、他の先生方が取り組まれた「地域調べ」の資料から、洪水に関するデータを拾いあげることから始めた。当初は社会科の授業に役立てるための資料集めであった。

集めた資料の中で興味深く心打たれる資料があった。「てっぽう水がきた」という音楽劇のシナリオである。これは、村人たちが洪水と闘いながら生き抜く姿を音楽で表現したもので、以前4年生を担当された先生が脚本され、たつの市の連合音楽会で発表されたものである。そのシナリオを目にしたとき、私自身が感動を覚えたのである。こんな大変な状況にもかかわらず、どこものともわからない地蔵さまを拾ってきて大事におまつりする村人たちの思いは・・・と考えたときに、社会科での学習では、郷土の発展を願って立ち上がった人びとの熱い思いや願いを子どもたちに考えさせることを学習の中心にはできないと思い、みつくりじぞうを素材にした道徳の教材文を考えるに至ったのである。

現在のたつの市神岡町には三つに割れた石のお地蔵様が大事におまつりされている。

地蔵は、子どもを守るとも、旅人の安全を守るともいわれ、寺だけでなく野や道ばたに小さな石の地蔵がまつられているのを見かけるが、このお地蔵様は、村の小高い広場(今はここに公民館が建つ)のお堂の中に静かにたたずんでいる。地蔵のたつ位置からして普通の地蔵とは趣が違う。さらに、中をのぞいてみるとたくさんのおろうそくが、きれいに飾られている。しかし、当のお地蔵様といえばお堂の内装とは不釣り合いなほどこじんまりしたもので、首と胴体がぱっくり三つに割れ、目や鼻もすでに形をとどめていない。しかし、痛々しい割れ目はうまく赤い前掛けと着物で隠しており、穏やかにたたずむおじぞう様になんとも不思議な魅力を感じるのである。

お地蔵様の名前は「みつくりじぞう」。郷土の民話(西播編)では「みつぎれじぞう」と書いてあるが、神岡の人たちからは「みつくりじぞう」と呼ばれている。

以前、4年生を担当した際、子どもたちに聞いてみると「公民館の庭に大事にまつてある。」と言う。しかも、その地蔵様は3つに割れていると・・・。

「郷土の民話」に書かれている「みつぎれじぞう」のお話や他の資料などから大まかな経緯をつかんだ上で、自治会長さんにお話を伺った。そのお話によると、80年くらい前からまつられている地蔵様であるということ。この地区は、土地が低く山と川とにはさまれた場所であるため、何度も何度も洪水の被害にあってきた(自治会長さんが知っているだけで15回)ということ。貧しいにもかかわらず、上流の方から流されてきた割れた地蔵様を拾いあげ小高い丘に安置して今も大事にしているということなどを熱く語ってくださった。

当時、度重なる洪水の被害に絶望感を抱いていた村人たちにとって、土地がすり鉢状態になっているために起こりえた逆流現象も、不思議な現象としてとらえられたであろうし、激流にさらされながらもやさしく

ほほえみかけるお地蔵様の姿は、村人に元気を取り戻させる心の糧となったことであろう。

現にそれを支えに、困難にも負けず「みんなが豊かにくらせる村」を願って心を合わせ、ひたむきにたくましく歩んでこられたのである。80数年間もの間、大事に守り続けられた「みつくりじぞう」は、まさにこの土地に生まれ、ひたむきに生きてきた人びとの生きざまの象徴のように思える。自治会長さんのお話を聞きながら、心に響く美しいお話だとしみじみ思った。

2 教材化にあたっての工夫

(1) ストーリーの構想を立てる

2年生にとって、洪水で村が水につかり明日の生活もままならないという状況は、生活経験から考えて理解しがたいものがある。ましてや、80年も昔の話である。そこで、少しでもわかりやすく身近なできごとを感じられるよう、「きさくじいさん」の視点で書くことにした。

前総代さん(徳永喜作氏)の許可をいただき、話の構成を「地蔵盆の夜、昔を思いみつくりじぞうに手を合わせるきさくじいさん」(現在)⇒「きさくじいさんの回想場面」(過去)⇒「やさしくじぞうの肩をなでるじいさん」(現在)・・・とストーリーを展開していくことにした。

(2) 中心場面を考える

まず、ざっとストーリーを書いた後、児童に一番考えさせたい中心場面の書き表し方について推敲を重ねた。ここでは、体が3つに割れながらも、洪水に負けず、ほほえみつづけているように見えた「みつくりじぞう」を心の支えにし、度重なる洪水の被害にも負けず力を合わせて村を守ってきた村人たちの思いを引き出したいと考えた。

そして、きさくじいさんの心を表す行動(しぐさ)を文章の中に組み入れ、「じぞうさまのかたをなでながら、きさくじいさんはどんなことを話しかけたのでしょうか。」という発問を投げかけることによって、児童から、「あきらめずにみんなで助け合ってよかった。」「これからも、みんなで力をあわせてがんばっていきます。」等の反応を引き出し、郷土を守ってきた村人のがんばりを知るとともに、郷土への愛着を持つきっかけとする。

(3) 中心場面に迫るための押え所を考える

次に、中心場面が上すべりにならないようにするための大事な場面について考えた。それは、たった一夜の洪水のために苦労して育てた稲がだいなしになり住む場所さえ危うくなった村人たちの絶望感を描く場面と、地蔵さまの姿に心を打たれ立ち上がる村人たちの思いを描く場面である。それぞれの思いを深く考えさせるために「もういやや、こんな村にすみたくない。」や「わしらもまけたらあかん。」という村人の言葉や「力なくじめんにしゃがみこみ」や「なみだをうかべながらじっとみつめていました。」などのしぐさを表す表現を加え、子どもたちの反応が深まるようにした。

(4) 2年生の発達段階を考えた表現にする

最後に、2年生に理解できる長さや文になるよう推敲を重ねたが、まだまだ難しい部分もある。場面絵を使っの提示や嵐の音を効果的に入れるなど提示方法での工夫が必要である。

3 資料の特質

本学級の児童は、明るく素直で何事にも興味を示して取り組もうとする子が多い。

反面、粘り強く持続してやりとげるとい忍耐力、根気強さの面では、弱さが見られる面もある。みつくりじぞうの様子をきっかけに、村の人たちが立ち上がり、村を守るために必死で頑張ってきたことに気付くことで、郷土の文化や生活に親しみ、自分たちの住む地域への愛着を持つためのきっかけとしたい。

《 コ ラ ム 》

自作の教材は、自分が素材に感銘を受け、たくさんの取材をして作ったものだから、子どもたちに伝えたいエピソードがいっぱいある。しかし、45分という限られた時間の中で、子どもたちの道徳的実践力を高めるためには、最も価値の高いエピソードに絞り、子どもたちの心をゆさぶり共感させていかねばならない。

今回、地域教材を作成するにあたり、私自身多くのことを学んだ。ねらいをしっかり持ち、深く考えさせたいところはどこか。中心発問をどうするか等、しっかり定まっていないと、教材文は書けない。と同時に、地域教材は子どもたちをぐっと引きつけることも再認識した。

道徳の時間に、いろんな考えにふれさせ自分の考えを見つめる中で、子どもたちのものの見方や考え方は変わるはずだと信じている。そのためにやはり、心に響く教材が大切になってくる。自分たちと同じ地域に生まれ育ち、悩みながらも夢を実現させていった人々の実話であるから、心に響くのである。地域の方のたくましい生き方に学ぶことは、子どもたちの心の成長に大きな意味を持つと実感している。

【参考文献】

- ・ 西播磨地区編集委員会『郷土の民話(西播編)』兵庫県学校厚生会、1972年11月
 - ・ 島津たづ・藤井敏和作成[音楽劇「てっぼうみずがきた」]
県音楽研究会及びたつの市連合音楽会で発表、平成5年
- ※ 徳永喜作氏（元自治会長）・徳永力也氏（現自治会長）からの聞き取り

るり色に光るきれいな色をしたこの焼き物は青磁せいじといわれるものです。今から二百年ほど前、兵庫県ひょうごけんにも青磁せいじが焼けるところがあったのです。そこで焼かれる青磁は三田青磁せいじとよばれ、そのころ、日本で一番きれいな青磁せいじといわれていました。これは、その三田青磁せいじをかんせいさせた人のお話です。



三田青磁（せいじ）

三田青磁には、おきものや花びん、おさががあります。

ひょうめんが、みどり色でうすいガラスのようになっているのは、石をくだいて作った釉（うわぐすり）をかけてやくからです。青磁のもとになる石は水車みづぐるでくだいたといわれています。

そのころ三田では、青磁せいじのもとになる石がとれていました。ところが、青磁せいじを焼くことのできるしよく人がいなかったのです。

「ただめか。」

焼きあがった青磁せいじをかまからとり出し、しよく人たちはためいきをつくばかりでした。

そこで、京都のゆうめいなやきものの先生にたのみ、青磁せいじの焼き方を教えてくれる人に来てもらうことにしたのです。その先生には、三人の弟子でしがいました。そのうちの一人が三田へ行きたいと言いましたが、先生はそれをゆるさず、亀祐かめすけという弟子でしを三田に行かせることにしたのです。

「どうして、わたしが京をはなれ、三田へ行かなくてはならないのですか。」

亀祐かめすけは、伏見ふしの土人形ふし（伏見人形）を作る家の生まれでした。亀祐かめすけは気が進みませんでしたが、だれよりもまじめな亀祐かめすけでないと青磁せいじは焼けないと先生は考えたのでした。

「今、京をはなれてしまうと、二人にもっとさをつけられることになる。」

亀祐かめすけは心ばいでした。

「しかし、焼き物のなかで一番むずかしいといわれている青磁せいじが焼けるようになれば、わたしのぎじゅつは、もっと高くなるだろう。」

亀祐かめすけは、36さいのときに三田へ行くことになりました。そのころ、青磁せいじといえば、中国のものばかりで、日本ではきれいな青磁せいじが焼けないといわれていたのです。

三田につくと、さっそく亀祐かめすけは、しよく人たちと青磁せいじを焼きはじめました。石をくだき、こなにشته、ねん土ねんどを作っていきます。なんどもなんども焼いてみました。しかし、それは、亀祐かめすけが考えていたよりも、ずっとむずかしいものだったのです。

「どうにも色がわるい。こんな色では、だれもつかってくれはしない。」

「こんどこそ、こんどこそ・・・」

くる日もくる日も青磁せいじを作りつづけました。なんどもなんども石をくだきました。かまに火を入れると、三日間、ねずにまきをもやしつづけるのです。

「どうしてなんだ。どうして・・・」

亀祐かめすけの目からなみだがこぼれました。

「中国の青磁にまけないようなものを作りたい。」心の中にそんな思いがあふれてきました。

かまのかたちがわるいのではないかと考え、かまのかたちを変えてみました。火のまわりはよくなりましたが、美しいり色は出ません。かまのふたのしめ方がわるいのではないかと考え、ふたのしめ方もかえてみました。かまのふたを一度にしっかりとしめて焼くことで美しいり色は出のです。亀祐は、まっ黒な顔で、なんどもなんどもためしてみました。しかし、きれいなり色にはなってくれません。

三田に来て長い年月がたとうとしていました。

「わたしにはもうむりかもしれない。日本では中国にまけない青磁は作れないのか。」
亀祐はすっかり力を落としてしまいました。

中国で作られた青磁のつぼを来る日も来る日も見つめては「なんて美しい色だ。」とため息をつく日が続きました。



そんなある日、亀祐は、日の光のあたり方によって、同じり色のつぼのかがやきがちがって見えることに気がつきました。つぼのむきを変えたり、つぼをおく場所を変えたりして、なんどもなんどもたしかめてみました。

亀祐は、はっとしました。

「もしかしたら、釉（うわぐすり）にひみつがあるのかもしれない。・・・」

釉（うわぐすり）は、はいとくだいた石をまぜて作るのです。釉（うわぐすり）に新しい工夫ができることに気づいた亀祐はそれから必死になってさまざまなまぜ方をためしてみました。そして、ついにこれまでとはまったくちがう、はいと石の分量を考え出しました。

「こんどこそ、こんどこそ・・・」

いのるような気持ちで、青磁をかまからとり出しました。

とり出された青磁を見て、亀祐は、自分の目をうたがいました。そこには、り色に光る青磁がならんでいたのです。

「見つけたぞ。青磁のやき方を見つけたぞ。」

亀祐としょく人たちはなみだをながし、だき合いました。

それから亀祐は、土人形を作っていたわざをいかして、うきぼりの入った青磁のつぼや、青磁の人形を作りはじめました。



「この青磁は、中国のものですか。」

「日本でこんなにきれいな青磁が焼けるところがあるのですか。」

亀祐の作る青磁は、京都や大阪でたちまちひょうばんとなりました。

こうして三田青磁はかんせいしたのです。亀祐は70さいちかくになっていました。気がつけば、三田に来てから三十年がたっていました。

〈欽古堂亀祐～三田青磁を完成させた人〉作成にあたって

1 発掘した素材について

地域教材の作成にあたり、三田にゆかりのある先人について調べてみることにしたが、三田の出身でない私にとっては皆目見当がつかない状況であった。そこで三田市教育委員会社会教育文化財課から資料を提供していただくことにした。そこで目にしたのが、神戸新聞社が平成10年8月に連載した「さんだ新・発見伝～偉人たちの横顔～」という記事である。その連載で取り上げられた人物は20人にのぼったが、三田の偉人といわれる人物は幕末から明治維新にかけての時代に生きた人物が多かった。そんな連載記事の中で、「本場の色に迫りたかった」という見出しで紹介された「三田青磁の名工欽古堂亀祐（きんこどうかめすけ）」の記事を目にしたことが調べ始めたきっかけである。

市内の小学生は、社会科の学習で「三田青磁」という言葉を一度は聞いたことがあると思われる。しかし、その青磁が誰の手によって作られるようになったのか、また、どのようにして作られるようになったのかは知らないことが多いと思われる。これは大人の間でもあまり知られていないことである。江戸時代、三田青磁が全国に誇る優れた青磁として有名であったことは知られているが、明治時代に入ると、その歴史は途絶えることになる。近年、三田青磁の窯の復元なども行われ、本校区内にも三田青磁の保存に努めている方がおられ、高学年は青磁作りの体験も行ってきた。その三田青磁誕生の歴史を教材文として用いることで、児童にとって身近な学習となると考えた。

2 教材化にあたっての工夫

- ・ 欽古堂亀祐という人物は有名な人物ではない。三田青磁の名はよく知られていても、それを完成させた人物については、専門家以外はまず知らないだろう。伝記もなく、資料も少ない。その人物を知る手がかりは、亀祐自身が晩年に書いた「陶器指南」という書物と、文化財関係の専門書のみであった。そこで亀祐の生い立ちや人間像を探る手がかりを得るため三田市教育委員会社会教育文化財課に協力を依頼し、7回にわたる聞き取り調査を行った。
- ・ 欽古堂亀祐の肖像権は京都のお寺が所有していた。使用の許可が必要であるが、三田市教育委員会より紹介していただけることになった。
- ・ 青磁の実際の色のおもしろさを子どもたちに実感させるため、教材に三田青磁の写真を載せて、子どもたちにその色を理解させる。
- ・ 亀祐の作品は三田市所蔵の物が多く、その写真も利用許可申請書の提出により、利用可能であることもわかった。

3 資料の特質

欽古堂亀祐という人物は、まさしく努力の人である。相次いで家族を亡くし、家庭的には不遇の日々を送っていた中で、さらに京焼の師匠から三田に赴くように命じられる。当時の京焼は伝統を重んじる世界であり、伏見の土人形家出身の亀祐にとっては居心地のよい場所ではなかったようだ。技術が劣っていたわけではな

いが、他の弟子の陰に隠れる存在でもあった。しかし、焼き物の世界でもっとも難しいといわれる青磁に挑戦し、自分の技術を磨こうと気持ちを切り替え、三田の地へ赴くことになる。三田の地で多くの陶工に出会い、失敗を重ねる中で、その願いはより崇高なものへと変化していく。

努力の過程、結果と読み進める中で、そのがんばりは自分自身への挑戦であることに気づき、自分らしく生きることの素晴らしさに気づくことにもつながっていく。

《 コ ラ ム 》

児童は、三田青磁を生活の中でよく目にしているはずである。三田図書館をはじめ公共施設で展示されていることも多く、飲食店に展示してあることもある。しかし、それが三田青磁と知らなかったり、気づかなかったりしていることが多いのだろう。

大人も同様で、三田青磁という言葉は知っていても、その歴史や値打ちを知らない人も多い。学習後、自宅に三田青磁があり、亀祐の刻印が記されていたと知らせてくる児童がいた。その保護者の方からも、「お話を読み、初めて知りました。」との感想も寄せられた。地域教材を通して、児童だけでなく、保護者も自分達の住む地域を見つめ直す機会にもなることがわかった。身近だからこそ、その価値を見つめ、深く考えることができたと考えられる。

また、地域の素材を教材化する過程において、指導者にとっても意義深い学びの機会があった。今回、三田青磁を取り上げて教材化するまで、欽古堂亀祐という人物の存在すら知らなかった。7年前に連載された新聞記事に目が留まり、聞き取りを中心とした取材を行った。そこで、三田の文化財を守る仕事をされている方や郷土史研究をされている方を次々にご紹介いただき、話を聞くことができた。地域に出かけ、人とつながりができ、そこで生まれた教材を地域の方の協力のもとで子どもたちと学習する。これも地域に開かれた、地域の学校としてのひとつの姿である。教材化の過程で教師自身が地域の人とつながることがこの学習の大切な意義の一つであったと感じている。

【参考文献】

- ・ 欽古堂亀祐著『復刻陶器指南』陶器全集刊行会、1933年4月10日
- ・ 三田市教育委員会『三田焼の研究』2005年3月31日
- ・ 青種雄著『改訂三田焼陶史』財団法人兵庫県陶芸館、1989年3月10日
〈教材文挿絵制作〉三田市教育委員会社会教育文化財課 山崎敏昭氏
- ・ 杜山悠著『芦屋歴史紀行』日本風土記の会、平成2年9月1日

にしがき き よ じ ねが
西垣喜代次の願いをうけついで
みどり
～山よ緑よふるさとよ～



大山の里では、今年もたくさんの人々が親子で山にのぼり、植林する時期がきました。

四年生のつとむは、六年生の姉から、

「つとむ、明日の土曜日は、親子植林だからね。植林はたいへんだけど、いっしょに行くんだよ。」と、声をかけられました。

しかし、つとむは姉のさそいに、すぐに「わかった」とへんじができませんでした。

「いっしょに行くんだよと言われても、友だちとあそびたいし、ぼく一人が行かなくて、たくさんの人がいるんだからかまわないだろう。」

土曜日の朝、いつまでもそんなことをいいながら、つとむはしぶしぶお姉さんといっしょに親子植林に行きました。

親子植林というのは、毎年、地いきの人たちにうえ方を教えてもらって、何百本というひのきや杉などのなえ木をうえていく活どうです。

山の斜面についたつとむは、みどりいっぱいに見えていた山に、えぐられたように木のないとこ

ろが広がっていることにおどろきました。

午前中、つとむは気が進まないまま、おじさんに教えられるまま、小さな杉^{すぎ}のなえを運んでいました。

お昼^{ひる}になって、お姉さん^{ねえ}とお弁当^{べんとう}を食べながら、

「こんななえ木をうえたって、すぐに大きくなるわけじゃない。今のぼくにはかんけないじゃないか。」

つとむは、まだそんなことをつぶやいていました。

「きみ、今なんていったんだい。」

朝いっしょになえを運んだおじさんがいいました。

「いや、べつに、なにも……。」

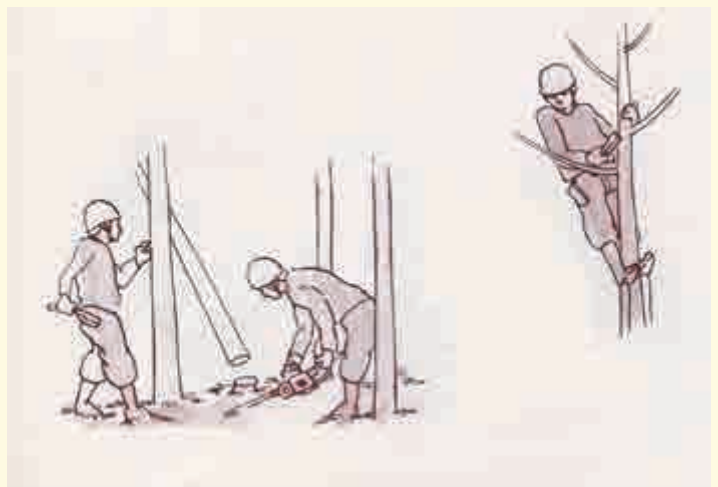
つとむは口ごもりました。

「きみはいいことに気がついたな。あの山を見てごらん。きれいな山だろう。あの山の木は、何年ぐらいたっているかわかるか。山の木はうえてから50年するとやっと一人前になる。」

「へえ、50年もかかったら、ぼくもおじいさんだな。」

おじさんは続けていいました。

「でもよい木をそだてるためには、植えてから50年、ただまっていればいいということではないんだよ。50年の間には、いろいろなしごとがある。よいなえを作り、ていねいにうえてやる。そして、なえ木が元気にそだつように、7、8年は、まわりにはえている草や木をかってやる。おさない木をそだてるためにはかかせないしごとだ。少し大きくなったら、よぶんな木を切って、木と木の間を広くしないといけない。まっすぐな木にするには、えだうちもひつようだ。」



「それじゃ、50年の間に、どれだけの人が、山のせわをしてきたんだろうね。」

つとむはだんだん、おじさんの話に身を乗り出すようにして聞いていました。

「きみはこの大山地いきが、どうして今、こんなにみどりいっぱいのうつくしい山々になったのかわっているか。むかしは、人々のどりよくで、みどりゆたかな山があった。百年いじょう前にはりっぱなざい木がとれていたそうだ。ところがせんそうで、わかい木までも切り出し、すみをやいたり、船のざいりょうにして、どんどん木がなくなっていくた。大雨がふれば、山のしゃめんの土はながされ、山もどんどんあれていった。そうしたあれた山を、地いきの人たちみんなでみ

どりゆたかな山によみがえらせてきたんだ。でも、みんながすぐに協力^{きょうりょく}できたわけではない。」

「じつはぼくも今日の親子植林には、いやいや、ついてきたんだ。」

思わず、つとむはつぶやいていました。

「みんなの気持ちをまとめ、これから生まれてくる子どもたちのために、みどりととりもどしたいと力をつくした人がいたんだよ。その人が西垣^{にしがき}喜代次^{きよじ}さんだ。山にみどりととりもどすためにいっしょうけんめいはたらいた人だ。みんなで協力^{きょうりょく}

できるようにと、たくさんの人に語りかけ、教えてきたのが西垣さんなんだよ。おかげで、おじさんも50年間、このしごとがつづけられている。」

「おじさんは、50年も山を守ってきたんだね。」

つとむはおどろきました。

「いいや、おじさんだけじゃない。西垣^{にしがき}さんのねがいを受けつぎ、50年、100年という年月でそだててきた山のみどりは、ふるさと大山にすむ人たちみんなが守りつづけてきたんだよ。西垣^{にしがき}さんが口ぐせのように言っていた『山よ^{みどり} 緑^{みどり} よふるさとよ』ということばには、山をまもれ、緑をまもれ、ふるさとをまもれという気持ちがこめられているんだ。西垣^{にしがき}さんのねがいは、ふるさとを愛^{あい}する地いきの人たちみんなのねがいでもあるんだよ。」

つとむは、おじさんが語ってくれることば一つひとつをかみしめながら聞いていました。

なんだか、今日のお弁当^{べんとう}はこれまでで一番おいしく感じられました。

お弁当^{べんとう}を食べ終わって、午後のしごとが始まりました。

つとむは、小さなえ木の根っこをととても大切なものをあつかうように、おさえながら、「大きく、大きくそだってね。」となえ木に話しかけていました。



〈西垣喜代次の願いをうけついで～山よ緑よふるさとよ～〉作成にあたって

1 発掘した素材について

国道176号線を北上し、篠山市と丹波市を結ぶ鐘が坂トンネルの手前に、ひととき美しい山林風景がある。手入れの行き届いた美しい人工林が山々に続いている。篠山市大山地区の山林の豊かな緑は地域の誇りであり、人々が長い歴史をかけて育ててきた貴重な財産でもある。その山林の緑に注目し、自然の力の偉大さやすばらしさ、人間と自然とのかかわり方、これからの自然環境のあり方などを考えることは、道徳教育を進める上で貴重な学習活動といえる。

山の緑を育てそれを次の世代につないでいこうとする篠山市大山地区の人々の地道な継続的な活動が定着していくのには、ずいぶんと苦労もあったであろう。一人の人間の力で自然を相手にできるはずがない。人々の協力がなければ、美しい緑は育たない。

そうした人々の活動に貢献した人が西垣喜代次である。

西垣喜代次は、氷上郡（現丹波市）で生まれ、4才から大山の地で大きくなった。小さいころから野山で遊ぶのが大好きだった。時には自分の家の庭で遊び、父親に強くしかられたこともあったという。友だちと鳥うちにでかけていったこともある元気な少年であった。東京の大学を出てからは、東北地方で農民を育てる仕事をし、第二次世界大戦後、ふるさと大山に帰ってくる。

ふるさとで高校の校長になって、生徒と一緒に農業のこと、林業のことをたくさん教えた。生徒たちはとても熱心に勉強した。そこで学んだ青年たちは田畑や山の仕事に誇りをもって取り組んできた。西垣に教えを受けた人々の中には、今の篠山市を支える人たちがたくさんいる。

自然のすばらしさや不思議さ、自然を大切にすることを考える上で、西垣喜代次がふるさと大山で活動した姿を学ぶことは非常に意味深いことと考える。

大山地区の貴重な共有財産である山の緑は財団法人大山振興会が維持管理している。

大山地区の緑がどのように受け継がれてきたのか、3年程前に当時の大山振興会理事長に取材したことがあった。そこでの聞き取り調査が今回の教材開発の手がかりとなった。

西垣喜代次は、財団法人大山振興会の初代理事長でもあった。大山振興会発足の経過についての詳細をくわしく述べることはできないが、西垣喜代次が大山地区で人々のリーダーとして尽力したという事実は、聞き取り調査の中や文献の中で明らかになった。

篠山市立大山小学校では、緑の少年団を結成して緑化の活動を続けている。次世代を担う大山小学校の子どもたちは、地域の願いを受け継いで、緑の少年団として植物の栽培や山林の植林作業を家庭や地域の人たちと一緒に取り組んできているのである。

資料収集にあたっては、大山小学校を訪ねて現在の活動状況やこれまでの活動経過を知ることから始めた。小学校には西垣喜代次に関する文献や緑の少年団活動のファイルや記録写真が保存してある。そうした資料をもとに教材作成に取り組んだ。

さらに、西垣校長のもとで指導にあたった当時の先生や西垣に教えを受けて現在篠山市の要職についている方にも聞き取り調査をし、西垣喜代次の人物像に迫るよう努めた。

西垣の教えは、農業に林業に夢とロマンをもって取り組もうとする若い世代に大きな影響を与えたことがわかった。

2 教材化にあたっての工夫

植林作業の体験がない子どもたちに、山登りのきびしさや植林作業の大変さについての理解が深まるよう、

一本のなえ木を大きくするのにも人間の一生に近い長い年月がかかるということ、なえ木を一本一本山の斜面に植えていくことがいかに大変な作業であるかということ、広い面積の山々に植えていくにはたくさんの人手がいるということ、なえ木を大きくしていくための様々な仕事があること、暑い夏、大きく茂った下草を協力し合って刈り取っていかねばならないことなど、作業の大変さを実感できるよう留意した。そのため教材文づくりに工夫するとともに、写真やさし絵が有効に活用できるよう配慮した。

さらに、次の世代に豊かな自然を残していくということは、自分たち自身の課題であるということに気づくような文章表現に努めた。

3 資料の特質

緑豊かな山々は、世代を越えた人々の地道な活動のたまものである。山の緑は人々が力を合わせて長い年月をかけて育ててきたという事実を知することは、自然を守り育てようとする関心や意欲につながる。また、そうした人々の長年にわたる活動を学ぶことを通して、人間の力が及ばない自然の偉大さに気づくとともに、自然のすばらしさや不思議さに感動し自然を大切にしようとする気持ちを育てていきたい。また、ふるさとで、緑を育て、人を育てた西垣喜代次の生き方・考え方を子どもたちの今と重ね合わせて考えさせたい。

なお、今では自然林を大切にしようとする現代的な課題をふまえて、人工林を育て、森林を維持管理するだけではなく、自然林との調和も視野にいたるさとの山を育てる活動を進めているという事実も伝えることができるようにしたい。

《 コ ラ ム 》

地域社会の中で、山林の維持管理のための世代を超えた協力が継続的にできるようになるための土台をつくった西垣喜代次の働きかけに思いをはせる学習活動につながるよう教材化に取り組んだ。

身近な地域での実際の話というだけで子どもたちの学習に向き合う姿勢はちがう。興味関心の高さが子どもたちの表情から見受けられる。身近な地域の中で緑いっぱいの山々が人々の努力で守られてきたという事実を知することは、地域の自然と自分とのかかわりを意識する手がかりとなる。子どもたちから出された「ゴミを捨てないようにする」「自然を守るのだったらぼくにもできると思う」「トイレトーパーや紙は木で作られているからむだづかいをしない」等の素直な意見は、身近な地域の学習をすることでより具体的に子どもたちの心に届いた結果だと考えられる。

今後の指導にあたっては、西垣喜代次の働きかけに簡単に人々の協力が得られたわけではないことなどを補足し、その時の喜代次の悩みやそれを乗り越えていったことにも目を向けさせるような展開も考えたい。

【参考文献】

- ・ 西垣喜代次の生涯刊行会『山よ緑よふるさとよー西垣喜代次の生涯ー』昭和55年
- ・ 財団法人大山振興会『大山の山』昭和56年

ふるさとの心、^{みんな}民話を^{つた}伝える～ ^{やなぎ}柳 ^だ田 ^{くに}国 ^お男
ふるさとは たからもの

みなさんは、自分のすんでいる町の民話を知っていますか。
ある地方に「ザシキワラシ」という民話があります。

ザシキワラシは、「ざしきにすんでいる子ども」のことで、家ぞくではなく、^{かみさま}神様のことです。ザシキワラシは、ふだんはそのすがたを見せませんが、ときどきあらわれて家の人をおどろかすことがあります。でも、いたずらをしたり、ものをこわしたりすることはありません。ザシキワラシがすんでいるとお金もちになる、といわれており、ザシキワラシにでて行かれると、びんぼうになったり、わるいことがおこったりするといわれているのです。^{とおのものがたり}（遠野物語より）

このようにそれぞれの土地には、^{むかし}昔からいろいろな民話が言いつたえられています。しかし、言いつたえなので、きえていく民話がたくさんありました。そこで、ふるさとの民話がきえてしまわないように、本にのこしたのが、^{やなぎ}柳 ^だ田 ^{くに}国 ^お男なのです。

^{かんざきくんふくさきちやう}国男は、神崎郡福崎町に生まれ、十三才までそこで大きくなりました。



^{くに}お
（国男の生まれた家）

国男の生まれた家は、国男が自分で「日本一小さい家」といっていたくらいでした。そのため、父と母、^{きやうだい}兄弟八人の家ぞくみんながいっしょにくらすことはできませんでした。そこで、^{※おおじや}国男は大庄屋の^{みきけ}三木家にあずけられることになりました。国男は家ぞくとはなれ、とてもさびしかったのですが、かおには出ませんでした。

（※大庄屋・・・江戸時代の村をまとめていた人）



三木家の近くには、^{すず}鈴の^{もりじんじや}森神社がありました。そこには、山モモの木や、こま犬、^{いなりさま}お稲荷様の「ほこら」があり、かくれんぼに木のぼり、木をきってかたながわりにして、ちゃんばらごっこをするなど、子どもたちのあそびばでした。

また、カッパがいるといわれていた^{こま}駒ヶ^が岩では、水あそびや魚とり、かにとりをしました。朝から日がくれるまで、国男は山や川でおもいきりあそびました。国男は、きんじょの子どもたちのがきだいしょうになり、けんかをしたり、いたずらをしたりして、さびしさをまぎらわしていたのでした。

三木家のおじいさんは、いたずらをする国男をしかるところか、
「子どもは、これくらい元気なでなくちゃあかん。」

と言ってかわいがってくれました。

そして、夜になると、国男に、いろいろなお話をしてくれました。
おじいさんが、またそのおじいさんから聞いた話です。

国男は、おじいさんの話に目をかがやかせて聞き入りました。

三木家の^{※どぞう}土蔵には、たくさんの本がありました。^{どぞう}土蔵はくらくてさむいところで、だれも入れませんでした。

(※土蔵・・・しなものをしまい、たくわえておくたてもの)

ある日、国男がいたずらばかりするので、家の人はこまりはてて、
おしおきとして^{どぞう}土蔵にとじこめました。

「こわくてなって、すぐあやまるだろう。」

と思ったからです。しかし、いつまでたっても国男のなき声すら聞こえてきません。あんまりしずかなので、おじいさんは、しんぱいになって

「きっとおそろしくて、ふるえているのだろう。」

と、見に行きました。すると、どうしたことでしょう。

「おじいさん、ぼくのひいおじいさんが書いた本があったよ。ひいおじいさんが本の中で、ぼくの知らないことをたくさん教えてくれたよ。」

と、言うではありませんか。

その時からです。国男が、読書の楽しさを知ったのは。それから
は、いたずらをするともなく、学校から帰るとすぐに^{どぞう}土蔵に走りこんで、むちゅうになって本を読みました。

国男は十三才のとき^{ふくさき}福崎をはなれ^{とうきょう}東京でくらすようになりました。しかし、生まれそだった家やおさないころにすごした三木家、山や、川、そして三木家のおじいさんがしてくれた話がいつまでも心のおくにのこっていて、いつも国男をはげましてくれました。

でも、日がたつにつれ、お話の一つ一つをわすれていくことに気がついた国男は考えました。

「おじいさんからきいた民話は、ふるさとと心だ。言いつたえだけでは、きえてしまう。そうだ、ぼくもひいおじいさんのように、本に書いて子どもたちにのこしていこう。ふるさととは、ぼくのたからものだ。」

ザシキワラシが出てくる「^{とおのものがたり}遠野物語」や、^{かみ}神かくしについて書いた「^{じんせい}山の人生」は、国男がおさなかつたころの家の思い出や、山でまよってこわかった体けんが、心にのこっていて書かれたお話なのです。



(国男のふるさと福崎の山、川)

〈ふるさとの心、民話を伝える柳田国男〉作成にあたって

1 発掘した素材について

柳田国男は、神崎郡福崎町に生まれた日本の民俗学の第一人者である。日本で初めて、日本の風俗、習慣、ことば、伝説、昔話などを調べて、日本人の心、日本人の生活の歴史を探り出し、民俗学としてまとめたのである。

国男が民俗学の研究をするようになったのは、生まれ育った家や、子どもを過ごしたふるさとのことが、いつも心の底に残っていたからであるといわれている。ふるさとのことを思い出したり、ふるさととほかの地方とを比べたりして、人々の暮らしを考えたのである。少年時代の国男は、友達とよくけんかをして、近所の子どもを泣かしたり、いたづらをしたりするわんぱく少年だった。朝から日が暮れるまで、友だちと山や川で思いっきり遊びまわった。その経験が、後に「山の人生」や「遠野物語」を書くときのもとになっている。自叙伝「故郷70年」に「『日本一小さな家』に育ったという運命から、わたしの民俗学への志は源を発したといってもよいのである。」と書いているように、柳田民俗学の始まりは、ふるさと「福崎」と、生まれ育った「日本一小さい家」なのだ。ふるさとが国男に民俗学を研究させ、「日本の民族学の第一人者」である柳田国男を育てたといえる。

山や川で遊びまわる少年時代の国男の様子は、田舎に住んでいる子どもたちなら、だれでも共感することができ、自分と同化させて考えることができる。自分たちと同じような少年が、「日本の民俗学の第一人者」になったのは、ふるさとへの強い思いがあったからであることに気づかせることにより、郷土を愛する気持ちや態度を育てていきたいと考える。

2 教材化にあたっての工夫

柳田国男が研究した「民俗学」という言葉や内容は、中学年の児童にとっては難しい。そのため、「民俗学」をまとめた人とせずに、「民話」を書いた人という設定をしている。また、ふるさとが柳田国男の心の支えになったということに、ポイントを置き教材化した。

3 資料の特質

子どもたちは、自分の生まれ育った地域が大好きである。いろいろな場面で地域と関わりを持ち、地域の生活様式や文化、伝統、産業について学んでいる。また、地域社会においては、子ども会活動やスポーツ少年団活動、お祭りや催しものなど、地域に密着した活動を多く体験しており、郷土に対する思いを持っている。しかし、ふるさとがあるから、今の自分があるという心情まで育っていないように思える。

そこで、自分たちの地域で生まれ育った柳田国男が、東京に出てもふるさとを忘れることなく、ふるさと

に励まされて、民俗学者としての自分の生きる道を見つけた姿から、「ふるさと」の持つ役割について考えさせたい。また、自分たちの身の回りの自然や地域での活動などを想起させ、自分自身の「ふるさと」のよさを見つめ直させることにより、何気なく見ていた山、川、空、自然、地域の人々が「ふるさとのたから」だということに気づかせたい。

さらに、自分たちの郷土の民話にもふれさせ、ふるさとへの愛着を深めさせるきっかけとしたい。

《 コ ラ ム 》

この教材は、社会科の学習や総合的な学習の時間と関連させ、総合的な学習の時間に郷土のよさを見つけたり、地域の人にアンケートを取ったりするなど、郷土に親しみを持てるような体験を行っていることで効果的に授業が展開する。また、地域で活躍されている方をゲストティーチャーとして招き、ふるさとについての話を聞く機会を設けると、さらに郷土のすばらしさを知ることができる。

心のノートp.82には、「わたしたちの心を育ててくれるふるさと」と題して「ふるさとのよさを見つけて大切に」の写真と文がある。授業の後半、自分のふるさとのよさについて考えるとき、そのページを活用することができる。そして、p.84「心に残るふるさと」に、子どもたちのとっておきの場所を文や絵で表現させた。文だけでなく絵もかかせることで、子どもたちは自分たちのふるさとのよさを見つめ、郷土を愛そうとする態度が培える。

【参考文献】

- ・ 柳田国男著『故郷七十年』朝日新聞社、1974年3月20日
- ・ 柳田国男著『故郷七十年』神戸新聞総合出版センター、1989年4月20日
- ・ 柳田国男著『遠野物語』岩波書店、1993年12月16日
- ・ 佐藤誠輔訳『口語訳遠野物語柳田国男著』河出書房新社、1992年7月10日

松島興治郎～コウノトリとの約束

「さあ、おもいっきりはばたくんだ」

「やっと、あの日のおまえたちとの約束を果たすことができる。この大空で自由に飛び回れ。」

コウノトリを初めて自然に帰す日、松島さんは、両腕^{りょううで}に抱えたコウノトリにそっと語りかけました。あの日から40年。やっとかなえられた約束^{やくそく}です。

松島さんは、長く、つらく、苦しかった日々の出来事を一つ一つ思い出していました。

1963年、豊岡では野生のコウノトリがわずか11羽になっていました。

「人の手を加えて守ってやらなければコウノトリは絶滅^{ぜつめつ}する。」

という声があがりました。コウノトリをもう一度自然にもどすため、人里はなれた場所にケージ（コウノトリ保護増殖^{ほごぞうしょく}センター）が作られ、野生のコウノトリをつかまえることになりました。

高校生の時からコウノトリの観察を行っていた松島さんもそのメンバーに入っていました。つかまえることには気が進みませんでした。コウノトリを守るためだと自分に言い聞かせ、しかたなくつかまえたのでした。その時、松島さんは、（いつの日か必ず大空に返しますから）と心の中でコウノトリと約束^{やくそく}をしたのです。



【野生のコウノトリをつかまえた時】

1965年、いよいよ人間の手による飼育^{しいく}がスタートしました。

コウノトリの世話をする人がいないと聞いた松島さんは、まよわず飼育^{しいく}の仕事を受けました。松島さんにとって、あの日からずっと、コウノトリと交わした約束^{やくそく}をわすれたことはありませんでした。松島さんが24才の時でした。この日から、飼育小屋^{しいく}に一人でとまりこみ、コウノトリの世話を始めることになりました。

ケージの中のコウノトリは、初め、近づくとにげるようなしぐさをしていました。

日を追ってだんだん松島さんに心をゆるすほど、落ち着いてえさを食べるようになったコウノトリを松島さんは本当にいとおしく思いました。

しかし、松島さんは決してコウノトリになれなれしくはしませんでした。

「コウノトリを飼^かいならすのではない。いつかまた大空に羽ばたき、自然の中で生きていく

鳥なのだから」

あの日の約束^{やくそく}を胸^{むね}に、松島さんはけじめをつけていました。さらに、「ケージに閉じこめている以上、命をあずかっているのは自分だ。『しょうがない』はゆるされない。」

と自分に言い聞かせながら世話をしました。

ある日、ケージの中に右のつばさがだらりと下がり、血が出ているコウノトリを見つけました。お医者さんが診察^{しんさつ}するとつばさが折れていました。松島さんは事務所にコウノトリの寝床^{ねどこ}を作り、自分は一晚中寝^ねずに一生けんめい看病^{かんびょう}しました。

しかし、けがをしたコウノトリは、夜が明けるころ息を引き取りました。

これまでどんなに苦しい時でも涙^{なみだ}を流すことのなかった松島さんは、泣きくずれてしまいました。けがの原因は、ケージの中に植えてあった木にぶつかったことだと分かりました。外の世界より安全なはずだったケージの中で死なせてしまったことに、松島さんはとてもショックを受けました。

（おれは、何のためにコウノトリをケージに閉じ込めたのだ）

松島さんは何日もなやみ続けました。

そんな中でも、卵^{たまご}を温め続けているコウノトリの姿^{すがた}を見ていると、コウノトリが自分をはげましてくれているような気がしました。

「みんな元気か。今日もがんばろう。」

松島さんは、また元気をとりもどしました。

しかし、松島さんの願いはとどかず、コウノトリは次々と死んでいったり、卵^{たまご}がくさったりしました。原因を調べてもらうと、田の水銀^{すいぎん}を含んだ農薬^{なうやく}や合成洗剤^{ごうせいせんざい}が大きな原因になっていることが分かりました。コウノトリは、川や田んぼに住むドジョウ・カエル・フナ・ザリガニ・タニシなどを食べます。それらのえさを食べたコウノトリの体^{すいぎん}に水銀がたまり、だんだんよわっていたのです。

いつまでたってもヒナがかえらないので、しびれをきらした人たちからは、

「いったい、いつまでコウノトリと関わっているんだ。」

「鳥にお金を使うなら人間に使い。」

「飼育場^{しいくじょう}はいつやめるんだ。」

という声も聞こえてきました。

「これでは、コウノトリとの約束^{やくそく}も果たせなくなる。どうしたらいいのだ・・・。」

松島さんは毎日くちびるを噛^かみしめ、だれにもわかってもらえないもどかしさに心^{いた}を痛め続けました。

そして、とうとう最後のコウノトリもいなくなっていました。

そんな時、松島さんにとって、飛び上がりたくなるような知らせ^{とど}が届^{とど}きました。

1985年、豊岡にコウノトリがいなくなったことを知った旧ソ連から若く元気なコウノトリ^{わか}

が6羽おくられることになったのです。

センターにやってきたのは、農薬におかされていない元気なコウノトリでした。しばらくしてペアも誕生たんじょうしました。松島さんは、今度こそはという思いで、コウノトリのどんな小さな動きも見逃さないように気を配り、毎日毎日、心をこめて世話を続けました。

1989年5月15日、チーチーチー、松島さんは息をひそめてきき入りました。すると卵たまごの中からヒナが殻からをつつつく音も聞こえてきます。



「ヒナの声だ！」

松島さんは声を上げて喜びました。親鳥も口ばしを、穴あなの中にそっとさし入れ、

「がんばって出ておいで」

とはげましているようでした。

夜が明けるとき、その様子がはっきり見えてきました。卵たまごにあいた穴がくずれ、ヒナが殻からから出ようとしているのです。

午前6時3分、長い間の願いだったヒナが誕生たんじょうしました。産まれたばかりのヒナは、細い足ちからいっぱいを力一杯ふんばってピーピーと元気な鳴き声をあげました。

「よーし、元気そうだ」

24年間ずっと待ち続けた産声うぶごえでした。

親鳥になったコウノトリは、だれに教わったわけでもないのに、世話を始めました。くちばしでヒナ鳥をそっとよせて軽く体にさわってやったり、卵たまごの殻からをとりのぞいてやったりしています。松島さんには、産まれたばかりのヒナ鳥のどんな小さな動きも、また、やさしく世話をする親鳥のしぐさの一つ一つも、いとおしく感じられました。コウノトリの新しい命の誕生たんじょうに、松島さんは今までにない喜びを味わっていました。

2005年、今、コウノトリは100羽をこえています。この年9月24日、5羽のコウノトリがついに空に放はなたれました。

松島さんは、コウノトリとの約束は本当に果たせたのかと考えています。

64才になった松島さんは、

「これからが本当に大変なんです。」

といって遠くの空を見つめていました。

〈松島興治郎～コウノトリとの約束〉作成にあたって

1 発掘した素材について

2002年に豊岡に野生のコウノトリが飛来してから3年が経過した。コウノトリのケージの上に巣を作ったり、人里近く舞い降りてきて餌を探したり、さらに本年度は赤松の上に巣を作ったりと、まるでこの地にペアをさがして住み着くかのような気配を感じる。あの甚大な被害を但馬地方にもたらした2004年の台風23号の時ですら、この地から逃げることなく自分で餌を探し暮らしていた。

かつて、私が野上のコウノトリ保護増殖センターとコウノトリの郷公園の中間にある学校に勤務していた時のこと、幼稚園児が上げたたこに誘われ校庭の上を巡回したり、体育館の屋根に止まったりして人間を怖がったり警戒したりする様子もない姿をよく目にした。広げた白い羽は大きく、ゆったりと羽ばたく様はとても優雅だった。誰でも身近でその姿を見たら感動するにちがいない。

多くの児童は、コウノトリについては総合的な学習の時間で学んだり、新聞、雑誌、テレビ等で見聞きたりしていると思われる。平成17年9月24日、長年の夢だったコウノトリの放鳥が行われた。コウノトリが昔、我々と共に暮らしていた時代から絶滅の危機に立たされ、コウノトリの保護増殖が実施されてから、およそ半世紀という長い時間を要した。絶滅の原因は乱獲と環境問題にあった。人間が便利で快適な生活を求めてきたことの代償としてコウノトリは数を減らしてきたのだ。

今回の試験放鳥の主役はもちろんコウノトリであるが、しかし、それ以上に注目したい人がいる。その人の名は「松島興治郎」。コウノトリの放鳥までの半世紀の道のりは、松島さんの人生そのものだった。松島さんは、高校生時代生物部に所属し、その時からコウノトリの観察を続け他の誰よりもコウノトリについての知識があった。そういった経緯からコウノトリの飼育員になったのだが、当初は全てが未知の出来事ばかりで手探りの仕事だった。松島さんの人生は、コウノトリとの二人三脚の歴史だったと言える。そしてそれは、一言で「苦難の道」だったと片づけられないほど、地道で孤独な道のりだったにちがいない。

2 教材化にあたっての工夫

- ・ コウノトリと松島さんのことについて書いてある書籍を集め資料収集を行った。
本教材は、加藤紀子さんの書かれた『コウノトリ大空に帰る日へ』を参考にした。
- ・ 松島さんに何度かお会いし話を聞き、書物では得られない本音を聞き出すことができた。松島さんとのふれあいを通し、教師自身がその生き方に感動した。
- ・ 教材文を松島さんに見ていただき、内容等の整合性に誤りがないか確かめた。
- ・ 授業の中に松島さんの語りやメッセージを入れることで、より感動を与える工夫をした。
- ・ 実際に地域におられる人材を教材化する場合、その方とよく話をする。最初は、聞き役に徹し、何度となく足を運び思いを聞く。授業の中で直接話をしてもらう時は、事前の打ち合わせをしっかりとっておくことが大切である。

3 資料の特質

ゴミ処理の問題、森林の砂漠化、水の汚染、地球温暖化による異常気象など、地球規模で環境破壊が大きな問題になっている。児童のまわりでは、ゴミの出し方やリサイクル等が話題にあがり、環境への関心の高まりが生活の中に浸透しはじめてきている。40年前の自然環境破壊を主な要因とするコウノトリの絶滅は、自然愛護の精神を忘れていた人間への警告だったに違いない。

コウノトリが絶滅した理由は乱獲や環境問題にあったが、生態系を一度破壊してしまうと回復に膨大な時間と人間の努力と経費が必要になってくる。生き物（コウノトリ）にとって良い環境は、人間にとっても安

心して暮らせる環境であることに人間はようやく気づきはじめた。コウノトリの絶滅から、「再び大空へ返す」という約束を果たそうと、立ちあがって来た松島さんの生き方と行動を通して自然愛護の大切さに気づかせたい。

今の子どもたちがもつ課題のひとつに、地道な努力をさげ困難な事は簡単に諦めてしまう傾向があげられる。この資料を通して、困難な時も常に希望をもち、挫折した時も自分を信じ、立ちあがってきた松島さんの生き方に共感させたい。

《 コ ラ ム 》

松島さんがコウノトリの世話を続けることができたのは、幼少の時から生き物が大好きだったことと、日々の世話を通して目の前のコウノトリの生きようとする姿と、そして何よりも捕まえた時にコウノトリと交わした約束があったからだ。

ひたむきにコウノトリと関わってきた一途な思いは、真似のできるものではない。挫折を何度となく経験し、その都度、立ちあがってコウノトリに関わってきた松島さんがいたからこそ、放鳥にこぎつけることができたのだ。もちろん研究者や医者、行政のバックアップもあった。しかし模索の中でコウノトリと接し世話を続け、保護と増殖に人生を捧げてきた松島興治郎さんなくしてコウノトリの歴史はないし、放鳥の日を迎えることもなかったと思われる。

自然を、そのままにして放っておくことが「自然愛護」ではない。自然を大切にするということは、一方で「手をかけ守り育てること」なのである。山の木々も海の生き物も動植物なども環境を整えてやらないと生きられなくなってきたという現状があるのも事実である。

この様に実体験を伴った教材と出会い、気づき、実際の声や体験談を聞くことは、児童の心に響き、自分自身の生き方を考えるきっかけとなるに違いない。コウノトリを通して松島さんの生きてきた道そのものが教材として児童に与える力は大きいと思われる。

長い文章なので、児童の理解に差が生じる。国語の読解が目的ではないため、写真や年表などで理解を深めながら、松島さんの努力の道のりを教師とともにたどるようにしたい。

「これからが大変なんです」という中心発問を授業の終末に置くことで、コウノトリだけで身近な生き物などの自然環境愛護の大切さに迫るとともに、自分自身について振り返らせ、今後の課題についてはオープンに終える形としたい。

【参考文献】

- ・ 加藤紀子著『コウノトリ大空に帰る日へ』神戸新聞総合出版センター、2002年4月25日
- ・ キム・ファン著『くちばしのおれたコウノトリ（絵本）』素人社、2003年11月1日
- ・ 関口シュン著『いきものをまもるシリーズ1コウノトリのふるさと（絵本）』佼成出版社、2003年12月30日
- ・ 佐藤一美著『大空に飛べコウノトリ』講談社、1995年10月10日
- ・ 但馬コウノトリ保存会著『コウノトリ誕生但馬の空、いのち輝いて』神戸新聞総合出版センター1989年12月16日
- ・ 豊岡市立コウノトリ文化館『コウノトリ大空へ豊岡の挑戦』
- 「講演コウノトリと共に40年」松島興治郎（H13・11・13講演会にて）、講演会のビデオが但馬教育事務所に保管されている。
- 松島さんのコウノトリについての出前講座があり、直接話を聞くことができる。
- 兵庫県立コウノトリの郷公園から資料を得る。（インターネットでも得られる。）
- その他、[コウノトリ研究所][豊岡市市役所のサイト][松島興治郎さんの個人名のサイト]等も活用できる。



【松島さんからの聞き取りより】

松島さんは、家が農業であったため身近に牛や鶏などの生き物がいた。小さな時から生き物が大好きで、魚・かえる・なまずなどを自分で捕って遊んでいた。鶏・水鳥・鷹なども自分の秘密の基地に隠し、ペットのように育てた経験があった。遊びの中で「今にどんどん増やすんだ」と大きな望みも抱いていたようだ。この経験がコウノトリの世話を引き受けることにつながったということである。松島さんにとってコウノトリは、川で遊んで川原にあがってきた時、バサバサと音を立て飛び立っていったり、野原を駆けめぐる遊びの中にいた生き物だった。このように、松島さんは「生き物を抜きにして自分は存在しなかった」と言い切るほど生き物が好きだった。

高校生の時は、コウノトリの観察を放課後や休みの日も一日中していた。コウノトリの行動のひとつ一つが愛おしく思え、より身近な生き物になっていった。

コウノトリの保護運動をきっかけに飼育員になった。しかし、飼育についてお手本になるものはなく、一人ぼっちでセンターに泊まり込み、世話をする毎が続いた。保護増殖を始めてからコウノトリは次々に死んでいき、いろいろと試みたがうまくいかなかった。そんな時、世間の目は厳しく批判的であった。批判をする人はたくさんいても、具体的な手だてを示す人はいなかったという。松島さんは、誰も解決の方法が分からないことに挑戦していたのだ。

保護増殖活動がうまくいかず、自分がしたことに関心、自己嫌悪に陥ることもしばしばあり、投げだしたくなることもあった。しかし、代わりの飼育員も見つからず、生きているコウノトリを見捨てることはできなかった。困難に出くわすたび「なにくそ」と自分に言い聞かせていた。

自分自身に負けることが嫌だったし、自分で決めたことを途中で放り出すことはできず、継続していくしかなかったと語った。松島さんは、小さい時から生き物の生死を見てきて、人間は生き物に助けられていることを知っていたことが、続けられた理由でもあったようだ。

「コウノトリだって、毎年たまごを産んで頑張っているんだ。」くじけそうになった時も、コウノトリとの約束を果たす事を考え、25年目にしてやっとヒナの誕生を見ることができた。

松島さんは、人間には国境があり多くの問題もあるが、コウノトリなどの動物には国境はないと考えており、人間はまだ自然から多くのことを学ばなければならないと思っている。

あわじしま らくのう らくのう まんべい 淡路島に酪農を～三原酪農の父 田中萬米

まんべい
田中萬米は、明治25年淡路島南部（現南あわじ市）の賀集村に生まれました。島内でも有
しさんか
数の資産家の長男として何不自由なく大きくなりました。ただ、少し体が弱く学校を休まな
ければならないこともあり、そんな日は家の近くの田畑で働く人々の姿をよくながめていま
すがた
した。

農家の人々は、くわや、すきを使って田をたがやし、せい
精こんこめて米を作り、うらさく
裏作には麦
を作っていました。

しゆうにゆう
人々の暮らしを支える収入は米にたよるしかありません。お米を作っているのに、白いご
はんをおなかいっぱい口にすることなどほとんどありません。

まんべい
萬米の家とは全くちがうとても貧しい暮らしでした。

「あんなに一生けん命働いているのに、なぜ人々の暮らしは楽にならないのだろう。どうし
たら豊かになるのだろう。」

まんべい
いつしか萬米はそんなことを考えるようになっていました。

まんべい
やがて17才になった萬米は、島を出て加古川市にある県立農学校へと進みました。

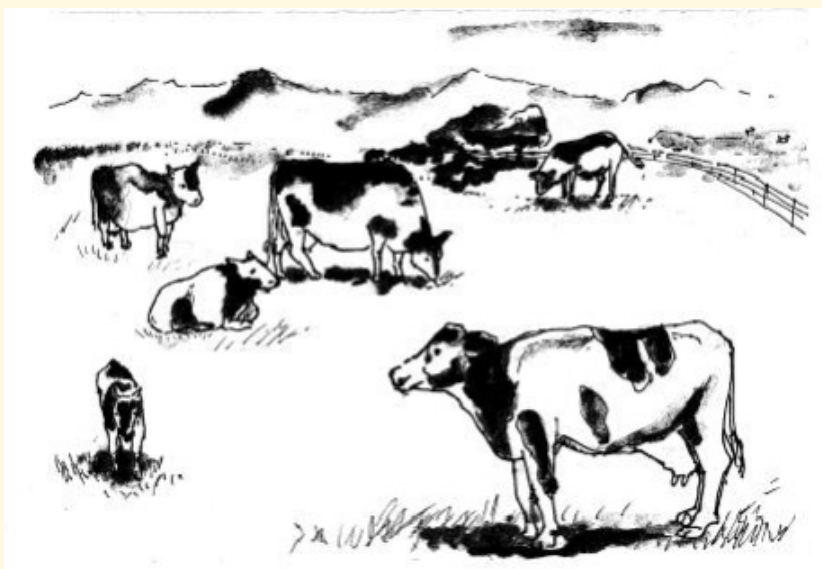
まんべい
そこで学んだことは萬米に大きな衝撃を与えました。海外には淡路島のような小さな島で
しょうげき
も豊かな農業を行っているところがあったのです。英仏海峡にあるガンジー島やジャージー
えいふつかいきよう
島です。そこにらす人々は農業と酪農を組み合わせ、にゆうぎゆう しいく
乳牛を飼育し、野菜作りや花作りを
行っているのです。田畑の面積

はせまいのに、人々の暮らしは
あわじしま
淡路島に比べると、大変豊かな
ものでした。

あわじしま ます すく
「淡路島を貧しさから救うのは
これだ！」

まんべい
萬米はさけんでいました。

まんべい
20才になった萬米は農学校を
卒業し、らくのう ゆめ むね あわ
酪農という夢を胸に淡
じしま
路島に帰りました。



さっそく乳牛を飼^{にゅうぎゅう}い始め、畑にはえさにする作物も植えました。そして仲間を集め、いっしょに乳牛の飼育^しを始めました。やがて少しずつ少しずつ乳牛を飼^{にゅうぎゅう}い始める農家が増えていきました。

しかし、しぼった牛乳の消毒やビンづめは全て手作業で行うため、牛乳として販売^{はんばい}できる量には限りがありました。せっかくしぼった牛乳を残してしまってもうけにならないので、20kmもの道のりを毎日天びん棒^{ぼう}で牛乳をかついで酪農試験場^{らくのう し けんじょう}に運び、バターにしてもらうこともありました。それでも牛乳が残^{ぎゅうにゅう}ってしまい、牛乳を川に流さなければなりませんでした。

自分たちの手でバターを作ることも試^{こころ}みしました。あまり良いものができずこれも失敗してしまいました。このままでは、牛乳の量^{ぎゅうにゅう}が増えても農家の収入^{しゅうにゅう}は増えません。

「牛乳を全部売れるようにしなければ。」

頭をかかえる日々が続きました。

「練乳工場^{れんにゅう}がどうしても淡路^{あわじ}に必要だ！」（※練乳：牛乳を煮詰めて濃縮^{のうしゆく}したもの）

先進地を見てきた仲間たちも同じことを考えていました。

「淡路島^{あわじ しま}に工場をつくってくれる会社はないものか？」

萬米^{まんべい}は日本中の練乳工場^{れんにゅう}にたのんでまわりました。1年以上話し合い、ようやく千葉県^{ちばけん}の工場^{あわじ}が淡路^{れんにゅう}に練乳工場を作^{けいやく}ってくれることが決まりました。契約^{けいやく}を交わすことができたとき、萬米^{まんべい}たちは手放しに喜びました。

「これでもう安心だ。三原^{らくのう}の酪農^{じゅんちよう}も順調に成長していくにちがいない。」

と、みんなはおおはりきりでした。「牛乳の量^{ぎゅうにゅう}を5倍にする」という会社との取り決めのことなど、だれ一人気にかけていませんでした。萬米^{まんべい}たちの目には、明るい将来^{しょうらい}だけが見えていたのです。

ところがちょうどそのころ、第一次世界大戦が始まりました。そのために物の値段^{ね だん}が上がり、牛や牛のえさの値段^{ね だん}もだんだん高くなってしまいました。新しく乳牛を飼^{にゅうぎゅう}うなどとんでもない話です。子牛が生まれてもえさ代が払えず、高い値段^{ね だん}で売れるならばと子牛を売ってしまう農家もでてきました。それどころか、牛を飼^かうことをやめてしまう農家さえありました。

こんな状態^{じょうたい}では牛乳の量^{ぎゅうにゅう}を5倍にするという工場との約束はとても果たせません。牛乳の量^ふを増やすどころか、減^へってしまう心配をしなければならなくなってしまいました。会社側からは、

「1年以内に乳不足^{ちち}が解決しなければ、工場はつぶすことになる。」

といわれていました。

考えこむ日が何日も続きました。萬米^{まんべい}の頭の中にはガンジー島やジャージー島の風景が浮かんでは消えました。

心を決めた萬米^{まんべい}は、一人けわしい表情で練乳^{れんにゅう}会社を訪ねました。工場長の部屋に入るなり、必死^{うった}の思いで訴えました。

「農家は、牛^かを飼うえさ代にも困っているのです。今より牛^ふを増やさなければ乳不足^{ちち}は解決できません。そのためのお金を貸していただけないでしょうか。」

「かんたんに金を貸すことはできない。金を出せば本当に問題は解決するのか。」

「しかし、今何とかしなければ・・・。どうか考えてください・・・。」

萬米^{まんべい}は何時間も必死になって工場長にくださがりました。

会社側の返事はありません。萬米^{まんべい}は力なく帰るしかありませんでした。

次の日も、次の日も萬米^{まんべい}は工場長のところに通い続けました。

何日か過ぎたある日、練乳工場^{れんにゅう}の人が訪ねてきました。萬米^{まんべい}の必死の頼み^{たの}が会社を動かし、ようやくお金を貸してくれることになったのです。

借りたお金を手に萬米^{まんべい}は、農家を一けん一けん^{たず}訪ねて歩きました。もう一度、子牛を売らないように説得^{せつとく}し、えさ代にお金が必要であればその場でお金が借りられるようにしました。子牛が生まれる手助け^{ちちしほ}をしたり、乳搾りを教えて回ったりと、考えられる手助けは全て行いました。



田中萬米の銅像

そして半年後、約束^{ぎゆうにゆう}の牛乳の量を送ることができるようになったのです。この半年の間ほど、萬米^{まんべい}が必死になって働いたことはなかったということです。

その後、三原^{らくのう}の酪農は何度となくむずかしい問題にぶつかりましたが、そこにはいつも何とかしよう^{まんべい}と、いっしょうけんめいに駆け回る萬米の姿がありました。

そして、大勢の人々が萬米^{まんべい}を信頼して、ともに三原^{らくのう}の酪農と農業を発展させてきたことが、今日につながっているのです。

〈淡路島に酪農を～三原酪農の父田中萬米～〉作成にあたって

1 発掘した素材について

5年生になると社会科で日本の産業の学習を行う。淡路島南部の三原地方（現南あわじ市）に住む子どもたちにとって、最も身近な産業は農業や漁業である。近年農業も機械化が進み、忙しい農繁期でも子どもたちの労働力をあてにすることも少なくなってきた。田んぼを近くに見ているが、農業は近くて遠いものになってきていることは確かである。

三原の農業はとても豊かなものである。それを支えているものは、温暖な気候であり、神戸や大阪といった大消費地である。そして、忘れてはならないのが先人たちの大きな努力である。今はほとんどの農家は野菜作りを中心にした農業を営んでいる。しかし以前はちがっていた。米の裏作にたまねぎを作り、副収入を得るために乳牛を飼っていた。農業に酪農を取り入れるようになったのは、明治時代のことである。そのころ人々の暮らしは大変貧しく、働いても働いても楽にならなかったということである。そのような人々のために、私利私欲に一切とらわれず、三原の農家の人々が豊かになるようにと、懸命に酪農を広め発展させるために努力したのが「田中萬米」である。毎月現金収入を得ることができるようになった当時の人々の暮らしは、少しずつ豊かになっていった。しかし、この酪農の発展もすべてが順調だったわけではない。幾多の困難も田中萬米の尽力があったからこそ、人々は乗り越えることができたのである。

子どもたちの様子は、小学校高学年とはいえ、地域の農業の歴史に触れることも、興味を示すことも少ないようである。子どもたちの目には、緑豊かな田畑の風景も、そこで一生懸命働く家族の姿もごく当たり前のものでしかない。それを見て、ありがたいと思ったり、農業を支えてきた人々に思いを馳せてみたりすることもない。そこで、酪農の発展にひたむきに力を注いだ人がいたことや、大勢の人々が三原の農業の発展に尽くし、守り続けてきたことに気づき、自分たちの地域や人々が守り続けてきた農業に誇りを持つことができるようになってほしいと願い、本資料を開発した。

2 教材化にあたっての工夫

萬米の努力を支えた「思い」にまで踏み込んだ指導が可能となる資料にするために、人となりやエピソードを交える。そのための情報や資料の収集を行う。

3 資料の特質

田中萬米は、私利私欲にとらわれず、三原の人々が、豊かな農業を営むことができるようにと、懸命に酪農を発展させようと努力した人である。どうしたらいいのが解決策が見つからず、その場から逃げ出したいと思うような問題にぶつかったこともあった。しかし、彼は人々と三原の酪農のために最後まであきらめなかった。彼をそこまで突き動かしたものは何だったのか。少年時代に抱いた、「淡路島を酪農の島に！」という夢であり、自分たちの住む淡路島をよりよくしたいという「熱き思い」だったにちがいない。つまり、

三原の人々や田畑に育つ農作物や人々が精魂こめて育てる乳牛への思いであり、ふるさとを愛する気持ちだったと考える。酪農の発展のために懸命に力を注いだ萬米の姿を知り、大勢の人々が萬米とともに酪農を発展させてきたことに気づかせたいと考えた。

資料中の状況や場面を分かりやすくするため、明治～大正にかけての三原の農家の人々のくらしや第一次世界大戦の頃の様子について、補足説明を入れながら学習を進めていく必要がある。また家業が農業という児童や乳牛飼育農家とともに減ってきているため、酪農についての説明も必要である。酪農が安定するまでの萬米の心の動きや、何度も何度も困難な問題にぶつかっても何とか切り抜けようと必死になり、苦しみながらもその都度乗り越えていく萬米の姿を想像することを中心に学習を進めていきたい。「萬米をここまで突き動かしたものは何だったのか」を考えることがこの資料の学習の中心になる。

資料を通して、子どもたちが自分たちの住む町のことをどう考え、またどのような思いを持ったかを問うことで、心の中にある「ふるさとへの思い」を引き出したい。

《 コ ラ ム 》

歴史学習を行っていない5年生で授業を行う場合、時代背景や歴史上の事実を理解することができるように、的確な補足説明を入れながら資料を読み進める必要がある。そのためにも、キャラクターの絵や言葉等を記したカードが有効な補助教具となる。

萬米が行ったことや時代背景を問うことは避け、それぞれの状況での萬米の行為を支えた「心の様子」を想像していけるような発問を構成する必要がある。

郷土に貢献した人物の偉業を学習するのが道德のねらいではない。人の行為を支える「心」へ共感する心はどの子も持っている。授業を通じて子どもたちの力を再認識している。

【参考文献】

- ・ 田村昭治著『ここに人あり―淡路人物誌―』
- ・ 田中萬米銅像建立委員会編『回想六十年』

かのう じ ごろう じゅうどう 嘉納治五郎～柔道の父

「やわらちゃん。がんばれ・・・！」

かん声（こゑ）があがる。2004年のアテネオリンピック柔道（じゅうどう）会場。今、まさに女子48キログラム級の決勝戦が行われている。あと30秒で、日本の谷亮子（たにりょうこ）の優勝（ゆうしょう）が決まるのだ。

「10、9、8、・・・3、2、1。」

「それまで！」

ゆうしょう
「優勝（ゆうしょう）です。日本で生まれた柔道（じゅうどう）が、オリンピックの始まったアテネの地で、金メダルを取りました。」アナウンサーがさげんだ。



今では、オリンピック競技となっている柔道（じゅうどう）は、明治のはじめ頃に日本で生まれ、世界中に広がった。2004年国際柔道連盟加盟国は、187カ国、世界中で約1000万人の人々が練習にはげんでいるといわれている。

柔道（じゅうどう）が日本のスポーツでただ一つオリンピック種目になるほど発展したかげには、柔道（じゅうどう）の国際化に力をつくした人がいた。柔道の創始者として知られる嘉納治五郎（かのう じ ごろう）である。

かのう じ ごろう
嘉納治五郎は江戸時代の終わり、神戸の御影で酒づくりと海運業を営む嘉納家（かのう）の三男として生まれた。11才（さい）のとき、父の仕事の関係で東京でくらすことになった。

小柄（こがら）で体の弱（よわ）かった治五郎は、力をつけたい、強（こゝろ）くなりたいたいといつも考えていた。そんなある時、治五郎は、ふと小さい頃（ころ）、母から聞いた話を思い出した。

治五郎の祖父（そふ）の家で、老柔術家（ろうじゅうじゅつか）と大阪（おさな）すもうの力士（りきし）のやりとりを実際に見たという話を幼（おきな）い治五郎に語った後で、母は、

「敵（てき）にさからわないのが、柔術（じゅうじゅつ）の極意（ごくい）なんだそうだよ。」

と、付け加（く）えたのを治五郎ははっきり覚えていた。治五郎にとって、小柄（こがら）な老人（たお）が力士（りきし）を倒（たお）したという柔術（じゅうじゅつ）は、「力の弱（よわ）い者が強い者に勝（か）つ方法（はうほう）」として映（うつ）った。

「柔術（じゅうじゅつ）というものをやってみたいものだ。」と治五郎はつぶやいた。

治五郎は、日本に昔（むかし）からあった柔術（じゅうじゅつ）の使い手（たず）を訪（たず）ね、一生（いっせい）けんめいにけいこにはげむ日が続（つづ）いた。とくに力の弱（よわ）い者がどうしたら力の強い者に勝（か）てるかをいつも考えながらけいこをした。治五郎は、自分より強い者とけいこをするようにしていたが、その中でも特に謙吉（けんきち）にはなかなか歯（は）が立たなかった。いつも相手の力（ちから）に引き回（か）されて、思うように動（うご）けない。兼吉（けんきち）に何とかして勝（か）ちたいと、がんばってみるがどうにもならない。

治五郎は兼吉（けんきち）に勝（か）つ方法を昼（ひる）も夜（よる）も考え続（つづ）けた。最初は日本（こゝろ）古来（らい）のすもうや柔術（じゅうじゅつ）の技（わざ）を応（お）用（よう）できないかと考えた。しかし、だめだった。図書館（とくしやん）で次（つぎ）々に本（ほん）を借りては、西洋（せいやう）の技（わざ）、レスリング（レスリング）の中に応（お）用（よう）できるものがないかと調べてみたが、なかなか思うようなものは見（み）当た（あた）

らなかった。

「うーん。おれには、兼^{けん}さんをたおすことはできないのか・・・。」

その時、治五郎の頭^{なづ}に懐かしい母の声が聞こえたような気がした。

(敵^{てき}にさからわないのが、柔術^{じゅうじゆつ}の極意^{ごくい}なんだそうだよ。)

「そうだった。相手の力を使^{けん}ったらどうだろう。兼さんがぐいぐいおしてくるとする。そのおす力を利用すれば、きっと兼さんをたおすことができる。」

思わず治五郎は明るい声でさけんでいた。

道場では、まず、友人にためしてみた。(よし、なんとかなる。) 治五郎は確信を持った。

さあ、いよいよ兼吉^{けんきち}に挑戦^{ちようせん}である。

兼吉^{けんきち}が力を入れてぐんぐんおしてくる。治五郎はぐぐっと後ろに下がる。ここまでは今までのけいこのときとまったく同じだ。

謙吉^{けんきち}がさらに前に出ようとしたそのときである。治五郎はさっと両ひざを曲げ、すばやく体を低くした。

「あっ！」

兼吉^{けんきち}の声と同時に治五郎^{けんきち}が兼吉の内^{けんきち}またに手を差し入れ、次のしゅん間^{けんきち}、兼吉の大きな体は治五郎の両肩^{りょうかた}の上にかつぎ上げられ、そのままストンと大きな円をえがくようにして投げ出されていた。

治五郎はその時、自分で学び、研究し、答えを見い出すことの喜びを知ることになる。また、これまで自分は勝ち負けにばかりこだわっていたが、柔道^{じゅうどう}のけいこで身に付ける様々な工夫や研究は日ごろの生活の中でも生かすことができ、人間としても成長することにつながることに気づき始めていた。

明治15年、治五郎は日本に伝わる柔術^{じゅうじゆつ}のすぐれたところを集め、現在の柔道^{じゅうどう}に一本化する。治五郎の理想は、柔道^{じゅうどう}を日本に、そして世界に広めることにあった。そのために、講道館^{こうどうかん}を創立して、柔道の普及^{ふきゅう}に携^{たずさ}わることになる。

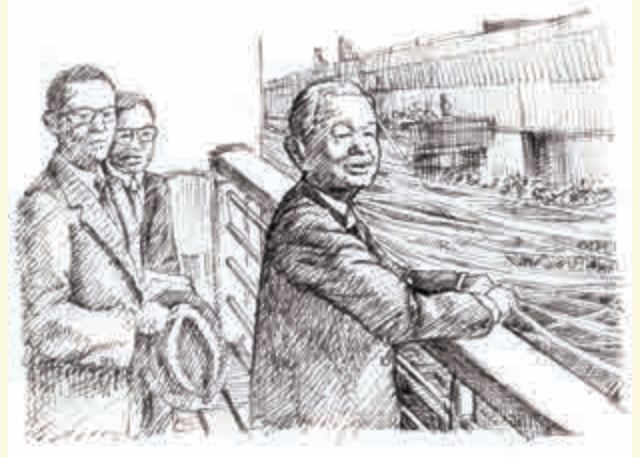
治五郎はまず、優れた指導者^{すぐ}を育て、全国の学校に柔道^{じゅうどう}が取り入れられるように働きかけた。柔道は、やがて日本中の大学・高等学校・中学校に取り入れられるようになった。また、町道場を中心に多くの国民にも愛好され、定着していった。

治五郎が熊本第五高等中学校長となり、生徒に柔道を教えていた頃、文学者として知られているラフカディオ=ハーンがここで英文学を教えていた。ラフカディオ=ハーンは、後に「東洋だより」という英文の本をボストンで出版するが、この中にJUJITU(ジュージツ)という項目^{こうもく}がある。「すべての柔術家^{じゅうじゆつか}というものは、その力を用いるのに非常に細かい心づかいをする。ちょっとでも無駄^{むだ}があってはならないからだ。最も理想的なのは、自分の力を少しも使わずに、敵^{てき}の力を利用するだけで勝つことだそうである。」と書かれている。この本が治五郎の柔道^{じゅうどう}を欧米^{おうべい}に紹介^{しょうかい}する上で大きな力となる。海外でも日本の柔道^{じゅうどう}に注目する国が出始めたのだ。



1889年（明治22年）、治五郎^{じゅうどう}は柔道を広めるため初めてヨーロッパに渡った。船の中でからかってきた外国人を投げ、その際に相手のけがを防ぐため、頭の下に手を差し入れて落下を助けた話は有名である。柔道がその技の合理性だけでなく、相手を思いやる精神性を持っていると評判^{ひょうばん}になった。その後も昭和8年（1933年）までの間に6回ヨーロッパに渡り、治五郎^{じゅうどう}はイギリス、フランス、ドイツなどで精力的に柔道の技を実際に見せたり練習法を教えたり、また柔道について語ったりして柔道を広める努力を続けた。現在でもヨーロッパでは柔道^{じゅうどう}の人气が高く、フランスの競技人口は日本よりはるかに多い。

その他、オーストラリア、ロシア、ルーマニアなど世界各地で講道館^{こうどうかん}の実力者たちが、柔道の普及に努めた。特に、明治36年（1903年）にはアメリカのルーズベルト大統領^{だいてうりょう}にも治五郎の弟子の山下6段が柔道を指導している。



柔道^{じゅうどう}がしだいに世界に広まっていくにつれて、治五郎は自らの心に疑問^{ぎもん}が広がってくるのを感じていた。

勝つことのみにこだわるのではなく、けいこを通じて人間としての成長を目指すという強い信念に基づいて「柔術^{じゅうじゆつ}」ではなく「柔道^{じゅうどう}」と名付けた治五郎であった。しかし、柔道^{じゅうどう}を広めるためには優れた精神よりも実際の試合での強さに魅力を感じる人が多いことに治五郎は悩^{なや}んだ。

治五郎の夢^{ゆめ}だった「柔道の国際化^{じゅうどう}」が実現したのは昭和39年（1964年）の東京オリンピックである。男子の正式種目として採用されたのである。しかしこの時、無差別級で日本は優勝^{ゆうしょう}を逃す結果となる。日本人以外の王者^{たんじょう}が誕生することになるのであるが、治五郎が生きていればこのことをどのように思ったことだろう。

女子の試合も、1988年（昭和63年）ソウルオリンピックで公開競技として実施され、1992年（平成4年）バルセロナオリンピックから正式種目となっている。



現在、「はじめ」「いっぽん」「わざわざ」「まで」「それまで」などの柔道の審判の言葉や「内また」「大外がり」「背負い投げ」などの技の名前は、ラグビーの「トライ」、サッカーの「オフサイド」などと同じように、世界語となっている。

また、国際柔道連盟（IJF）の規約第1条は「IJFは嘉納治五郎師範^{かのう しはん}の創設されたものを柔道と認める」と明記している。

〈嘉納治五郎～柔道の父〉作成にあたって

1 発掘した素材について

郷土資料の作成にあたり、どの人物を取り上げるかが大きな課題であった。選ぶ条件としては、

- ・ 知名度があって、教材化しやすい資料。
- ・ 子どもたちに親近感を持たせることができ、指導がしやすく、さらに効果が期待できる資料。
- ・ 子どもの興味・関心を高めるのにふさわしい資料
- ・ 今の時代に必要な「厳しさと優しさ」を併せ持った資料

以上を、最初の条件として考えた。

いろいろと調べている頃に、運よく『神戸ゆかりの50人PART2』（神戸新聞総合出版センター）が出版された。その中には、牧野富太郎、朝比奈隆、そして嘉納治五郎などの人物が掲載されていた。

最終的には、嘉納治五郎を教材化したが、彼であれば、若い頃のエピソードがたくさんありそうであり、子どもたちにとっても興味のあるスポーツを通して世界に貢献するということを考えさせることができるという確信のもとで決定した。

特に柔道を創始し、講道館を設立した治五郎が国際的な視野を持ち、柔道の技だけでなく、柔道の精神を世界に広めたいと考えていたことに気づかせることを中心として教材化した。

2 教材化にあたっての工夫

資料化においては、まず2004年のアテネオリンピックの話から始めることにより、興味づけを図り、次に、子どもたちの年令に近い、治五郎の青年期の柔道を創始する頃のエピソードから、治五郎の考える柔道の精神をとらえさせるよう工夫した。

柔道が普及するにともなって、治五郎が悩むことになる「心」と「技」について、子どもたちは自分自身のスポーツクラブ等での体験から「勝つこと」に価値を感じている場合もあると思われるが、それぞれの立場を尊重し、一つの価値にまとめることがないように配慮したい。

3 資料の特質

アテネオリンピック等での日本選手の活躍で柔道は子どもたちにとっても興味のあるスポーツの一つとなっている。子どもたち自身も、体育の時間だけでなく、スポーツクラブ等の様々な活動を通して実際に何らかの種目のスポーツに親しんでいると思われる。高学年になると、その中でも技術の向上に努力したり、工夫したり、また壁にぶつかったりといった経験を持つ子どもも多いと考える。

嘉納治五郎が自分の柔術を修行する中で自分の目標に対して努力したこと。また、その中で得たことをもとに柔道を創始するとともに、柔道の精神を広めようと努力した様子などを知ることから、子どもたちに今一度、スポーツにおける勝敗の意味やスポーツを通じて努力したり挫折したりすることが、心を鍛えること

につながることなどについて考えさせたい。

《 コ ラ ム 》

最近の子どもは、やる気がないとか根気強さに欠けるなどと指摘されることも多い。しかし、子どもは、大人の生き方を学ぶことにより、夢を描き、その夢が目標となり、学ぶ目的、学ぶ意味を作り出す。したがって、道徳の指導においては、資料に取り上げた人物に関心を持たせ、そこに自分の夢を実現するためのヒントを獲得できるように配慮しなければならない。

そこで、嘉納治五郎が講道館柔道を確立していった努力だけでなく、自分の創始した柔道が広まっていくに伴って治五郎が新たな悩みを持つことになることを提示することで、柔道の精神を追究し続ける治五郎の生き方についても考えさせたい。

【参考文献】

- ・ きりぶち輝著『世界の伝記 ⑨ 嘉納治五郎』ぎょうせい、昭和55年10月10日
- ・ 山本秀雄著『少年少女のための柔道』東京書店、1993年

＜自然体—ありのままの姿について＞



〈嘉納治五郎の柔道の精神〉

何事をするにしても、決して無理をしてはいけないし、むだがあってもいけない。この無理とむだは、柔道では必要ではなく、自然体、いわゆる、ありのままの姿で物事を処理していくことが大切であるということを表している。

強くなりたい負けたくないの一心から柔術を習い始めた治五郎だったが、柔道を身につけるようになると、そうした勝ち負けは問題ではなくなり、柔道は技も大事だが、心がきたえられなければならないと考えるようになる。つまり、他人には心やさしく、自分自身にはきびしい不屈の精神を養うことが柔道の精神である。

「新生児に生きる」～三宅^{れん} 廉 パルモア病院物語

出産とは本来、危険をはらむものである。分娩^{ぶんべん}（出産のこと）の際、赤ちゃんはおそるべき環境の変化に見まわれる。安定した母親の体内を出て、初めて産声を上げるまでの数分間は赤ちゃんにとっては、エベレストの山頂から一気に地上まで急降下する体験にも等しい。これが赤ちゃんの体と生命に影響を及ぼさないはずがなく、その影響は分娩^{ぶんべん}時間が長引くほど、つまり難産であればあるほど大きくなる。その過程で赤ちゃんは傷つき、ついには仮死状態で生まれるということにもなる。

昔から、このようにして生まれてすぐ、はかなく生命を落としていった赤ちゃんは、ぼう大な数にのぼるが、その事情は、日本に近代医学が導入された明治以降においても、それほど大きく変わったわけではない。

明治から昭和の初めまでの時期における新生児（生後10日ぐらいまでの赤ちゃんのこと）の死亡率は、出生1000人に対して、明治32（1899）年には約78人、大正14（1925）年には約58人、昭和15（1940）年には約39人である。乳児（生後1年末満）死亡率までを見れば、一挙に100人を突破する。戦前の日本では、実に10人に1人の人間が生まれて間もない時期に生命を落としていたのである。（ちなみに、現在の乳児死亡率は約300人に1人である。）

この時代、生まれたばかりで亡くなった赤ちゃんの病名は、「^{せんてんせいせいかつりょくはくじゃく}先天性生活力薄弱」だった。たしかに新生児はみな、小さくて弱いのだが、生まれたときの損傷^{そんしょう}は、それぞれ違っている。にもかかわらず、近年まで、このおそるべき名称^{いっかつ}に一括されていた。要するに、「生きる力がなかった」と、見捨てられていたのである。

三宅^{れん}廉は、明治36（1903）年、幸平・ふさ夫妻の三男として、神戸市中央区に生まれた。父・幸平は神戸で小さな貿易会社を営む実業家であった。

大正8（1919）年、一家を突然の不幸がおそった。廉が神戸一中（現・神戸高校）在学中の15歳の時である。父・幸平は大流行していたインフルエンザがもとで肺炎を起こし、わずか5日で急死したのである。まだ、47歳の若さであった。「兄弟仲良く助け合って行くように」が遺言^{ゆいごん}であった。

廉は大きな衝撃^{しょうげき}を受けた。そして、この父の死が廉^{れん}に生命とはいったい何かということを知り、初めて真剣に考えさせることになった。その結果、廉^{れん}は医学の道に進みたいと決意する。

小児科医となった三宅は当時の乳幼児の死亡率の高さを知り呆然とする。生命とは何か・・・、小児科医としての多忙な毎日の中で三宅は考え続けることになる。どのようにして新たな命をこの世に迎え入れ、育ていけばよいのか。

ある日病院内で生後間もない赤ちゃん^{じゅにゅう}と、幸せそうに授乳している若い母親の姿を見てい

た三宅は、これまで考えていたある思いがだんだん大きくなっていくのを感じていた。

赤ちゃんを生まれたときから責任を持って診ていくためには・・・・。

三宅はツテを頼って産婦人科の医師を回り、「赤ちゃんの医療に新たな息吹を吹き込みたい。」と熱心に語った。しかし、まだ医療部門の専門性の意識の根強い当時の医学界にあって、なかなか三宅の考えに賛同してくれる医師はいなかった。

昭和31（1956）年1月15日、国鉄（現・JR）元町駅にほど近い、県庁方面に向かう坂道の途中に、小さな病院が開院した。パルモア病院である。木造2階建て、ベット数21。およそ病院と呼ばれるもののうちで、最も小さな病院だった。小児科医の三宅を中心に産婦人科医、助産婦ら11名のスタッフが集まった。

三宅の考えは、〔分娩と新生児〕の部分で産婦人科と小児科医が共有するというものであった。具体的には、〔妊婦（胎児）〕の段階で2人の医師の綿密な話し合いを行い、母体と胎児の状態を互いに把握し、〔分娩〕には小児科医が必ず立ち会って、〔新生児〕をケアし、必要な場合はただちに治療に当たるというものであった。

三宅はスタッフに、

「私はこの病院で、長い間見捨てられてきた赤ちゃんの医療に、新たな一步を踏み出したのです。どうか、みなさんの力をください。」

といった。そして、

「産婦人科と小児科のはざ間に光を当て、適切な医療を施すことによって新生児を救うのが、パルモア病院の使命です。」

と熱っぽく語った。こうして、パルモア病院の毎日が始まった。

突然、妊婦の石野に陣痛が始まったのは、昭和31（1956）年2月11日の朝であった。灘の実家で、犬の散歩中に腹の痛み気づいた。予定日より1か月も早かった。あわててパルモア病院に駆け込んだ。

病室で陣痛の痛みをこらえる石野を、助産婦の小西は落ちつきはらって、「私がついてくるから大丈夫よ。」と励ました。産婦人科医の椿は、慣れた手つきで分娩の準備にかかった。この2人に比べて、落ち着かなかったのが小児科医の三宅である。石野のそばに行っては、「頑張るなさいよ、頑張るなさいよ。」と声をかけていた。考えてみれば、いちばん年上の三宅だけが、出産の新人だった。しかも、1か月も早い早産である。さすがの三宅も緊張していた。

分娩室に、石野が入った。椿と小西は分娩台に、三宅は石野の傍らに立った。痛みを苦しむ石野は無意識に三宅の手を握りしめた。すいこんだ息をとめて、腹に力を入れるたびに、石野は大きなうめき声を上げ、そのたびに石野の指が強く三宅の手に食い込んだ。

午後9時、大きな泣き声が病院中に響いた。小西が赤ちゃんをとり上げた。女の子だった。しかし、石野のほうは出血がひどく、意識がもうろうとなっていた。輸血しなくてはならない。椿は母体の処置にかかりきりになった。

小西が赤ちゃんを三宅に手渡した。標準より小さいのに、なぜか三宅にはずっしりと重く感じられた。そのまま隣の新生児室に抱いて運んで処置台におろし、そして、「落ちつけ」と自分に言い聞かせながら、聴診器を当てた。泣き声、呼吸、脈拍は正常だった。

一つ心配なことがあった。皮膚の色が青く感じられた。血液循環が悪く、体温が下がっている。「このままでは衰弱する」と思った三宅は、すぐに毛布で赤ちゃんをくるみ、暖めた。そして、傍らに立ち、どんな兆候も見逃すまいと、ずっと赤ちゃんを見守り続けた。2時間後、赤ちゃんの肌はきれいなピンク色に戻った。「先生この子はもう大丈夫です。」と、小西がいった。その言葉に、三宅は肩の力が一気に抜け、柔和な笑顔が戻ってきた。そして、いった。「ええ子や、これはええ子や」



輸血の終わった石野が病室に戻ったのは、午前0時過ぎだった。翌朝、三宅が赤ちゃんを抱いて石野のもとにやって来た。顔を喜びでクシャクシャにした三宅は、「いい子や、あんた、いい子産んだな」と石野に話しかけながら、赤ちゃんを渡した。

パルモア病院の出産第一号は、こうしてなんとか無事終わった。産婦人科医と小児科医の協力の成果であった。

パルモア病院ができてから、50年がたとうとしている。三宅廉がその生涯をかけ、めざした赤ちゃんの医療は、現在、「周産期医療」と呼ばれている。昭和59（1984）年、東京女子医科大学総合医療センターが開設され、そこで新生児部門を担当している仁志田教授は尊敬の念を込めて、三宅廉のことをつぎのように語る。

「若いころ、私が三宅先生に『私はこれから、新生児と生きていこうと思います。』と申し上げたら、先生は、『君、新生児に生きるんだよ』といわれました。わたしはそれ以来その言葉の意味を問い続けながら新生児の医療に携わっているのです。」

※ 周産期医療：産婦人科・小児科の壁を取り払い、「女性医学部門」「母性医学部門」「新生児部門」「小児保健部門」の4部門が協力して妊娠中から出産後までの全般を担う医療。

〈「新生児に生きる」～三宅廉^{れん}パルモア病院物語〉作成にあたって

1 発掘した素材について

私の妻が神戸で出産するのならと、知り合いから紹介されたのが、今回、教材文の素材として取り上げたパルモア病院だった。実際、私の妻、長女、次女ともここでお世話になった。私も何度が訪れたが、医師、看護師など、この病院で働いている人の表情がとても生き生きしていて、温かさを感じる病院だなあという印象をもった。あとでNHKで放映されたプロジェクトXを視聴するまで、私自身がこの病院について詳しく知ることはなかった。

『神戸ゆかりの50人PART2』（神戸新聞総合出版センター）を購入したところ、先述したパルモア病院の創設者である三宅廉のことが掲載されていた。個人的にもお世話になったことと、私を感じたこの病院の印象の良さが三宅廉について教材文を作るきっかけとなった。

まず、プロジェクトX「耳を澄ませ赤ちゃんの声～伝説のパルモア病院誕生～」をもう一度、視聴し直すとともに、パルモア病院に関する著作物をインターネットなどを通じて調査した。すでに絶版となったものもあったが、『パルモア病院日記～三宅廉と二万人の赤ん坊たち～』（新潮文庫）で三宅の献身的に新生児医療に取り組む様子を知ったとき心が熱くなり、この人について教材文を書きたいという思いを強くした。特に、小児科医として、生まれたときから15歳になるまで長期的視野に立って見守り続けるという生命に対する責任感と小児科を教育と結びつけ、特に母親への教育を重視している点は教職に就いている私にとっても学ぶべき点が多かった。

2 教材化にあたっての工夫

道徳の時間の教材として利用できるように、具体的なエピソードを中心とする内容とした。新生児医療の知識が中学生には乏しいと考えられるため、教材文の冒頭部分は新生児の死亡率の統計などの基礎的な知識を記している。

また、挿絵を盛り込むことで、読みやすい印象を与える工夫もおこなった。

導入は「人生最大の危機とは」と投げかけることによって、多様な意見を生徒から引き出したい。そして、アメリカのある医学者の言う「生まれてくる時が人生最大の危機である」という意外な答えを提示することによって、授業の動機づけとしたいと考えた。

教材文は、戦前までの新生児の死亡率、三宅廉の父の死、パルモア病院の誕生の意義、パルモア病院での初めての出産シーン、現在の新生児医療の5場面で構成している。当初は出産シーンの「なぜか三宅にはずしりと重く感じられた」の部分を中心場面にすることを考えていた。しかし、この部分では、生命の重さや生命に対する責任感については感じ取らせることはできるが、多様な意見が出にくいと考えた。そのため、結末部の東京女子医科大学の仁志田教授とのやりとりを中心の場面とした。この場面の教材文のタイトルにもなっている「新生児に生きる」という三宅先生の言葉と仁志田教授の「新生児と生きる」の違いを考えさせることで、命について考えさせ、ねらいに迫りたいと考えた。

教材文を作成する上で、中心場面をどこにするかということが最も重要だと考えている。なぜなら、授業

を構成する上においても、そこでの発問が授業の山場となり、この山が生徒にとっても適切な高さであれば、道徳の授業はうまくいくと考えるからである。

適切な高さとは、中心場面での発問が生徒にとって、簡単すぎず、難しすぎないことと多様な意見が出ることが期待できることだと考える。答えがすぐに見つかりにくく、そして、生徒がじっくり考えられる山の高さが必要である。そのことで、道徳の授業の中でありがちな、答えがわかっているからおもしろくないということは、防ぐことが出来ると思う。また、多様な意見が出ることで、授業に深まりが期待できると思う。

教材文の舞台となっているパルモア病院は現存するが、三宅廉は平成6年に他界されているため、文献を中心とした資料収集となった。具体的なエピソードが教材文としてふさわしいが、個人名や病名を詳しく記述している部分はプライバシーとの関わりもあるため、配慮の必要がある。

ただ、そればかり考えすぎると内容的に厚みが出にくく、訴えるものが少ない教材文となるため、バランスの取り方に工夫が必要である。

3 資料の特質

三宅廉の生き方を通して、生命の尊重について考えさせたい。具体的には、ものを言わぬ新生児が適切な医療を受けないまま、尊い生命が失われてきた実態に心を痛めて、自分の人生を新生児に捧げてきた三宅廉の姿勢を考えさせたい。特に、生命の連続性と有限性、生命の重さそして、一つの生命を救うためには一つの生命を燃やしてこそ可能であることを教材文を通して感じさせたい。

《 コ ラ ム 》

地域教材をつくる過程では、いろいろな資料や文献に出会うことになる。わたし自身も、今回の教材作成にあたって、『パルモア病院日記』という本に出会うことができた。教材をつくる過程では様々な困難もあったが、この本から大きな感銘を受け、わたし自身が教材作成を通じてたくさんの心の栄養をもらうことができたと感じている。

【参考文献・資料】

- ・ NHKプロジェクトX制作班編『プロジェクトX挑戦者たち8～思いは国境を越えた～』
日本放送出版協会、2004年3月20日
- ・ 中平邦彦著『パルモア病院日記～三宅廉と二万人の赤ん坊たち～』新潮社、1990年4月25日
- ・ 神戸新聞社編『神戸ゆかりの50人PART2～歴史と散策の観光ガイド～』
神戸新聞総合出版センター、2004年11月25日
- ・ NHKプロジェクトX制作班[プロジェクトX耳を澄ませ赤ちゃんの声～伝説のパルモア病院誕生～]（VTR）
NHKエンタープライズ、2000年

児童福祉の祖 ただ し ろう 大野唯四郎

外国からの蒸気船が日本を訪れ、鎖国していた日本が揺らぎ始めた江戸時代の終わり頃、柏原藩（現在の丹波市柏原町）の学半館塾という塾に通う15歳の少年がいました。背が高く、やせ身であった少年の名は、土倉八太郎といました。八太郎は学半館塾で儒学（孔子を祖とする政治・道德の教え）を学んでいました。

ある冬の日のことです。塾を終えて家路を急いでいた八太郎の目に、木枯らしが吹きつける中、寒々とした身なりで小さな赤ん坊を抱いて歩く和尚の姿がとまりました。

「あの和尚…、また赤ん坊を抱いて歩いているぞ。どうして和尚が赤ん坊を抱いてこの寒い中を歩いているんだろう。」

八太郎は足を止めて和尚のようすをうかがいました。和尚は赤ん坊が風に当たらないように気を配りながら民家の軒先で家人に声をかけ、通されて入っていました。

「これだけしばしば和尚の姿を見るということは、何か訳でもあるのだろうか…。そうだ、明日、塾で環山先生に聞いてみよう。」

環山先生は学半館塾の師で名を植木環山といました。温厚実直な人柄で、儒学に限らず様々な学問に精通していたので、人々の信望と尊敬を集めている人でした。

そう考えると、八太郎はまた歩き始めました。

この頃の日本は、ようやく学ぼうとする志さえあれば武士でなくても学問を修めることのできる時代になっていました。八太郎は上新庄村の豪農の家に生まれ、学半館塾に通いながら、もっともって学問を身につけて、この日本の国を背負って立つ立派な人になりたいという志を持っていました。

翌日、八太郎はさっそく昨日の和尚のことを先生に尋ねてみました。

「…それで、八太郎はその和尚をどのように見取ったのじゃ。」

白髪を後ろで束ね、長いひげを伸ばした環山先生は八太郎に尋ねました。

「なんとも不思議な姿だと…。仏門の戒めを破って子どもを持ち、妻の行方も知れぬまま、行き当たりばったりでもらい乳している姿のようにも見えましたが…。」

八太郎は昨日見た和尚の姿を思い浮かべながら答えました。

「ほう、そうか。…では八太郎。お前はその和尚に何ができるのじゃ。」

先生は再び八太郎に尋ねました。

「私にですか…。私には…、直接その和尚にできることはありません。しかし、もっと深く学び、人の道をまっすぐに探求します。」

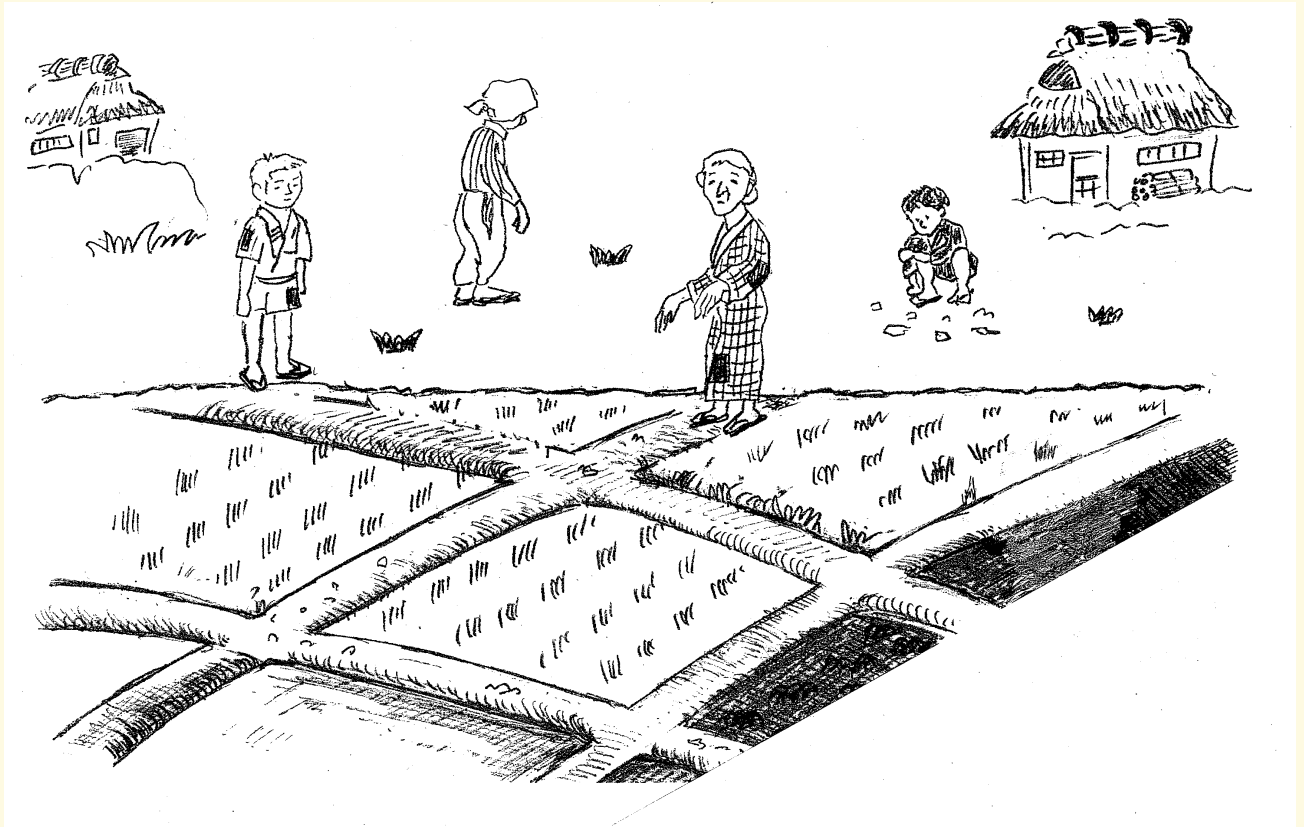
八太郎は笑顔で胸を張りました。先生はしばらく黙っていましたが、やがて目を大きく見開いて八太郎を見すえ、静かにこう言いました。

「学問は、実行に移さねば役に立たんのじゃよ、八太郎。あの和尚は、寺の境内に捨てられていた子どもを拾って育てておるのだ。『どこの誰の子とも知れぬが、せっかくこの世に生まれた命。粗末にしては地蔵菩薩に顔を向けられん。』と言ってな。いくら学問に優れていても、目の前の赤ん坊

一人に手を差し伸べられんようでは、学問の価値がないであろう…。今できることをし、なおかつ学問を究めるのであれば、学問は生きぬ。そうは思わぬか、八太郎。」

「……………」

八太郎の顔からは笑みが消え、八太郎は環山先生^{かんざん}の顔を見上げることすらできませんでした。



八年後の秋、八太郎は土倉家と深いつながりがあった竹田村石原（現在の丹波市市島町石原）の大野三郎兵衛の養子^{しゅうげん}となって盛大な祝言をあげました。そして、名前を大野唯四郎^{ただしろう}と改めました。大野家はこの地方に500年続いた豪農^{ごうのう}として知られた家でした。

明治維新を目前に控えて国は混乱しきっていました。当時の民衆の生活ぶりはひどいものでした。食べることができない民衆は、子どもを捨てたり死なせたりしてしまうこともありました。辺りには病気の人や身寄りのない子どもがあふれていました。

唯四郎が持ってきた土倉家の持参金も、大野家の借金に一部をあてなければならなかったほどで、人に頼まれてお金を貸しても返ってくることは少なく、貸し倒れが続きました。地方の庄屋もどんどん破産していました。まして、貧しい農民の暮らしは目を覆いたくなる惨状^{おおさんじょう}でした。この頃すでにことあるごとに手記をつづっていた唯四郎^{ただしろう}の記述には、次のような内容があります。

『今年は穀物^{こくもつ}の値があがり、暮らしに難渋している人が村内に21人いるので、米9斗金五両一分をその人たちにひそかに渡した。』

（ひそかに）という言葉は、それから以後の救済に関する手記にも必ず書かれています。これは受け取る側の人格を重く見る唯四郎^{ただしろう}の心のあらわれでした。

慶応三年一月の手記には次のような文章があります。

『香良村不動山（現在の丹波市氷上町香良）へ参詣^{さんけい}に行った。山に捨て子があるのを見た。人の命がここまで粗末にされているのかと唯四郎^{ただしろう}はがく然としたが、引き上げることもできずに帰った。』

「何とかしなければならぬ…」

唯四郎^{ただしろう}は部屋にこもり、明かりもつけずに何日も何日も考え込むようになりました。真っ暗な部屋の中で唯四郎^{ただしろう}は自分がこれまでしてきたことは何だったのか…と考え続けていたのです。

唯四郎^{ただしろう}は少年^{こころ}の頃、日本の国を背負って立つ人になりたいという思いを持ちながら学半館塾^{がくはんかんじゅく}に通っていた頃^{ころ}のことを思い出していました。突然、「お前は何のために学問をやってきたのだ。」という低くきびしい声^{こころ}が唯四郎^{ただしろう}の頭の中に響いたような気がしました。

「これではいけない。」

唯四郎^{ただしろう}は立ち上がりました。

唯四郎^{ただしろう}は明治元年から、捨てられた孤児^{なんしゅう}を自宅で養育し、また、生活に難渋^{なんしゅう}している人を見ると救済の手を差し伸べました。特に、貧困から養育できなくなって捨てられた子どもの救済と養育に力を注ぎました。ばく大な費用がかかるこの事業を続けるために、唯四郎^{ただしろう}は私財を投じるとともに、一人で関西や関東の政治家や文化人、経済界の人々を訪ね、「子どもの命を守りたい」という自分の思いを説いて回りました。しかし、理解は得られても、協力を得られる人はほとんど見つかりませんでした。

明治8年、協力を約束してくれた数人が出し合った資金^{ただしろう}と唯四郎^{ただしろう}の私財を投じた資金で、孤児を養育する大阪の施設『愛育舎』（現在の堺市にある『愛育社』の前身）を設立しました。

その後、この事業を続ける唯四郎^{ただしろう}の前には多くの障壁^{しょうへき}が立ちふさがり続けましたが、唯四郎^{ただしろう}は東奔西走^{とうほんせいそう}し、困難を乗り越え、死ぬまでその志を変えることはありませんでした。



明治12年、唯四郎^{ただしろう}の自宅の養育施設は『愛育堂』と名付けられて、捨てられた子どもや預けられた子どもを育てる施設として出発しました。この愛育堂は数年後閉鎖されましたが、現在の丹波市市島町^{ただしろう}では唯四郎^{ただしろう}の『愛育』の精神を尊び、愛育の里として今に語り継いでいます。

〈児童福祉の祖大野唯四郎〉作成にあたって

1 発掘した素材について

大野唯四郎とその社会事業を取り上げたのは、少年犯罪の低年齢化、凶悪化を見聞きするにつけ、「命を大切にすること」を育む教材をより多く採り入れたいと考えていたことと、遠い話ではなく、身近な地域の先人の中に「命を大切にすることの尊さ」を学べる人材を探していたことがきっかけである。

「大野唯四郎」という人物は、実は丹波地域でもほぼ無名といってよい。唯四郎が活躍した地元である丹波市市島町でさえあまり知られていない。市島町の歴史研究家や研究会が、大野唯四郎の偉業を讃えて記念碑を建てたり、その存在を書物に著したり広報誌等に掲載したりしているが、広く知られるところとはなっていない。近年建てられた記念碑についても、地域の児童・生徒にはそれほど知られてはいない。ただ、名前は知られていなくても、彼の行った社会事業が現在の児童福祉の先覚であることに違いはなく、生徒が「命を大切にすることの尊さ」を学ぶには十分な教材となると考えた。明治維新という混乱の時代に、多くの障壁を乗り越えた大野を突き動かしたものは何だったのか、何が彼を支えたのかを考えることが、子どもたちに「命」を捉え直す好機となるに違いない。

- ・ 大野唯四郎は日記を残しており、既刊本として日記を中心とした偉人伝が存在したことが教材化に非常に役立った。また、複数ある資料についてもこの日記を中心として記述されているため、内容・価値ともに差異が無く、参考になった。
- ・ 刊行物の内容・情報はできる限り収集した。ただし、著作権の問題から全文コピーはできない。地域の貴重本として帯出禁止となっている書物もあり、書き写しに時間がかかることもある。他の図書館では帯出が許可されているという場合もあるので、図書館のネットワークを利用して複数の図書館で検索したことも有効であった。
- ・ 取り上げた人物の直系の子孫（曾孫）の方が、兵庫県内ではなく大阪府八尾市に在住されているということであったが、教材化の許可は、現在大野唯四郎の墓地を管理されている方にいただいた。

2 教材化にあたっての工夫

できるだけ平易な言葉を使用するようにした。また、挿絵を入れることで、生徒が文章に入りやすいようにした。さらに、大野唯四郎の信念と決意を描くことで、命と真理の尊厳について考えを深めることができるよう工夫した。時代が変わり社会が大きな変貌を遂げても、大切にしなければならない命の大切さ変わらないことを学び、自己を振り返るだけでなく、信念を貫き通した先人に対する尊敬と郷土への誇りの念を抱かせたい。

教材文には多くを書かないことが大切である。つい、あれもこれも説明しないと理解できないのでは…と考えて、説明を加えたり登場人物に語らせようとしたりするが、書かないことで生徒に考えさせる場面が生まれ、それが「ねらい」と密接に関連づくような教材文とした方が効果的である。

地域教材は事実に基づいていることが必要であるが、大野唯四郎については本人の日記をベースとした刊

行物などから教材化を図った。

教材化する人物に関係のある地や記念物、親戚縁者等は複数回訪問してみる。土曜日や日曜日の訪問が多くなるが、その人の何かしら息づかいのようなものが書く側に伝わってくる。

取り上げている人物が個人であるため、教材化の許可、写真掲載の許可などをきちんと得ることが必要である。大野家の場合は直系は途絶えているが、地域には親戚関係の方がおられ、訪問して許可をいただいた。

3 資料の特質

身近な地域の人物を教材化したため、手記や実物の写真などが手に入りやすかった。それらをもとに大野唯四郎の生きた時代と唯四郎が行った社会事業について資料を作成することで、教材を身近に感じさせ、生徒の感じ方や学びを深めたいと考えた。

また、唯四郎の生き方に大きく影響を与えた学ぶことの真の意味については、この時期の生徒たちに自分の問題として考えさせたい。そのことで、唯四郎が一生を捧げた恵まれない人々を救済するという事業についても理解が深まるものと考えている。

〈 コ ラ ム 〉

低年齢化・凶悪化する少年犯罪が多発する原因について、「命を大切にする心が育まれていないからだ。」と嘆く声を聞く。命の尊さを頭では知りながら、一時的な感情の激昂から他者や自己を傷つける少年の数は年を追うごとに増加しているように思える。さらに気になるのは、自分のとってしまった行動の事実について冷静にとらえなおした後でも、大変なことをしてしまったという後悔や反省の言葉を聞くことが少ないことである。もちろん、少年の人権を守るという立場から、司法やメディアが公表を避けているという面もあろう。しかし、報道される現実を目の当たりにした時、目の前の子どもたちにもっと身近な形で命の大切さをとらえさせる方法はないのかと考えさせられる。

自然の中で「命に触れる・命を育む・命を損なう」といった体験が必要であると声高に叫ばれても、そのような体験をする環境にない地域の子どもの多くいる。そこで、子どもたちが「恵まれない子どもたちに自分の人生を捧げた地域の先人」の行いを知り、その生き方や考え方・言動について考えることが、「人や命を大切にする心の育成」に役立つと考えた。

地域の人であるが故に誇りも持てるであろうし、そこに住む自己への振り返りも効果として期待できるのではないかと考えた。

【参考文献】

- ・ 兵庫県教育委員会『郷土百人の先覚者』昭和42年
- ・ 兵庫県大百科事典刊行委員会編『兵庫県大百科事典』神戸新聞出版センター、昭和58年
- ・ 由良進次著『大野唯四郎』市島町史実研究会、昭和49年
- ・ 松井拳堂著『丹波人物志』丹波人物志刊行会、昭和35年

釣り針王国を北播磨に築く ～小寺彦兵衛

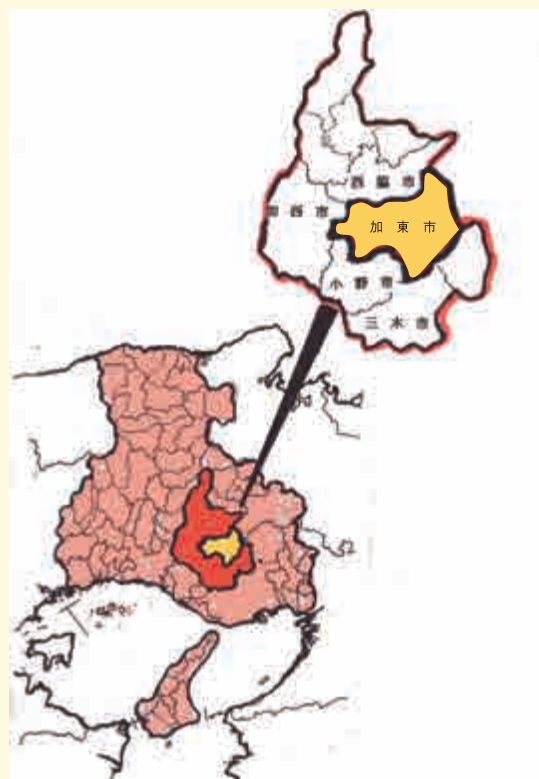
「それしか方法がないのか」

彦兵衛は、いろりの火を見つめたまま吐き出すようにつぶやいた。

天保^{てんぽう}11(1840)年11月。今年の年貢を納める期限まで、あと二日。村中が静まり返っていた。

肩が大きく揺れ、彦兵衛の目元が陰^{けわ}しくなった。今までは何とかして年貢を納めてきた。だが、もう今年は・・・。お上のやり方はあんまりだ。10年もの不作、凶作続き。この状況で期限までに年貢を無理にでもしぼり出せというのは、我々に死ねというのと同じことだ。私は庄屋だ。村全体のために、村人みんなのために、庄屋の私が今こそ決断しなければならない。

彦兵衛は、村人の苦しい生活ぶり、そして、年貢^{えんのう}の延納と年貢高の引き下げを思い切って三草藩勘定奉行^{かんじょうぶぎょう}に訴えることにした。



奉行^{ぶぎょう}は、無表情で彦兵衛を見つめて言った。

「庄屋の役目は、期限までに年貢を取り立て、三草藩にきちんと納める責任のみ。」

「……………」

「物がなければ人を出せ。」

「人を？」

「そうだ。江戸屋敷^{ほうこう}に奉公^{ほうこう}のものが必要じゃ。下久米村なら12、3人は出せるであろう。」

考えてもいなかった条件だけに、彦兵衛の顔色はみるみる真っ青になった。不作にあえいでいる上に、さらに働き手を奪^{うば}われることは、村人にとってたまらぬことだ。しかも、遠い江戸での二年間の奉公^{ほうこう}である。

彦兵衛は、重い足をひきずりながら下久米村に帰った。村では、村人たちが彦兵衛の帰りをひたすら待ちわびていた。

彦兵衛は、奉行^{ぶぎょう}からの申し入れを伝えた。あまりのことに村人たちは血相^{けっそう}を変えて彦兵衛に詰め寄った。

「それでもあんたは庄屋か。」

「そんなひどいことを言われたのに、黙って帰ってきたんか。」

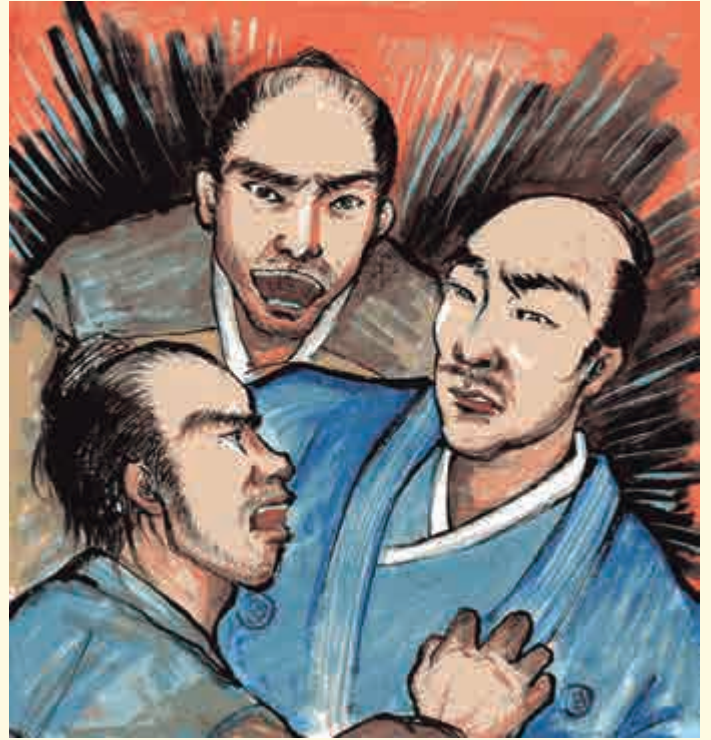
「わしらに死ねというんか。」

「あんた一人、助かりたいんか。」

前より過酷な状況に追い込まれた村人たちは、庄屋の彦兵衛を恨んだ。庄屋の仕打ちとしか思えなかったからである。

やがて、奉公に行く者が決められ、さらに今年の年貢納めも強行された。

彦兵衛は、自分の力のなさを情けなく思った。まわりから向けられる、不信と反発の目を強く感じていた。



明らかに村人たちは、自分に背を向けている。

彼は黙りこくって、いろりのそばに坐っている日が多くなっていた。

「私は一体何のために今まで生きてきたのか……。」

彦兵衛は、自分の行動を支えてきたものが音をたてて崩れていくのを感じた。

「もういやだ。ここから逃げ出したい。」

天保13年3月、彦兵衛は家族にも告げず、ひっそりと村を出た。彦兵衛はあてもなく、ただ歩き続けた。山陽路を歩き、瀬戸の海を渡り、讃岐（香川県）から土佐（高知県）に入った。

「気がつかれましたか。」

見知らぬ男が、仕事の手を止めて慌てて何かを隠した。暑さと疲れで家の前に倒れていたところを、どうやらこの男が助けてくれたようである。彦兵衛は礼を言い、しばらく休ませてくれるように頼んだ。

「どうぞ仕事を続けてください。」

しかし、男はいつまでたっても仕事にとりかかろうとはしなかった。彦兵衛は体を横たえ、目を閉じた。

しばらくすると、男は彦兵衛の気配をうかがうようにしながら、コツコツと仕事を始めた。彦兵衛が少しでも身動きすると、男もハタと仕事の手を止める。

いったい、何を隠しているのだろう。彦兵衛は思った。

これは見ていてはどうしても仕事をしない。仕方がない。寝たふりをしよう。

彦兵衛は、半目を開いてジッと男の手元を見つめていた。

釣り針か・・・。

彦兵衛の脳裏に、あの荒れ果てた下久米村の田畑の風景や貧しさに押しつぶされ、将来に希望を持ってないでいる人々の暗い顔が次々と浮かんできた。

釣り針か・・・。釣り針なら農家の副業にいいのではないか。米作りが出来ない時期にぴったりの収入源になる。お金を稼ぐことができれば、貧しい村人たちの暮らしも少しは楽になるのではないか。それに、釣り針ならかさばらず、持ち運びも便利だ。ああ、何とかして自分の手で釣り針をつくれるようになりたいものだ。

当時、土佐の国は、地方で唯一の釣り針の産地として優秀さを誇っていた。したがって、土佐の国以外の者には全てを秘密にし、絶対教えてはならないというしくみになっていた。自分たち土佐の国の者の生活を守るためである。

彦兵衛は、どうしても釣り針の製法を身につけたかった。そこで、彼は苦労して土佐の方言を身につけた。庄屋という身分を捨て、有名な針師、広瀬丹吉の家に下僕としてやっと入り込むのに三年の月日を要した。そして、五年間下働きをしながら、自らの全てをかけて、彼は丹吉針の技法を学んだ。



八年ぶりに、彦兵衛は播州下久米村に戻ってきた。荷物の中には、丹吉針と、その製法の道具が大切に大切にいられていた。

彦兵衛の目にうつる村の風景は、以前のままだった。刈り入れ時期のはずなのに、田畑に実りは少ない。民家からも食事の支度^{したく}を知らせる煙が出ていない。彦兵衛は、八年ぶりの村を見ながら、決意を新たにしていた。

彦兵衛は、すぐに釣り針の製造を始めた。ところが、肝心の「焼き入れ」のコツがなかなかつかめなかった。何度試しても失敗ばかりの日が続いた。「またあかん。」「また駄目か・・・。」丹吉針の秘密は、焼き入れにあった。焼き入れだけは、『広瀬丹吉』自らが行っていた。弟子たちにも一切触れさせなかったのだ。

彦兵衛は完全に行き詰まってしまった。出来た針は、丹吉針のような硬さ^{かた}にならなかった。

「これでは使いものにならない。」彦兵衛は、何十回、何百回と繰り返した。しかし、どうしてもうまくいかなかった。うまくいかないまま年を越え、とうとう夏になってしまった。

そんなある日のことだった。何百回目かの試みだった。

仕事場はうだるような暑さになっていた。「またあかん。」

がっかりした彦兵衛は、たばこに火をつけようとして、うっかり火のついた炭^{つぼ}を壺の中に落としてしまった。気を取り直して、針を取り出した。

「できたぞ、できたぞ。」

みるみるその顔に、喜びの色があふれた。

この偶然の成功がきっかけとなって、やっと釣り針製造が軌道にのり始めた。

彦兵衛は、広く弟子を募^つり受け入れた。そして、自分が習得し工夫してきた技法を弟子たちに一つ一つ^{ていねい}丁寧に教え込んでいった。自分が苦労して得た技法を惜しげもなく公開したのである。

またたく間に釣り針の製造技術は播州一円に広まった。『播州針』の名が諸国に伝わり、下久米村はその中心になっていった。

現在、兵庫県の釣り針生産は北播磨地域に集中し、その生産高は日本全国の約90%にも達している。



〈釣り針王国を北播磨に築く～小寺彦兵衛〉作成にあたって

1 発掘した素材について

北播磨地域を歩いていると、「山田錦」「釣り針」の文字の入った看板をしばしば目にする。田園風景が広がる地域なので、日本屈指の酒米である「山田錦」を掲げるのは当然であるが、なぜ、「釣り針」なのか。確かにため池が点在し、バスフィッシングも盛んに行われている。とはいえ、近くに海や湖が存在するわけではない。北播磨が兵庫県の内陸部に位置していることを考えると、どうしても違和感を覚えずにはられない。調べてみると、現在、兵庫県の釣り針生産は北播磨地域に集中し、その生産高は日本全国の約90%にも達していることが分かった。そこまで、釣り針産業が盛んなのはなぜかという素朴な疑問が浮かんでくる。

しかも、生徒たちの中に「自分たちの住んでいる北播磨地域は釣り針産業が盛んで、日本の約90%も製造しているのだ。」という意識はほとんど見ることは出来なように感じる。

そこで、「釣り針」を切り口にして郷土を見つめ直す道徳教材をつくることにした。

「釣り針」を語る上で、「職祖」と言われる「小寺彦兵衛」の存在は欠かすことが出来ない。そこで、加東郡下久米村（現加東市下久米）出身である小寺彦兵衛（寛政11年(1799)～明治3年(1870)）を題材とし、その足跡の一端を垣間見ることで、先人の思いを生徒たちに知らせ、郷土の一員としての自分の在り方について考えさせる契機になればと考えて教材を作成した。

彦兵衛は五代続いた庄屋であったが、農民の苦しい生活を見かねて「年貢の減免」を訴える。ところがそのことで、結果的に三草藩より一層苛酷な仕打ちをされる状況をつくってしまう。村人は不信の目で彦兵衛を見、それに耐えきれず、下久米村を出る。そして、四国巡礼中に偶然、土佐（高知県）で「釣り針」と出会う。苦節八年、「釣り針造り」の技術を学び、嘉永4年(1851)に帰郷する。工夫を重ねつつ、釣り針製造に励む日々を送る。しかも、技法を秘密にせず、弟子はもちろん同業者にも公開し、北播磨での釣り針産業が発展する最大の要因を築くことになる。

2 教材化にあたっての工夫

- ・ 著作権に配慮するため、既刊資料や一般に公開されているホームページをベースにして教材文を組み立てた。
- ・ 地元ならではの情報を活用する。
- ・ 兵庫県釣針協同組合が地元の北播磨にあるため、何度も足を運び、以下のような協力をいただくことができた。

ネットワークの活用→実物の提供

小寺彦兵衛関連のビデオ、音楽テープ、パンフレット、焼き入れの壺

釣り針・切断、尖頭、成型、焼き入れ前・後、漁業用各種釣り針

- ・ 「小寺彦兵衛」に関する情報やエピソードを出来るだけ多く収集するため、公共図書館や教育研修所、北播磨教育事務所、北播磨管内の教育委員会などから幅広い情報を得た。
- ・ 身近な地域にも彦兵衛のような人物が存在することを認識させる。

3 資料の特質

海から遠い北播磨の地が全国の90%もの釣針を製造していることから、郷土の発展に尽くした先人としてなぜ小寺彦兵衛を挙げることが出来るのかを考えさせたい。その中で、単に行動だけが立派なのではなく、さまざまな悩みや苦しみをどのように乗り越えていったのか、また、その奥に流れている郷土に対する思いや願いを感じ取らせ、生徒が自分との関わりの中で考えを進めていけるようにしていきたい。

《 コ ラ ム 》

生徒は、自分の生活の場である地域社会をより良くし、更に誇りにしたいという願いを抱いている。しかし、その願いとは裏腹に地域社会に対する生徒の関心はあまり高いとはいえない。それは、身近な地域社会が自分の生き方にどのように関わっているかを自覚することが難しいからである。このような実態の中で生徒が望ましい成長を遂げていくことができるように、郷土に対する関心を高め、郷土を愛する気持ちを育てていくことが大切である。その際、現在自分が生きていること自体がその土地の風土をつくり、郷土を形成していくことに気付かせたり、先人や周囲の人々の恩恵によって今日の自分が存在することに気付かせていく必要がある。

現在、北播磨地域の釣り針生産が日本の90%にも達していることをまず認識させる。そして、地域の発展に尽くし、自分の人生を精一杯生きてきた先人の存在に気付かせたい。その際、単なる偉人伝にならないように、悩み苦しみながら村を出るという葛藤場面を設定する。その上で「八年ぶりに村に帰り、彦兵衛を釣り針の技法の完成に突き動かしたのは何だったか」を主要な発問とし、「苦労して得た技法を、惜しげもなく公開した」彦兵衛の郷土愛の深さを考えさせたい。

場面は江戸時代だが、生徒が親近感を持つような現実味を持たせるようにするための表現の工夫が必要である。そのために、以下のような歴史的背景や地理的条件・焼き入れの仕組みなどを充分把握した上で取り扱うことができればより効果的である。

- ・ 歴史的背景…天保の大飢饉、天保の改革、年貢、
江戸時代の社会の仕組み・身分制度…藩・奉行・庄屋・下僕
北播磨の地域史
安政南海地震による四国地域の壊滅的被害、

- ・ 地理的条件…江戸、讃岐、土佐、北播磨の位置関係と移動時間
- ・ 科学関係……焼き入れのしくみ、炭素による化学変化について

従って、社会科や理科などの教科とも連携し、意図的に教材を扱う時期を設定することができればより効果的であると考え。その際、「道徳」として扱う領域と教科として扱う領域を授業者がしっかり区別して取り組むことが大切である。

この教材を用いた学習を機に、自分と郷土との関わりを改めて見つめさせ、先人に支えられた自己の立場の自覚、郷土の一員としての自己の役割にも目を向けさせたい。また、感謝の気持ちを持って郷土の発展に尽くしていこうとする意欲や態度を養うとともに、「郷土っていいなあ」という思いを生徒の胸一杯に膨らませていきたい。

【参考文献】

- 兵庫県釣り針協同組合 <http://www.hyoturi.or.jp/fishhook.html>
- ・ 兵庫県釣り針協同組合編『兵庫県釣り針協同組合60年のあゆみ』兵庫県釣り針協同組合、平成15年10月15日
- ・ 林薫著『野の石―義人・つり針師小寺彦兵衛伝』釣具時報社、昭和52年10月15日
- ・ ビジュアルブックス編『時代のパイオニアたち』神戸新聞総合出版センター、平成15年7月
- ・ 寺林峻著『播磨百人伝』神戸新聞総合出版センター、平成13年5月
- ・ 神戸新聞社編『播磨ゆかりの50人～歴史と散策の観光ガイド』神戸新聞総合出版センター、2003年8月8日
- ・ 安澤順一郎編著『郷土愛』明治図書、平成6年2月

第Ⅳ章

資 料

- 1 「地域教材の開発」素材例90
- 2 その他の参考資料101
- 3 児童・生徒が調べるワークシート例102

1 作成委員取材「地域教材の開発」素材例

〈民話や伝承等〉

〔船坂峠のひだる坊〕 西宮市の民話

- ・ 西宮北部にある船坂峠で休んでいた男が夢を見た。さむらいがふらふらしながら「いくさに負けたが、どうしても国に帰らねばならぬ。たのむ。何か食わせてくれ。」と頼んだ。
- ・ 男は「助けてあげたいが、何も持っていない。」とうそをついた。さむらいが、手を離さないで、恐ろしさでうなされている所を寺の和尚さんに起こされる。
- ・ 和尚さんに夢の話をする、そのさむらいはこの地で命を亡くしたものだという。道行く人に助けを求めたが、相手にされず、故郷に帰りたい無念を残して死んでいったということだった。
- ・ その話を聞いた男は、故郷に帰りたい今の自分の思いと重なり、夢の中でうそを言った自分を恥じた。男は寺で修行をし、夢を見たあたりをきれいにし、お供えをした。
- ・ その後、村の人たちは、船坂峠を通るときは、必ず弁当を持って行き、困っている旅人を見かけると弁当を分けて、介抱するようになった。

〔六甲山のでんぐ〕 西宮市の民話

- ・ 日照りが続き、水が干涸びた村が、困り果て、自分たちの村に川から水を引こうと水路を掘ろうとした。
- ・ 「自分たちの山に降ってきた水だから」ということで、川の上の方で村に水を引こうとする村と、それを阻止しようとする下流の村。
- ・ 水あらいが起ころいけるが、紋左衛門という人物が、天狗になりすまし、「この山から流れる水は、みんなのものじゃ。仲良く使え。」と叫び、争いをさけることができた。
- ・ その後、水路の工事も順調に進んだ。

〔村をすくった三平井〕 尼崎市の民話

- ・ 三平の村は、いつも水に困って貧乏であった。猪名川から水を引くことを殿様にお願いしたが、許されない。
- ・ 「このままやったら、村は全滅する。」そういって、村の中に猪名川までの溝を掘り始めたが、許しが出るめどもない。
- ・ 田植えの時期になっても、殿様からの許しはなく、となり村に水を引かせてくれと頼んでも、ことわられる。
- ・ 三平は立ち上がり、村人を集め、四斗樽の酒樽を集められるだけ集め、底をつないで管にした。それを前から掘ってあった溝にうめて、土手の土をかけた。猪名川の水は、酒樽の中を流れ、干上がった田に流れていった。
- ・ その秋、三平の村は、お米がどっさりとれたが、三平は、自分から責任をとって死んだ。

〔川守だぬきの川太郎〕 淡路の民話

- ・ 川守だぬきの川太郎は、この名のとおり。川をきれいにそうじしたり、川の土手をなおしたりして、川を守ってくれてたたぬきのこと。
- ・ 男の子に化けたちび川太郎は、千種川へ水くみにきていたさへいじいさんの手伝いはじめた。「坊はかしこい子じゃのう。まるで川太郎みたいじゃ。川太郎はこの川を守ってくれよるかしこいたぬきなんじゃ。川太郎がいつもそうじをしてくれるよって、きれいな水が流れて魚も元気ようおよいどる。」
- ・ なんだかうれしいちび川太郎は、しっぽで音頭をとりながら、山へ帰っていった。

〔なぎのまつり〕 たつの市

- ・ 県の重要無形民俗文化財に指定されている継ぎ獅子が披露される榑神社の秋祭りは、龍野市神岡町の人たちにとって、一年中で最も待たれるハレの日である。
- ・ 榑神社の獅子舞がいつ頃から奉納されたかは定かではないが、1719年に今日行われているような獅子舞の当番制を決定した記録がある。つまり、少なくとも300年近くは続いている伝統ある祭りである。
- ・ 同じ獅子舞とはいいいながら、地区によって伝統の型が微妙に違うので、どの地区でも伝えられた芸に対する強い誇りを持って伝承している。
- ・ お盆過ぎから毎夜一生懸命練習し、本番を迎える。舞を終えて、満足顔の子どもたち、また、伝統文化を受け継ぎ、守っているおじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さんたちの想いにも共感できる。

〈地域の発展に尽くしたり著名な働きをした人〉

〔安藤 信義〕 明石市

- ・ 日本でただ一店のガリ版印刷専門店。店には『ふれあいの印刷テepro』の看板が上がっている。
- ・ 心の通っていることでは、絶対にワープロに負けないという信念をもっている。
- ・ ガリ版を残さなあかんという強い思いは変わらない。
- ・ 強く書くと破れるし、弱いかすれる。一枚仕上げるのに何回も道具をかえる。
- ・ 字は読む人に分かりやすく、一定になるよう常に心がけている。
- ・ 指先に力を集中させるので、安藤さんの人差し指と中指にペンだこができています。

〔大上 宇一〕 たつの市

- ・ 揖保郡香島村（たつの市）の農家に生まれる。
- ・ 小学校に入学するが、生活苦から学校に通えなくなり、退校。父が病気がちのため、おばの家にひきとられる。
- ・ 宇一の心を癒してくれたのは、目の前に広がる美しい自然であった。
- ・ しだいに宇一は動植物に興味を抱くようになる。寝る時間をけずって、独学で貝やキノコ類などの動植物の研究に没頭する。
- ・ 36才のとき、西播磨と岡山県東部にしか自生していないコヤスノキを発見、世界の植物学会の脚光を浴びる。
- ・ 兵庫県産昆虫類研究の先駆者であるとともに、当時戦争への道をひたすら猛進していた日本の有り様を批判し、「日本が今、本当の文明国になるために必要なのは、学術の進歩だ。学術の進歩こそが、国の力を保ち、平和を保つのだ！」という信念を持ち続け生涯を通して研究に命を注いだ人であった。

〔三木 露風〕 たつの市

- ・ 小学校入学を目前にして、母と生き別れになった操（露風）は、さびしい少年時代をふるさと龍野で過ごしていた。
- ・ さびしい操の傍らにいて、いつも優しく支えてくれたのは、お手伝いの姐やであった。この姐やのことを詠った詩がかの有名な「赤とんぼ」である。母と別れて以来、ずっと心の底にしみこんだ孤独感を癒してくれた姐やの温かい愛情を思い出すにつけ、美しいふるさとと母への思いをいっそう強くしたものと思われる。
- ・ 16才のときに上京したが、遠く離れていても、ふるさとを愛し、母を愛し数多くの美しい詩を書き残している。

〔宝山 美男吉〕 たつの市

- ・ 全国的に有名な「手延べ素麺揖保の糸」。神岡町には「揖保の糸資料館」もあり、毎日たくさんの観光客が訪れている。しかし、このように有名になるまでには、「揖保の糸」の発展を願い、支え尽くしてきた多くの人々がいた。
- ・ 中でも、揖保の糸が品質の面から信用を失い、存続をも危ぶまれた時期、「そうめんの組合」創設に向け、生きるために職人としての心を失った人たちの心をまとめるために、寝食を忘れ立ち上がったのが宝山美男吉である。
- ・ 彼の考えに反発する人たちの中には彼の命まで脅かす者もいた。極限の状況の中で、彼の意志を貫き通させたのは、亡くなった父の「揖保の糸を日本一の素麺に」という最後の言葉だった。

〔仲 惣左衛門〕 三田市

- ・ 幼少時から僧侶について、儒学を学ぶ。18歳で大阪や京都に出て学問を深める。大阪では、白州退蔵と同門に学ぶ。
- ・ 故郷の三田に戻り、自宅で塾を開き、農民の指導的存在となる。
- ・ 幕末の藩の財政はひっ迫し、農民は苦しい暮らしが続いていた。明治に入って間もない1869年、三田は大冷害に見舞われた。冷害に加え、「郷学」の建設で農民には大きな負担がかかってきた。惣左衛門は、庄屋を動かして年貢の半減を訴えるが、認められず、農民たちは一揆を決断していく。
- ・ 政治は「民」が第一、民あってこそその政治という立場をとり、藩政改革の指導者白州退蔵と対立する。
- ・ 騒動は三日三晩続くが、その間、殺人行為は一度も行われなかった。それは、指導者の惣左衛門が、
 - 一、一切人命に危害を与えないこと
 - 二、一品足りとも盗んではならないこと
 - 三、藩兵に一切手出をしないことということをし、村人たちに徹底していたからである。
- ・ その結果、年貢の半減は認められたが、惣左衛門は死刑になった。

〔白州 退蔵〕 三田市

- ・ 江戸から明治へと時代が移る中で、三田の藩政改革の中心的な人物として活躍した。
- ・ ひっ迫した藩の財政の立て直しに尽力した、一方で教育にも力を注ぎ、いち早く時代の変化を見つめ、「農民にも教育を」「女性にも教育を」と教育の必要性を訴え、誰もが教育を受けられる奨学金の制度も作った人物である。
- ・ 15歳で大阪に出て儒学を学ぶ。その後、江戸でも儒学を学び、故郷の三田に戻り、藩校の教授となる。
- ・ 34歳の時に、藩主からその人柄と学識が認められ、藩政に参画することになる。退蔵の藩政改革は、財政改革にとどまらなかった。これからの時代は、農民も農業だけをしているのではなく、学問が必要と考えた。
- ・ そして、各村々に「郷学」を作っていった。退蔵は、自らも藩の恩恵のもと、教育を受ける機会を与えられたことから、教育の重要性を強く感じ、誰もが等しく教育を受けることを願っていた。
- ・ しかし、退蔵の進んだ考え方を、村人たちには理解する時間がなかった。郷学の設置は、農民にも新たな負担を生んだ。そして、三田を冷害が襲い、村人たちの不満は、明治2年の百姓一揆へと向かう。
- ・ しかし、その後も退蔵は教育を重視した藩政改革を続けていく。

〔塚本 稔〕 三田市

- ・ 明治31年（1898年）三田市母子に生まれる。
- ・ 13歳（1911年）で朝鮮半島に渡り、その後朝鮮総督府観測所助手、22歳で測候所長になり、朝鮮半島各地の観測所を転勤する。この間、測候所技術官養成所で気象学を学ぶ。
- ・ 25歳（1923年）、楚山（チョサン）で「氷霧」という現象を観察し、発表する。「氷霧（アイスフォッグ）」という現象は塚本が初めて観測し、発表した。「氷霧」は現在でも気象用語として使用されている。
- ・ その後、朝鮮半島全体の気象の統計資料と、気候図の作成にとりかかる。
- ・ 47歳（1945年）で終戦を迎えるが、気候図が未完成であったため、完成までの1年間抑留生活を送る。食料も乏しく、厳しい生活環境の中、気候図完成後の命の保障もない中で、朝鮮の人々の今後の生活に欠かせない気候図の完成という使命感のもと、観測を続け、終戦から1年後に気候図を完成させ、日本に帰国する。
- ・ 56歳（1954年）故郷の三田に戻る。自宅に地域観測所を開設し、昭和31年1月14日から昭和50年12月31日までの20年間、1日も欠かすことなく三田の気象観測を続け、その記録を残した。観測ノートは200冊を超える。
- ・ その後、そのデータはニュータウン開発やダム、高速道路の建設に欠かせない貴重な資料となった。

〔川本 幸民〕 三田市

- ・ 今から約200年ほど前、江戸時代も終わりに近づいたころの三田に生まれた。若いころ、緒方洪庵とともに坪田塾で蘭学を学ぶ。
- ・ 日本で初めて「化学」という言葉を使った人物。
- ・ さまざまなことがらに興味を持ち、西洋の学問を熱心に研究し、それを実際に試してみないと気がすまない性格で、特に物理、化学の分野を深く研究し、「日本近代化学の祖」とうたわれた国際人。
- ・ 研究に明け暮れる幸民に、自分の患者でもあったある商人が不意に「外国には便利な火つけ棒という物があるそうだ。」と話したところ、幸民は、何度も何度も失敗しながら、ついに完成させ、その商人の前で火をつけてみせたという。
- ・ 川本幸民は日本で初めて、マッチやビールを造った人物と言われている。
- ・ 1857年、近畿は大干ばつとなり、三田藩の財政は悪化。そのため、住民の税をもっと重くしようと話し合いが行われたとき、幸民は大反対した。そしてこれまでためてきた300両を藩に差し出している。

〔大対 勇三郎〕 篠山市

- ・ 大対勇三郎翁は1888年後川村後川上に生まれた。性格は温厚で極めて勤勉で、西宮市の酒造会社に56年間勤務した。
- ・ 1955年多紀郡の酒造出稼ぎ者は2,026人を数え、その収入は当時の家計の25%を占めていたと言われている。しかし、酒造出稼ぎの門は、すべての人たちに開かれていたわけではなく、昔から続いてきたいわれなき差別を受けていた村の人たちには堅く閉ざされていた。
- ・ 1956年当時の城東町では教育委員長であった金剛寺住職北村昌亮老僧を中心にして、全村教育活動が起こった。話し合いの中で当面する大きな願いのひとつとして、酒造出稼ぎの問題が出された。
- ・ 門戸開放の取組は約20人が村内の杜氏を一軒一軒回ることから始められた。一方で第1号として東田青年に白羽の矢がたてられた。
- ・ そのような中で、大対勇三郎杜氏が自らの力で偏見を打ち破り、会社と掛け合いその門をこじ開けた。10月8日、東田青年のもとに大対杜氏から「採用する」という朗報が届けられた。大対杜氏にとっては杜氏生命をかけた英断だった。

〔和田 義一〕 篠山市

- ・ 農家の次男として生まれ、京都に行き、繊維とひもを作る会社をおこした。終戦後、故郷の西紀町に帰り、全財産を出して、農民の働く場所をつくった。
- ・ その後、将来日本は高齢化社会になることを早くから考え、昭和32年(1957年)にお年寄りのための福祉施設を設立した。
- ・ 和田さんが亡くなられた後も、その遺志を受け継ぎ、お年寄りのくらしを手助けする施設として活動が続いている。

〔和辻 哲郎〕 姫路市

- ・ 和辻倫理学と呼ばれる独自の倫理学を樹立。
- ・ 姫路市仁豊野の医者の子男として生まれ、姫路中学（現姫路西高）を経て、東大哲学科に入学して西洋哲学を熱心に学ぶ。東大に入って哲学を専攻しながらも、和辻は岡倉天心の美術論にひかれ、小説や戯曲を雑誌に発表するなど文芸への関心を見せる。
- ・ そして、明晰な頭脳と熱い心で血の通った思想を展開していく。
「日本古代文化」「人間の学としての倫理学」「風土」など、特異で豊かな思索を端麗な文で展開させ、文化史、思想史の分野でもすぐれた仕事を残す。
- ・ 昭和25年に日本倫理学会の初代会長となる。

〔野口 ゆか〕 姫路市

- ・ 日本保育事業の創設者。日本最初の恵まれない人のための保育所を創設。
- ・ 野口ゆかは、慶応2年（1866年）2月1日、姫路藩士の長女として生まれる。
- ・ 姫路の総社にあった寺子屋や田島藍水の私塾に通っていたが、明治5年に学制が發布されてその翌年に姫路にも小学校ができると、そこに学ぶようになる。
- ・ 後に東京に行き、東京女子高等師範（現お茶の水女子大）の第1回卒業生となる。卒業後、華族女学校（のちの女子学習院）附属幼稚園に務め、幼児教育に携わる。皇族をはじめ、華族の子弟の多くが幼稚園時代にゆかに教えられている。明治38年、華族女学校教授。
- ・ ゆかは、このように経済的にも社会的にも恵まれた家庭の子弟の教育に従事しながら、それとはまったく逆に恵れない家庭の子どもが満足な保育を受けられないで放任されていることを見過ごせなかった。
- ・ ゆかには、一生を幼児教育に捧げようという情熱があった。東洋のフレイベルになろうとしたのである。そして、日本最初の貧民のための保育所として二葉幼稚園を開設した。

〔都築 正男〕 姫路市

- ・ 原爆症治療の父。1892年姫路市光源寺前町で生まれる。
- ・ 東京帝大卒、海軍軍医、東京帝大教授を経て、1954年、日本赤十字社中央病院院長、結核性疾患の外科的治療を行った。
- ・ 胸部外科の権威として放射線医学を確立する。
- ・ また、広島・長崎で初原爆被災者の治療にあたり、ビキニ水爆による第五福竜丸乗組員の診療も指揮した。
- ・ 「核は人類を滅ぼす」と世界で初めて警告した。日本放射線影響学会を創始。
- ・ 姫路市名誉市民第一号で、「原爆の父」と言われている。

〔清瀬 与右衛門〕 姫路市

- ・ 飾磨郡夢前町杉の内の新田開発をした人。
- ・ 1860年ごろの杉の内の二反田と坂根は、ほとんど米ができない土地だった。
- ・ 二反田は粘土質の土地で、水はけが悪く、雨が少し降るとすぐ、大変なぬかるみになってしまったり、良い天気が続くと土がカラカラになり、地割れがした。
- ・ 坂根は二反田より少し土地が高いので、水をほとんど引くことができず、草がはえて石などがゴロゴロした荒地で米をつくることがまったくできず、畑にするのが精一杯だった。
- ・ そこで、与右衛門はみんなで力を合わせて田んぼを整理し、田んぼの下に、水はけをよくするためのといを入れる工事を行った。また、小さな池を大きくし、水がもれないように、石を埋め込んで丈夫にする工事を行った。
- ・ 水あらいがないように分水石を埋め込んだり、イノシシが入らないように石垣を作ったりもした。
- ・ くわやつるはしで土を掘り、もっとこや車力で土を運ぶ大変な工事だった。多くの村人が働き、たくさんのお金と2年もの年月がかかった。おかげで、米の取れ高も増え、村人たちは、後に石碑を作って今も大切にしている。

〔東井 義雄〕 豊岡市

- ・ 明治45年4月9日生まれ（1912～1991年）。昭和の教育者。
兵庫県出石郡但東町佐々木東光寺の長男として生まれる。
- ・ 小学校1年生で実母と死別する。貧乏生活の中で奨学金をもらいながら、勉強を続け、姫路師範学校を卒業。
- ・ 「村を育てる学力」を培う実践を行う。（生活からかけ離れた学問ではなく、生活の中から課題を発見し、教師・地域と課題を共有し、問題を解決していく過程の中から子どもの生きた学力が確立することを発見し、実践した。）
- ・ 昭和7年豊岡尋常小学校を皮切りに教員になり、生活綴方運動を実践する。
- ・ 戦後は母校の相田小学校で、書くことによる「ほんものの教育」を展開。
- ・ 以後、県内の小・中学校長を歴任した。著書に「村を育てる学力」などがある。

〔植村 直己〕 豊岡市

- ・ 昭和16年2月12日生まれ。（1941～1984年）昭和時代後期の登山家、冒険家。
兵庫県城崎郡日高町上郷に農家の6人兄弟の末っ子として生まれる。
- ・ 子どもの頃の直己は、野山を駆けめぐり、蛇などの小動物をペットのようにしていた。高校卒業後、運送会社に就職したが、大学進学を志し、1年後明治大学農学部に入學する。明治大学で初めて山登りを体験する。それ以来、山岳部に所属し、登山に熱中していく。身体は小さく、黒い顔だったので、「どんぐり」というニックネームがあった。
- ・ 45年日本人初のエベレスト登頂。同年夏マッキンリーに登頂し、世界初の5大陸最高峰登山を達成。48年アマゾン川を筏でくだる。51年北極圏1万2000kmを犬ぞりで単独走破。59年2月12日マッキンリー冬期単独初登頂に成功、その下山途中に消息をたった。
- ・ 本人いわく、自分はとても怖がりな人間である。そのため、綿密な計画と準備をして臨むのだと。また、直己は、気配り、思いやりのある人で、隊員の奥さんにまで、山から手紙を出し、状況を連絡していた。常に控えめで努力を惜しまず、素朴な人柄だったと言われている。
- ・ 著作に「青春を山に賭けて」「極北に駆ける」などがある。

〔田中 正平〕南あわじ市

- ・ 文久2年5月15日生まれ。明治-昭和時代前期の音楽学者、物理学者。
- ・ 明治17年明治政府に命じられ、森鷗外らと共にドイツに留学をする。ヘルムホルツに音響学を学び、その間純正調の研究を行い、23年世界ではじめて純正調オルガン「エンハルモニューム」の試作に成功した。
- ・ その後、ドイツ政府からも認められ、助成をえて純正調パイプオルガンを完成させる。
- ・ 明治37年ドイツから帰国するが、日本の音楽界はエンハルモニュームを受け入れるほど成長していなかった。そのため、鉄道関係の仕事につく。
- ・ 帰国した翌年より邦楽の採譜を開始する。自宅に邦楽研究所を開き、多くの邦楽曲を採譜した。鎖国200年間に育ててきた邦楽は、日本民族文化の音楽であり、その近代化と発展のために純正調の理論で分析採譜しようと考えたのである。
- ・ 学者というものは、学問をもって世に報うべきものであるから、学問を自己の名誉や地位を得る方便にするのではなく、その学問を生かして世の中の人々が幸せな生活ができるように務めなければいけないと語っている。

〔岩田 康郎〕洲本市

- ・ 旧洲本川は、川幅が狭く、年に1・2度は必ず氾濫し、洲本の街を水浸しにしていた。
- ・ 自分自身が町民から危害を加えられかねないような状況にありながら、災害を防ぎ、洲本港を拡張するための工事の陣頭に立つ。
- ・ 明治37年7月、工事は完成し、竣工式が行われたが、康郎は体調を崩し、16年間務めた町長の職を辞す。
- ・ その後、この工事で廃川となった旧洲本川は埋め立てられる。41年、紡績会社が誘致され、洲本の近代化が進められる。

〔小磯 良平〕神戸市

- ・ 小磯は明治36年に神戸市中央区に生まれる。
- ・ 親しみやすい女性像を中心としながら、西洋絵画の伝統の中に、市民的でモダンな感覚と気品あふれる画風を完成させた。
- ・ 当時の神戸は、外国貿易の窓口となっていた旧外国人居留地を中心に発展しており、小磯は洋館の建ち並ぶ街で自然に「西洋的な空気」を吸って幼年期を送る。
- ・ 小磯は、神戸二中（現兵庫高校）に進学し、生涯の親友となる竹中郁と出会う。
- ・ 後に神戸を代表するモダニズム詩人となる竹中の影響もあり、小磯の心の眼はヨーロッパに向けて開かれた。
- ・ 大正10年（18才）に岡山県倉敷に竹中と一緒に出かけ、公開していた大原コレクション「現代フランス名画家作品展覧会」に感動し、画家への志を強める。
- ・ 優れた描画力を十分に生かしながら、「欧州絵画の古典的な技法を日本の洋画に根付かせる」ための研究を根気強く続け、独自の画風を開いた。
- ・ 母校の教授として東京芸術大学で教鞭をとり、画学生たちの若い感性を大切にした指導で、日本の洋画界に大きく貢献した。

〔淀川 長治〕神戸市

- ・ 家族全員が活動写真（映画）好きで、彼の母は活動写真の小屋の中で産気づき、長治が生まれた。
- ・ 生まれるときから活動写真に関わりをもっていた長治は成長するにつれてますます映画にのめり込み、小学校では映画好きの友人と映画の話ばかりしていた。
- ・ 映画雑誌の編集部員、洋画配給会社の日本宣伝部長、雑誌編集長などを務め、後、フリーとなっ

て評論活動を続けた。

- ・ 1932年には、神戸に立ち寄ったチャップリンに会い、インタビューを行っている。チャップリンとはその後も良好な交友関係を続けた。
- ・ 特に、テレビの洋画番組では、30年以上も解説者を続け、独特の語り口のテレビ解説で有名になった。
- ・ 映画をこよなく愛し、89年間映画を追い続け、そのすばらしさを伝え続けた人生であった。

〔寺島 ノブヘ〕 神戸市

- ・ 愛媛県宇和島出身。京都に出、25歳のとき派出看護婦となる。
- ・ 神戸で友愛派出看護婦会を設立。
- ・ 老人救済事業に着手して1899(明治32)年、老人単独では日本初といわれる友愛養老院（後の神戸養老院）を開設。
- ・ 同郷の城ノブ（後に神戸婦人同情会を創設）の協力も得て発展。個々に適応した処遇と世話に献身した。

〔宮本 留吉〕 神戸市

- ・ 小学校5年生から神戸ゴルフ倶楽部のキャディーとなり、日本のプロゴルファー第1号の福井覚治について修行した。その間、別荘番などをして精神力や観察力を鍛えた。
- ・ 23才で日本人で3人目のプロゴルファーになり、1926年茨木での関西プロ争覇戦で師匠の福井プロを抑えて初優勝を飾る。
- ・ 日本オープンで6度、日本プロで4度の優勝の快挙を成し遂げ、日本人として初めて全米、全英両オープンにも出場を果たした。
- ・ 「人の世は山坂多い旅の道」宮本留吉の書はこの一文から始まる。

〔A・C・シム〕 神戸市

- ・ スコットランド生まれの薬剤師。
- ・ 神戸に来てから後、ラムネの製造・販売で成功。スポーツの万能選手で、コウペレガッタ・アンド・アスレチック・クラブ(KR&AC)を創設、初代会長に。
- ・ また、居留地消防隊長として神戸市内はもちろん全国の災害救援に駆け回るなど、陽気で世話好き、義侠心に富んだ人柄は内外人から深く愛された。

〔田中 千代〕 神戸市

- ・ 昭和～平成時代の洋裁教育者、服飾デザイナー。
- ・ 明治39年8月9日生まれ。松井慶四郎の長女。
- ・ 地理学者の夫田中薫に同行して欧米に留学、洋裁を学ぶ。
- ・ 昭和7年、現在の神戸市東灘区に洋裁グループ臯会を創設。
- ・ 昭和12年田中千代服装学園を創設、昭和19年兵庫県初の県認可洋裁学園となる。
- ・ 民族衣装の研究・収集家としても知られ、平成元年東京渋谷に民族衣装館を設立。
- ・ 編著「田中千代服飾事典」など著書多数。
- ・ 平成11年6月28日死去。92歳。東京出身。双葉高女卒。

〔宮城 道雄〕 神戸市

- ・ 箏曲「春の海」の作曲者で、十七弦の発明者としても知られる。宮城（旧姓：菅）道雄は神戸に生まれ育ったことが、自分の音楽に西洋音楽のスピリットを与えることとなったと、後に語っている。
- ・ 生後1年にも満たない内に眼病を患い、弱視となり8才頃には完全に失明。そのため、人の勧めで近くに住んでいた生田流2代目、中島検校に弟子入りして琴を習う。
- ・ 11才で免許皆伝、師匠から一文字もらって中菅道雄と名乗る。
- ・ 昭和4年には、名曲「春の海」を発表。この曲の反響は大きく、日本のみならず、アメリカとフランスでもレコード化された。

〔間人 たね子〕 神戸市

- ・ 幼児教育者、保育事業家。
- ・ 神戸最古・最大の寺子屋の次女として生まれる。
- ・ 1886(明治19)年、日本で初めて福祉的性格を打ち出した幼稚園をほぼ独力で開設した。

〔ジョセフヒコ〕 加古郡播磨町

- ・ 新聞の父として知られる浜田彦蔵は、1837（天保8）年、播磨国（兵庫県）加古郡阿閉村古宮に生まれる。
- ・ 日本が開国する前に海難で漂流中アメリカ船に救助されて渡米、1858年帰化して初めてアメリカ市民権を獲得した日本人。
- ・ 1859年ヒコ（浜田彦蔵）は開国したばかりの日本に米国領事館通訳として帰国し、日米修好通商条約の締結、幕府の遣米使節の派遣などに奔走した。
- ・ その後、3度渡米し、リンカーン大統領とも会い、リンカーン直伝の民主主義を伊藤博文らに伝えるという務めも行った。英語を話せる者の少なかった幕末期、日米両国の橋渡しをした彼の業績は大きい。
- ・ さらに、1864年日本にもどったヒコは、民間最初の「海外新聞」を創刊した。
- ・ 通称アメリカ彦蔵。著作に「アメリカ彦蔵自伝」がある。

〔青山 忠誠〕 篠山市

- ・ 旧篠山藩の出身者で国家に尽くしている者が少ないことを残念に思った青山忠誠は、旧藩で学業に優れた青少年を東京の自邸に招き、学費を与えて育才事業を始めた。「尚志館」の始まりである。
- ・ さらに、国家に尽くす人材を東京で養成するにはその母体となる施設が必要と考え、明治9年に私立篠山中年学舎を設立した。
- ・ その後、篠山中年学舎は、郡民の支持で公立篠山中学校として広く郷土の子どもたちを教育する機関に発展していたが、明治16年、火事によって焼失した。明治19年の中学校令により公立中学校は一府県1中学校に限られたため、篠山中学校は廃校となった。
- ・ 忠誠はこれを無念に思い、「校舎は焼いても教育は焼くな」と、自責の念に苦悩していた校長市瀬禎太を励まし、有志に呼びかけ自らも多額の出資をして再興させた。これが、私立鳳鳴義塾となった。

〔井上 秀〕 丹波市春日町

- ・ 井上秀は明治8年春日町の豪農に生まれた。当時は、女子教育に対する理解が乏しく、また、男子でも進学が難しかった時代であった。
- ・ 秀は反対を機知と運で乗り越え、進学を許されて京都府立第一高女に入学した。寮で同室だった広岡亀子との縁で、女子教育の必要性に目覚め、日本女子大家政学部第一回生として入学、寮監に

もなった。

- ・ 明治37年日本女子大を終え、同窓会である桜風会幹事となった。その後、秀は、日本女子大学創設者の鳴瀬仁蔵の意志をくんで、女子教育の確立に邁進した。
- ・ 明治41年からコロンビア大学で家政学、シカゴ大学で社会学を学び、諸外国で女子教育の実際と家庭学教授を視察して自己の教育に生かした。

〔及川平治と附属小学校の先生たち〕 明石市

- ・ 太平洋戦争が激しさをましてきた頃、及川平治の銅像にも金属供出の命令が出た。
- ・ 当時の明石女子師範附属小学校の先生は、この胸像だけとは、胸像を布団に包み、宿直室の物入れに隠して終戦まで守り抜いた。
- ・ 及川平治は明治8年宮城県で生まれた。32才で明石女子師範附属小学校教諭兼主事となり、自学補習主義教育の理論と実践を確立しようとした。そして、分断式教育が必要であることを説き、動的教育を進めた。
- ・ 昭和12年附属小学校で落成式で及川平治の像が除幕された。そこには「新教育ノ幕ヲ開カン凡テノ人ノ為メニ凡テノ子等ノ為メニ私ノ凡テヲ捨テヨ」と刻まれていた。
- ・ 戦争の最中、後の附属小学校の職員が胸像を守り抜いたのは平治の教育実践と人となりがあったからである。

〔吉見 伝左衛門〕 丹波市市島町

- ・ 伝左衛門は明治15年市島町上牧の貧しい家に生まれ、13才で薬屋に奉公に出た。その後、猛勉強をし、教員の資格を取得し、竹田小学校で教鞭を執り、農民の精神を基調とした教育を展開した。
- ・ 当時は貧しい家が多く、学校へ行かせてもらえない子どもたちもあった。伝左衛門は、夜ごと各集落を回り、子どもを学校へやるよう説得して回った。
- ・ 後に、鴨庄村の村長に就任したが、村長の給料を受け取ることを辞退しただけでなく、村人の猛反対にもかかわらず、貧しさから村を救うために広大なため池（神池）をつくることを計画した。
- ・ 水がたまり始めると伝左衛門は、毎夜提灯の明かりで池に行き、水漏れの音がしないか土の上に腹這いになって耳を地面につけ、どんな音も聞き逃さないようにして水漏れを防いだ。
- ・ 完成した翌年に40年来の干ばつがあったが、鴨庄村は大豊作となった。

〔安平 政吉〕 多可町中区

- ・ 明治28年、中町生まれ。法学博士。最高検察庁検事。
- ・ 少年の頃より「大きな仕事」をしたいという思いを持ち、遊びも勉強もやり始めると夢中になっていた。
- ・ 家人を説得して上京し、昼間は生活費を得るために働き、夜は学校に通う生活をする。
- ・ 夜中ローソクをつけて勉強をしている自分に、近所の人から「毎晩火の玉が飛んで幽霊が出る」と噂され、巡査に取り調べを受ける。その際、古本屋で購入した本を盗んだと疑われたことを契機に、法律家になる決心をする。
- ・ 中町中学校には安平政吉から寄せられた色紙「立志」が残る。

〔大谷 武一〕 加西市

- ・ ラジオ体操の考案者
- ・ 旧姫路師範から東京高等師範（現筑波大）卒業後、米国に留学。
- ・ 帰国後、母校教授、文部省体育研究所技師などを務め、日本体操連盟（後の協会）の創立に尽力。
- ・ 1932（昭和7）年、米ロサンゼルスオリンピック総監督として参加。
- ・ ソフトボール、ハンドボールを日本に紹介、普及させた。
- ・ 学校体育指導の先導者。戦前のラジオ体操第一（1928年）の考案者。

〔山田 勢三郎〕 多可町中区

- ・ 多可郡中町東安田の篤農、山田忠右衛門の子。良質の安田米を年2,000俵収穫して、特定の酒造家に販売。
- ・ 1877（明治10）年頃、自作田の中で偶然見付けた大粒の穂が酒造好適米であることを発見。「山田穂」と命名する。
- ・ 後に短桿渡船（たんかんわたしぶね）と交配。滝野町出身の酒米試験地初代主任の藤川禎次が改良を重ね、1936（昭和11）年、日本一の酒米、山田錦を作り出した。

〔阿江 与助〕 加東市

- ・ 加古川の舟運を開く。
- ・ 加古郡河高村（現滝野町）の大久保七兵衛政高の次男。赤松氏の流れをくむ阿江家を継ぐ。
- ・ 1594（文禄3）年、姫路城主木下家定の命で、巨岩が横たわり舟運が遮断されていた加古川の闘龍灘付近の開削に着手しこれを成功させる。
- ・ さらに、加東市の上流、丹波・本郷（現丹波市氷上町）までを改修。瀬戸内、丹波間約50kmの通船を可能にした。

2 その他の参考資料

- 兵庫県教育委員会発行（平成9年3月）

「防災教育絵本 あしたもあそぼうね」（幼稚園用）

「防災教育副読本 あすに生きる 阪神・淡路大震災から学ぶ」（小学校低学年用）

「防災教育副読本 明日に生きる 阪神・淡路大震災から学ぶ」（小学校高学年用）

「防災教育副読本 明日に生きる 阪神・淡路大震災から学ぶ」（中学生用）

この副読本は、阪神・淡路大震災を語り伝え、そこから学んだ教訓を兵庫県だけでなく、全国に向けて、また、世界に向けても伝えていこうという願いから作られたものであり、兵庫県があの大震災から作り上げた貴重な財産であるといえる。

この副読本では「生命の尊重」を軸として、子どもたちに人間の在り方・生き方を認識させていくことをねらいしている。

題材の多くは、子どもたちの作文や救援活動に携わった方々の手記などであり、「事実」の持っている「重さ」が、読む人の心を揺さぶり、一文一文おろそかにしてはならないという気持ちかわいてくる。平成7年1月17日にこの兵庫で起こった事実をありのままに読み取っていくという過程を通して、未曾有の出来事に遭遇した当時の人々の様々な思いを現在の自分と重ね、自分自身のこれからの在り方や生き方を考える手がかりとすることができる。

また、現在もそれぞれの校区に残っている大震災の傷跡や当時の校区の様子を調べ直して、地域教材を作成するための資料としての活用が期待できる。

県下の学校配布以外の入手については、兵庫県学校厚生会福祉厚生部に問い合わせ願います。
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通4-7-34 TEL 078-331-9311 FAX 078-331-8050

- ひょうごゆかりの百人展実行委員会選定

「ひょうごゆかりの百人」

<http://web.pref.hyogo.jp/kouhou/siryokan/yukari.html>（P D F ファイル：25 K B）

ひょうごゆかりの百人は、明治以降、兵庫県内で活躍した人物や兵庫県出身者で活躍した100人である。

選定方法は、県民や市町などから推薦のあった候補者から、選定委員会で選定の上、ひょうごゆかりの百人展開催実行委員会により決定された。選定にあたっては、個人の業績のほか、地域・性別・活躍した分野のバランスを考慮している。

- 神戸新聞総合出版センター発行（078-362-7140 U R L <http://www.kobe-np.co.jp/syuppan/>）

「これだけは知っておきたい神戸ゆかりの50人」

「これだけは知っておきたい神戸ゆかりの50人 P A R T 2」

「これだけは知っておきたい阪神ゆかりの50人」

「これだけは知っておきたい播磨ゆかりの50人」

「これだけは知っておきたい淡路ゆかりの50人」

「これだけは知っておきたい但馬ゆかりの50人」

「これだけは知っておきたい丹波ゆかりの50人」（平成18年5月発行予定）

3 児童生徒が調べるワークシート例

子ども自身が社会科や総合的な学習の時間また、生活科等の時間においてフィールドワークや聞き取り調査を行うことにより、地域に貢献した人や、今もすばらしい生き方をしている人を発見することも期待できる。

そのような人と関係した事物に触れたり、直接お話を聞いたりすることができれば、子どもたちが自ら新たな価値を実感することもできる。

また、子どもたちが調べた素材をもとにして、学校として新たな地域教材を作成することができれば、そこから教科等と道徳の時間の関連を図ることも可能となる。

〈ワークシート例〉

あなたの住む町があなたのふるさと

あなたの住む町の小さな歴史や物語をさがして大切にしていきましょう。

- ☐ わたしのちかくにも、なにかにうちこんだりがんばった人がいます。

その人の名まえは

- ☐ その人はこんなことをしました。

- ☐ わたしはその人からこんなことを学びました。

小さな歴史



がんばった人



大切な活動



道德教育推進協議会委員

区 分	氏 名	職 名	所 属 等
学 識 経 験 者	横 山 利 弘	教 授	関西学院大学
	桂 正 孝	教 授	宝塚造形芸術大学
地 域 住 民 等	青 木 百合子	会 長	地区連合PTA（小野市）
教 育 機 関	渡 信 雄	指導主事	兵庫県立教育研修所
	桜 井 輝 之	副所長	兵庫教育文化研究所
校 園 長 会	平 野 孝 音	園 長	兵庫県国公立幼稚園長会
	高 杉 昌 明	校 長	兵庫県小学校長会
	行 本 美千子	校 長	兵庫県中学校長会
学 校 関 係 者	平 松 憲 一	教 諭	神戸市立八多中学校
	稲 垣 久 和	教 諭	宝塚市立御殿山中学校
	藤 井 丈 夫	教 諭	播磨町立蓮池小学校
	原 昭二郎	教 諭	高砂市立伊保小学校
	衣 笠 明	教 諭	西脇市立芳田小学校
	福 田 史 江	教 諭	加東市立滝野中学校
	三 輪 加代子	教 諭	姫路市立網干小学校
	大 塚 高 誉	教 諭	神河町立大河内中学校
	松 田 敏 則	教 諭	市川町立市川中学校
	福 本 淑 子	教 諭	赤穂市立坂越小学校
	伊 崎 美年子	教 諭	豊岡市立小坂小学校
	前 田 洋 二	教 諭	丹波市立和田中学校
	久 保 淳 二	教 諭	洲本市立堺小学校

「地域教材の開発」指導資料作成委員会委員

区 分	地 区	学 校 名	職 名	氏 名
アドバイザー		兵庫教育大学大学院	教 授	渡 邊 満
小学校低学年部会	阪神南	西宮市立平木小学校	教 諭	上 田 寿 一
	東播磨	明石市立大観小学校	教 諭	土 肥 貴 子
	西播磨	たつの市立神岡小学校	教 諭	大 西 希巳代
小学校中学年部会	阪神北	三田市立藍小学校	教 諭	足 立 延 也
	丹 波	篠山市立西紀小学校	教 諭	塚 本 一 男
	中播磨	姫路市立苅野小学校	教 諭	則 定 恵 子
小学校高学年部会	但 馬	豊岡市立港西小学校	教 諭	吉 岡 美智子
	淡 路	南あわじ市立榎列小学校	教 諭	仲 野 敬 子
	神 戸	神戸市立池田小学校	教 諭	松 崎 信 也
中学校部会	丹 波	篠山市立篠山中学校	教 諭	吉 見 達 也
	神 戸	神戸市立魚崎中学校	教 諭	伊 東 久 雄
	北播磨	加東市立滝野中学校	教 諭	福 田 史 江

「地域教材の開発」指導資料 ～魅力ある道德の授業づくりのために～

発行 兵庫県教育委員会

連絡先 〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

TEL (078) 341-7711 (代表)



古紙配合率100%再生紙を使用しています

17教T1- 021A4